

茨城県教育財団文化財調査報告第333集

米根井向遺跡

主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス
整備事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

平成 22 年 3 月

茨城県竜ヶ崎工事事務所
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第333集

こめ ね い むかい
米根井向遺跡

主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス
整備事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

平成 22 年 3 月

茨城県竜ヶ崎工事事務所
財団法人茨城県教育財団



遺跡遠景（南から）



遺跡全景（北部）

序

茨城県では、長期的な展望のもとに県土の基盤整備が行われています。特に道路網については、県土60分構想の具体化や円滑な都市交通の確保を図るなど、ゆとりある社会の実現を目指して整備が進められているところです。

その一環として、茨城県竜ヶ崎工事事務所において、首都圏中央連絡自動車道阿見東インターチェンジへのアクセスや周辺地域の交通渋滞解消等を目的として主要地方道竜ヶ崎阿見バイパス建設事業が計画されました。

しかしながら、この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である米根井向遺跡が所在することから、これを記録保存の方法により保護する必要があるため、当財団が茨城県竜ヶ崎工事事務所から同遺跡の埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成20年6月から同年7月までの2か月間にわたってこれを実施しました。

本書は、その調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、委託者であります茨城県竜ヶ崎工事事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、阿見町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成22年3月

財団法人茨城県教育財団
理事長 稲葉節生

例 言

- 1 本書は、茨城県竜ヶ崎工事事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成 20 年度に発掘調査を実施した、茨城県稲敷郡阿見町大字上条フタヒ 1634 番地の 14 に所在する^{こめねいむかい}米根井 向 遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調 査 平成 20 年 6 月 2 日～7 月 31 日
整 理 平成 21 年 4 月 1 日～6 月 30 日
- 3 発掘調査は、調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 三谷 正
主任 調 査 員 市村俊英
調 査 員 鹿島直樹
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、調査員鹿島直樹が担当した。

凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし、 $X = + 880 \text{ m}$ 、 $Y = + 37,360 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …, 西から東へ 1, 2, 3 … とし、「A 1 区」「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j, 西から東へ 1, 2, 3 … 0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SI - 住居跡 SK - 土坑 SD - 溝跡 TP - 陥し穴

遺物 P - 土器 TP - 拓本記録土器 DP - 土製品 Q - 石器・石製品

土層 K - 攪乱

3 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著 日本色研事業株式会社）を使用した。

4 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、遺構実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺で掲載した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 = 焼土

 = 炉・竈火床面・繊維土器断面

 = 竈構築材・黒色処理

● = 土器

○ = 土製品

□ = 石器・石製品

----- 硬化面

----- 焼土塊

5 遺物観察表・遺構一覧表の表記については、次のとおりである。

(1) 遺物番号は通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(2) 計測値の () 内の数値は現存値を、[] 内の数値は推定値を示した。計測値の単位は、m, cm, g で示した。大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に単位を表示した。

(3) 備考欄は、土器の残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

6 竪穴住居跡の主軸は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した（例 N - 10° - E）。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 縄文時代の遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡	10
(2) 炉跡	11
(3) 陥し穴	11
2 弥生時代の遺構と遺物	12
竪穴住居跡	12
3 古墳時代の遺構と遺物	14
(1) 竪穴住居跡	14
(2) 土坑	43
4 平安時代の遺構と遺物	44
(1) 竪穴住居跡	44
(2) 土坑	45
5 その他の遺構と遺物	47
(1) 竪穴住居跡	47
(2) 土坑	48
(3) 溝跡	52
(4) 遺構外出土遺物	53
第4節 まとめ	54
写真図版	
抄 録	

こめねいむかいいせきがいよう 米根井向遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

遺跡は阿見東部の清明川右岸の台地上に位置しています。今回の発掘調査は主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス整備事業に先立って行いました。

調査の内容

調査によって、この遺跡は縄文時代から平安時代にかけて人々が活動した跡であることが分かりました。時代別では、縄文時代の竪穴住居跡1軒、陥し穴1基、弥生時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代の竪穴住居跡10軒、平安時代の竪穴住居跡1軒などです。

特に古墳時代の住居跡が多く見つかり、集落を営んでいたことが確認できました。なかでも10軒のうち8軒は古墳時代中ごろの住居跡であり、そのうち3軒からは「滑石」と呼ばれる軟質の石が多量に発見されました。滑石は軟らかいために加工がしやすい石として知られていたようです。そのため、当時のアクセサリーである白玉や管玉などを作る素材としてよく用いられていました。

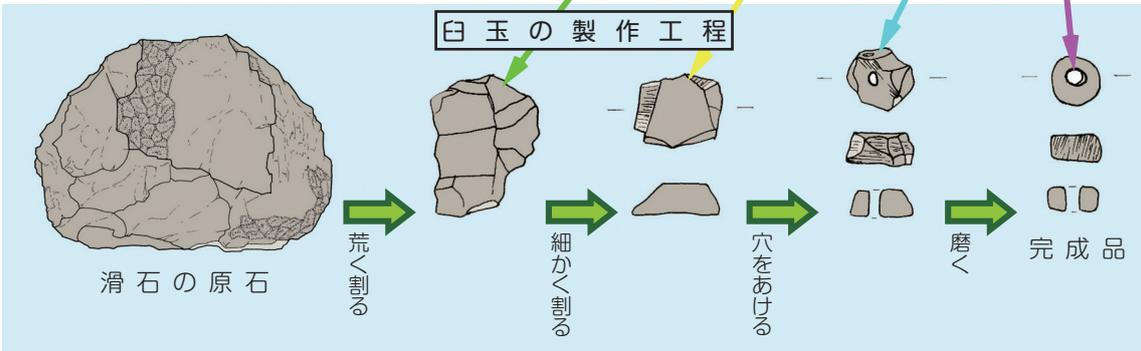


清明川方向（北方）から遺跡を望む



床面に滑石片がたくさん出土しました。

白玉と失敗作の滑石破片



かまど す 竈に据えられたままの甕



竈の説明を聞いて驚く小学生

調査の成果

調査の結果、調査区域からは古墳時代中ごろを中心とする集落跡の一部を確認できました。とくに古墳時代中ごろの住居跡からは、白玉を作る過程で出る石の破片や作る途中のもの、失敗したものなどの滑石が多く出土しました。このことから、この集落のどこかで白玉を作っていたことが分かりました。

今回の調査した場所は、台地上に広がると思われる集落の東側の一部分で、集落の全体像ははっきりできませんでしたが、遺跡の北側を流れる清明川を望みながら古墳時代の人々が、懸命に白玉作りを行っていた姿を思い浮かべることができるのではないのでしょうか。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成17年4月8日、茨城県竜ヶ崎土木事務所長から、茨城県教育委員会教育長あてに、主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。これを受けて茨城県教育委員会は、平成17年5月26日に現地踏査を、平成19年10月4、5日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成19年10月18日、茨城県教育委員会教育長から茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに、事業地内に米根井向遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成20年1月29日、茨城県竜ヶ崎土木事務所長から、茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知が提出された。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成20年2月5日、茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成20年2月26日、茨城県竜ヶ崎土木事務所長から、茨城県教育委員会教育長あてに、主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書が提出された。平成20年2月26日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに、米根井向遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県竜ヶ崎土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成20年6月2日から平成20年7月31日まで、米根井向遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

調査は、平成20年6月2日から平成20年7月31日まで実施した。その概要を表で記載する。

期間 工程	6月	7月
調査準備 表土除去 遺構確認	■	
遺構調査	■	
遺物洗浄 注記作業 写真整理	■	
補足調査 撤収		■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

米根井向遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町大字上条フタヒ 1634 番地の 14 に所在している。

阿見町は茨城県の南部に位置し、北は霞ヶ浦南岸に面し、東は美浦村、南は稲敷市及び牛久市、西は土浦市とそれぞれ境を接している。地形は、洪積台地である標高 25～28 m の稲敷台地と、霞ヶ浦水系及び利根川水系による沖積地からなっている。町域の稲敷台地は、多くの河川によって開析され、樹枝状の入り組んだ複雑な地形を形成している。主な河川は小野川支流の乙戸川と桂川、霞ヶ浦に流れ込む清明川である。

当地域の地質は新生代第四期洪積世古東京湾時代に堆積した海生の砂層である成田層を基盤とし、その上に竜ヶ崎層と呼ばれる斜交層理の顕著な砂礫層、さらに常総粘土層と呼ばれる厚さ 0.3～5.0 m の泥質粘土層、厚さ 0.5～2.0 m の関東ローム層が連続して堆積し、最上部は腐植土層となっている。

当遺跡は、阿見一区北の台地を水源とする、清明川右岸の標高 16～19 m の台地上に位置している。台地の縁辺部は清明川によって樹枝状に開析されており、長く東西に延びている。遺跡は、その台地上の清明川に面した東部に広がっている。調査前の現況は山林・雑種地である。

第2節 歴史的環境

阿見町域では、旧石器時代から近世までの 211 か所の遺跡が『茨城県遺跡地図』¹⁾ に掲載されている。ここでは、当遺跡周辺に分布している遺跡を中心に概要を記述する。

旧石器時代の遺跡は、5 か所が確認され、これらは石器集中地点として報告されている。星合遺跡〈25〉、^{じっごくてらこ}実穀寺子遺跡〈40〉、^{やのさわ}谷ノ沢遺跡〈36〉、^{やくしり}薬師入遺跡〈28〉、^{おっばらにし}追原西遺跡〈3〉などがある。星合遺跡ではナイフ形石器、スクレイパーなどが確認されている²⁾。薬師入遺跡では石核、楔形石器³⁾、谷ノ沢遺跡では尖頭器、細石刃など⁴⁾、実穀寺子遺跡ではナイフ形石器、角錐状石器、尖頭器など⁵⁾が確認されている。

縄文時代の遺跡は、54 か所が掲載されている。縄文時代早期末から前期前半にかけて最も海水面が上昇した縄文海進時には、今の霞ヶ浦水域や低地にも海が浸入していたことが貝塚の分布からうかがえる。当地域における縄文時代の貝塚は 16 か所確認されている。周辺には、^{しまづ}島津貝塚〈9〉、^{うち}イタチ内貝塚〈11〉、^{みやだいら}宮平貝塚〈12〉などの貝塚のほか、^{なかのだい}星合遺跡、^{しまづ}中ノ台遺跡〈24〉、^{しまづ}島津遺跡〈8〉、^{たいら}平遺跡〈20〉、^{ひらうちじろう}平内次郎遺跡〈23〉、^{やま}ナギ山遺跡〈34〉などがある。島津貝塚群とそれを含む島津遺跡は中期から後期の大規模な集落跡で、袋状土坑や円筒状土坑、早期の炉穴などが確認されている⁶⁾。星合遺跡では中期の住居跡 1 軒が確認されているが、表土中から石鏃が多数出土していることから、キャンプサイトの性格を持った場と想定されている⁷⁾。中ノ台遺跡からは住居跡 5 軒、土坑 2 基が確認されている。住居跡からは遺物がほとんど出土していないため、時期の特定は困難としている。土坑は前期の土器を出土する性格不明のものである⁸⁾。

弥生時代の遺跡は、7 か所が掲載されているが、その後の調査により、15 遺跡に増加している。当遺跡周辺には、^{にしのいり}西ノ入遺跡〈4〉、^{ことまき}追原西遺跡、^{さくらだて}五斗蒔古墳〈2〉、^{たかく}桜立遺跡〈26〉、^{たかく}竹来遺跡〈31〉、^{とう}島津遺跡、^き道記遺跡〈38〉、^{しもはら}薬師入遺跡、^{みやわき}下原遺跡〈44〉、^{とうだ}宮脇遺跡〈42〉、^{はなぶさ}頭田遺跡〈7〉、^{しもこいけ}花房遺跡〈35〉、^{あみひがし}下小池遺跡〈37〉、^{あみひがし}阿見東遺跡〈43〉などがある。桂川流域の薬師入遺跡で 4 軒、清明川流域では竹来遺跡の 1 軒、島津遺跡で 5 軒、

宮脇遺跡、阿見東遺跡、頭田遺跡でそれぞれ9軒の住居跡が確認されている。これらはすべて後期のものである。

古墳時代の遺跡は、古墳を含む130か所が登載されている。当遺跡周辺には、イタチ内古墳群〈10〉、入谷津古墳群〈22〉、五斗蒔古墳、君島古墳群〈33〉、実穀古墳群〈39〉などの古墳・古墳群がある。清明川流域の入谷津古墳群では円墳3基のうち1基が調査され、出土遺物から後期のものと確認された⁹⁾。五斗蒔古墳は削平を受け石棺が出土しており、円墳と考えられている。君島古墳群は現在7基の古墳が確認されている。3号墳は円墳で、石棺から直刀・甲冑などが出土し、円筒埴輪などが見ついている。11号墳からは土師器・須恵器などの土器類のほか、形象・円筒埴輪なども確認されている¹⁰⁾。イタチ内古墳群では3基の方墳が調査され、横穴式石室を採用した後期の古墳であることが確認されている¹¹⁾。乙戸川流域では、実穀古墳群では7基の古墳のうち4基が調査され、5世紀末から6世紀後葉にかけての古墳群であることが判明した。墳丘内からはガラス小玉や直刀・鉄鏃・刀子などが出土し、周溝内の覆土中からは土師器・須恵器のほかに円筒埴輪などが見ついている¹²⁾。そのほか集落遺跡では、星合遺跡、島津遺跡、梶内台遺跡〈6〉、烏瓜台遺跡〈5〉、道心台遺跡〈13〉、小作遺跡〈16〉、根方遺跡〈17〉、桜立遺跡、平内次郎遺跡、篠崎遺跡〈29〉、実穀寺子西遺跡〈41〉などがある。清明川流域では、星合遺跡で前期の住居跡3軒と後期初頭の住居跡16軒が調査され、祭祀場や初期竈などを持つ住居跡が確認されている¹³⁾。また、宮脇遺跡からは中期の住居跡24軒、島津遺跡からは中期から後期にかけての集落跡が確認されている。乙戸川流域の実穀古墳群からは中期の住居跡が7軒確認され、台地中央部に広がる実穀寺子遺跡は同じく中期の集落跡であり、住居跡52軒、方形竪穴状遺構1基、方形周溝墓2基、土坑18基が確認されている¹⁴⁾。また、実穀古墳群に隣接する実穀寺子西遺跡からは中期の住居跡6軒が確認され、滑石製模造品が出土している¹⁵⁾。

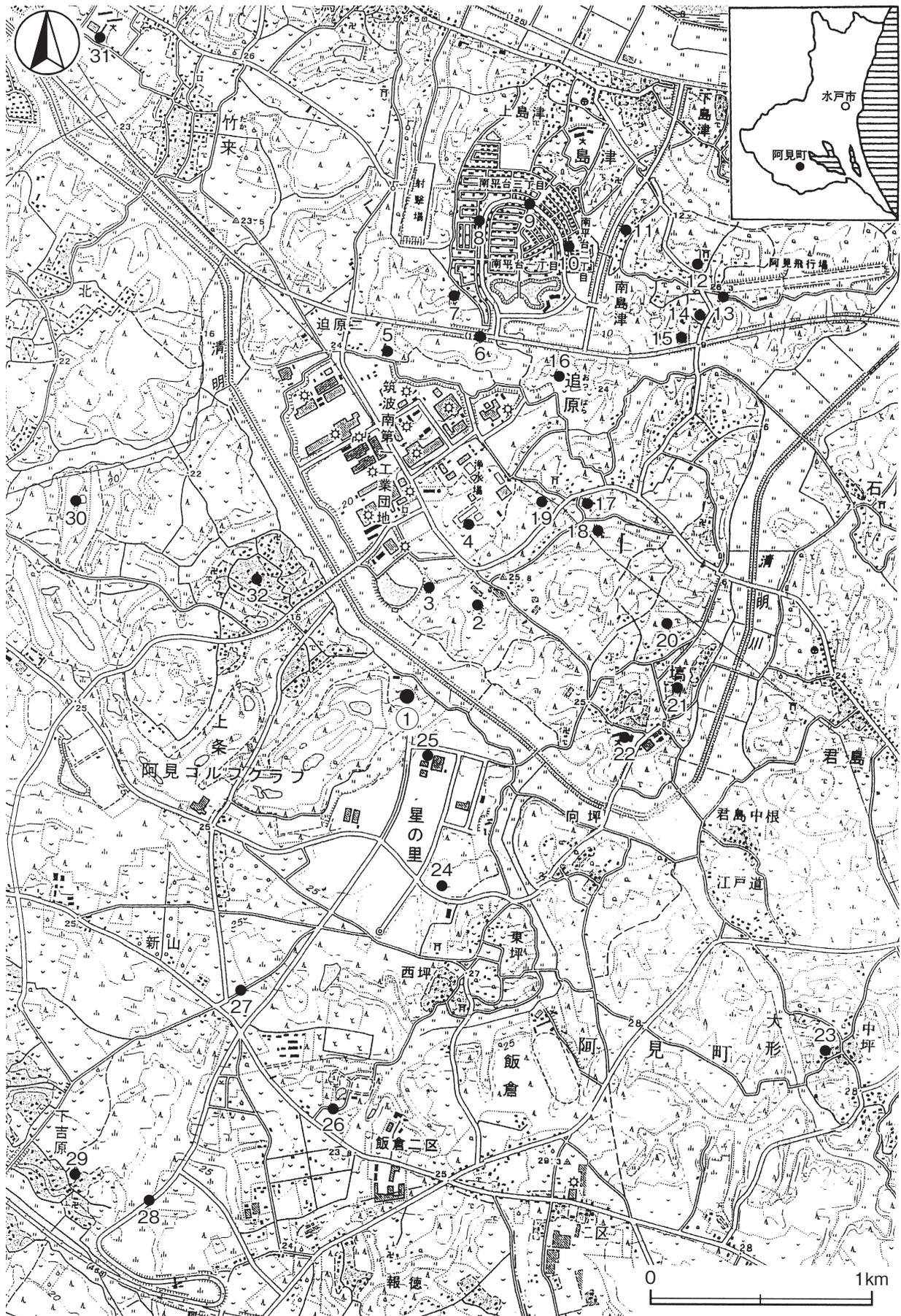
奈良・平安時代の遺跡は、55か所が登載されている。当地域は律令期には信太郡子方郷に属している。当遺跡周辺には、諏訪廃寺〈19〉、星合遺跡、中ノ台遺跡、梶内台遺跡、烏瓜台遺跡、道心台遺跡、平内次郎遺跡などがある。諏訪廃寺からは、奈良時代前期のものと推定される多くの布目瓦が出土し、このことから信太郡の郡寺の可能性が指摘されている¹⁶⁾。清明川流域の平安時代の遺跡である星合遺跡からは、住居跡3軒、土坑墓と想定される土坑3基、中ノ台遺跡からは住居跡2軒、梶内台遺跡からは住居跡13軒、竪穴状遺構9基、溝跡5条、タタラ状遺構が確認されている¹⁷⁾。

中世の遺跡は、33か所が登録されている。当遺跡周辺には島津城跡〈14〉、橋城跡〈21〉、上条城跡〈32〉などの城跡をはじめ、長泰寺院跡〈15〉、蔵福寺院跡〈18〉などの寺院跡、若栗寄居館跡〈30〉や二重堀遺跡〈27〉などが確認されている。島津城跡は堀跡や土塁跡などは遺存しているが、建物の配置などは不明である。上条城跡の北西に位置する若栗寄居館跡は主郭・土塁・堀が調査され、清明川と桂川に挟まれた台地上に位置する二重堀遺跡は調査の結果、土塁と堀が主体の城郭関連遺跡と考えられている¹⁸⁾。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1及び第1図の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 2) 矢ノ倉正男・寺門千勝「阿見東部工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書 星合遺跡・中ノ台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第137集 1997年9月
- 3) a 駒澤悦郎「薬師入遺跡 阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第239集 2005年3月
b 綿引英樹・小林悟「薬師入遺跡2 阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第296集 2008年3月
- 4) 綿引英樹・後藤孝行「谷ノ沢遺跡・手接遺跡・花房遺跡・大日遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第212集 2004年3月
- 5) a 浅野和久「荒川本郷地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 実穀古墳群・実穀寺子遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第144集 1999年3月
b 宮崎修士・柴田博行「荒川本郷地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 実穀寺子遺跡2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第151集 1999年3月

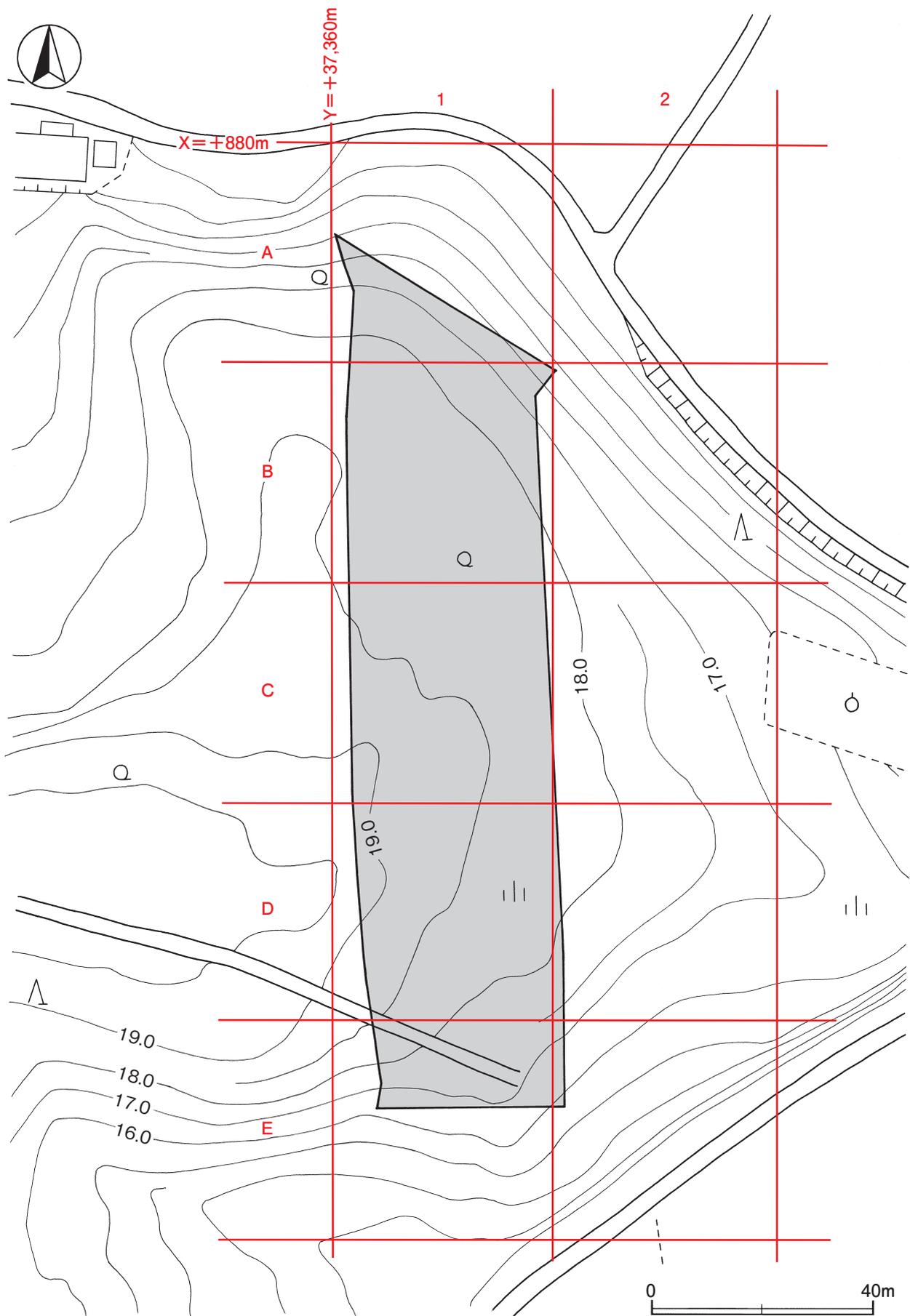


第1図 米根井向遺跡周辺遺跡位置図 (国土地理院 25,000 分の 1 「土浦・玉造・龍ヶ崎・佐原」)

- 6) a 汀安衛『茨城県稲敷郡阿見町鳥津遺跡調査報告書』阿見町教育委員会 1997年3月
 b 鳥津遺跡発掘調査会『鳥津遺跡(鳥津1・2・3・4区)』茨城県・阿見町教育委員会 1998年9月
 c 鳥津遺跡発掘調査会『鳥津遺跡(貝塚1・2区)』茨城県・阿見町教育委員会 1998年9月
 7) 註2文献と同じ
 8) 註2文献と同じ
 9) 阿見町史編さん委員会『阿見町史』阿見町 1983年3月
 10) 註9文献と同じ
 11) 高木國男『鳥津遺跡(イタチ内古墳群・イタチ内貝塚・鳥津5・6区)発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1994年9月
 12) 註5文献と同じ
 13) 註2文献と同じ
 14) 註5文献と同じ
 15) 宮崎修士・柴田博行「(仮称)荒川本郷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 実穀寺子西遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第156集 2000年3月
 16) 註9文献と同じ
 17) 高木國男『梶内台遺跡』阿見町教育委員会 1987年12月
 18) 大関武「二重堀遺跡 主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第297集 2008年3月

表1 米根井向遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世
①	米根井向遺跡		○	○	○	○		23	平内次郎遺跡		○		○	○		
2	五斗蒔古墳			○	○			24	中ノ台遺跡		○		○	○		
3	追原西遺跡	○		○				25	星合遺跡	○	○		○	○		
4	西ノ入遺跡			○				26	桜立遺跡				○			
5	烏瓜台遺跡				○	○		27	二重堀遺跡		○				○	
6	梶内台遺跡				○	○	○	28	薬師入遺跡	○	○	○	○		○	
7	頭田遺跡		○	○	○	○	○	29	篠崎遺跡				○			
8	鳥津遺跡		○	○	○	○	○	30	若栗寄居館跡						○	
9	鳥津貝塚		○		○	○	○	31	竹来遺跡		○	○	○	○	○	
10	イタチ内古墳群		○		○		○	32	上条城跡						○	
11	イタチ内貝塚		○					33	君島古墳群		○		○			
12	宮平貝塚		○					34	ナギ山遺跡		○		○		○	○
13	道心台遺跡		○		○	○	○	35	花房遺跡			○	○	○		
14	鳥津城跡						○	36	谷ノ沢遺跡	○	○					
15	長泰寺院跡						○	37	下小池遺跡		○	○	○	○		
16	小作遺跡				○			38	道記遺跡		○	○	○			
17	根方遺跡		○		○			39	実穀古墳群	○			○			
18	蔵福寺院跡						○	40	実穀寺子遺跡	○	○		○	○		
19	諏訪廃寺					○		41	実穀寺子西遺跡		○		○			
20	平遺跡		○					42	宮脇遺跡			○	○	○		
21	橘城跡						○	43	阿見東遺跡			○	○			
22	入谷津古墳群				○			44	下原遺跡		○	○	○			



第2図 米根井向遺跡調査区設定図

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

米根井向遺跡は、清明川右岸の標高16～19mの台地上に立地している。調査面積は6,000㎡で、調査前の現況は山林・雑種地である。

調査によって、古墳時代中期後葉の集落跡を中心とする、縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが分かった。確認できた遺構は、竪穴住居跡14軒（縄文時代1, 弥生時代1, 古墳時代10, 平安時代1, 時期不明1）、土坑44基（古墳時代1, 平安時代2, 時期不明41）、溝跡5条（時期不明）、炉跡1基（縄文時代）、陥し穴1基（縄文時代）である。

遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に10箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（壺）、土師器（坏・高坏・甕・甑）、須恵器（坏・蓋）、土製品（球状土錘・不明土製品）、石器（ナイフ形石器）、石製品（白玉）、滑石剥片などである。

第2節 基本層序

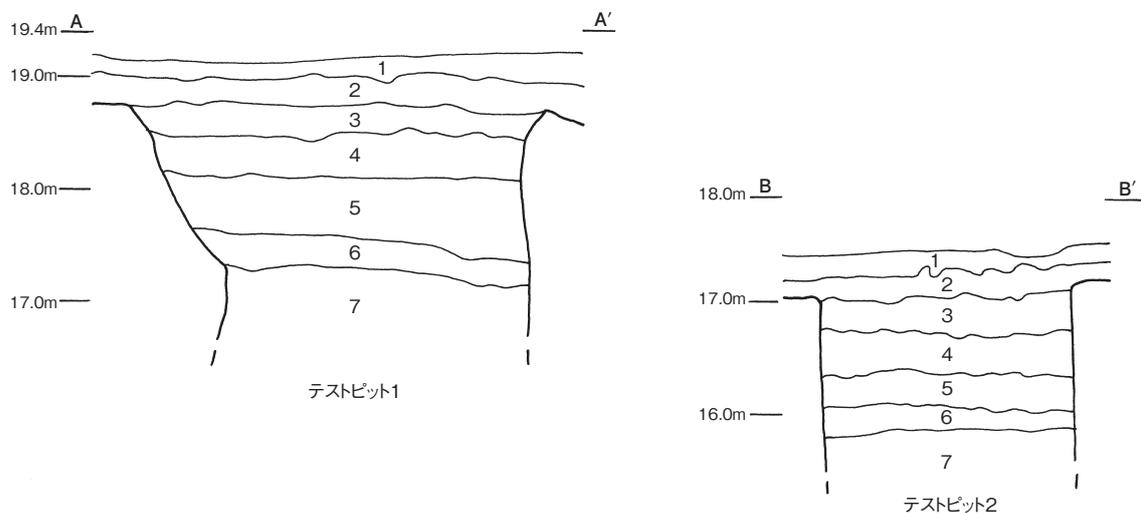
調査区北東部（B1d9区）及び南西部（D1d2区）にテストピットを設定し、基本土層（第3図）の堆積状況の観察を行った。北東部は清明川に向かって傾斜している標高の低い平坦面に、南西部は調査区内の標高の高い平坦面に設定した。土層の観察結果は、以下の通りである。

第1層は黒褐色を呈する耕作土層で、粘性・締まりともに弱く、層厚は4～20cmである。

第2層はにぶい黄褐色を呈する耕作土層からソフトローム層への漸移層で、粘性は普通で、締まりは弱い。層厚は20～30cmである。

第3層は褐色を呈するソフトローム層で、粘性・締まりともに普通で、層厚は18～40cmである。

第4層は褐色を呈するソフトローム層からハードローム層への漸移層で、粘性・締まりともに普通で、層厚は30～45cmである。



第3図 基本土層図

第5層は黄褐色を呈するハードローム層で、粘性は普通で、締まりは強く、層厚は22～70cmである。

第6層はにぶい黄褐色を呈するハードローム層から常総粘土層への漸移層で、粘性・締まりともに強く、層厚は10～30cmである。

第7層はにぶい黄褐色を呈する常総粘土層で、粘性・締まりともに強く、層厚は4cm以上である。

なお、遺構は第3層上面で確認されている。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は竪穴住居跡1軒、炉跡1基、陥し穴1基が確認されている。以下、検出した遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第12号住居跡（第4図）

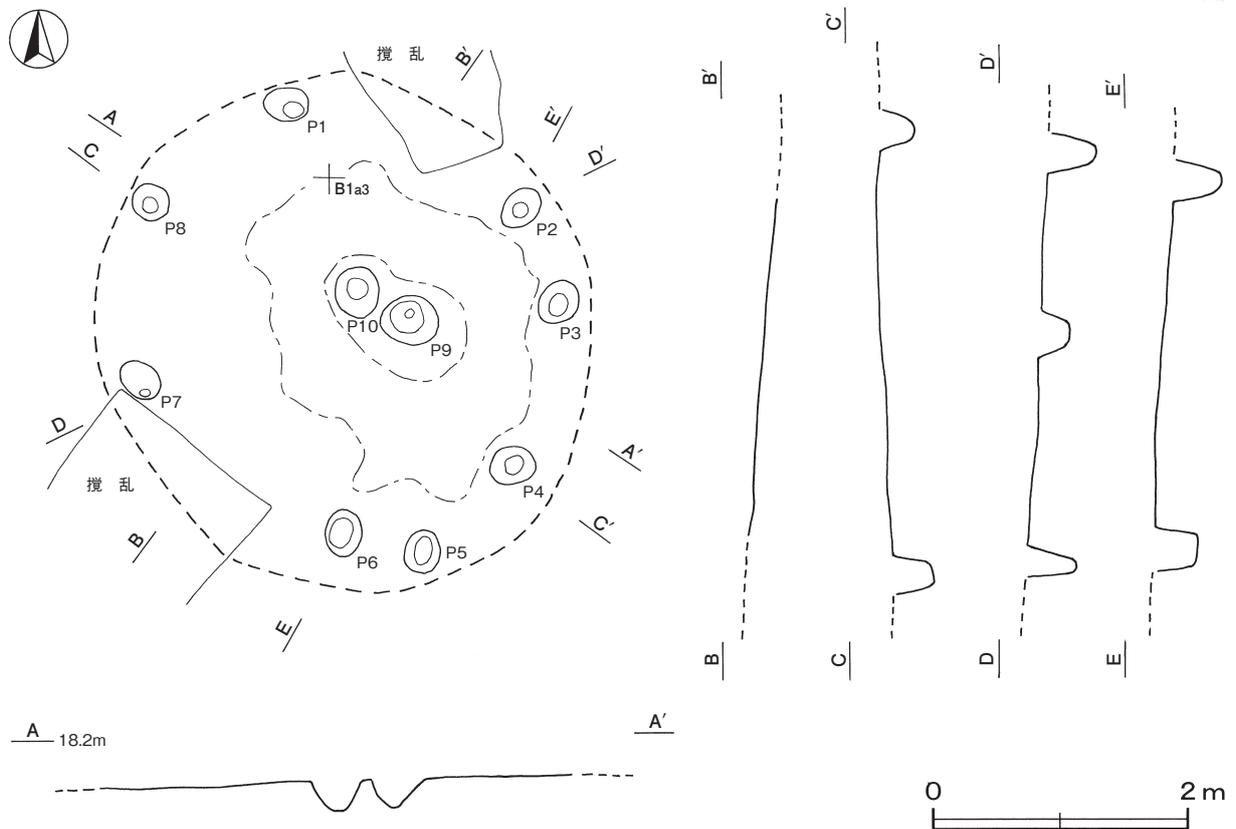
位置 調査区北西部のB1a3区、標高18.0mの台地縁辺部の傾斜面に位置している。

規模と形状 ピットの配置から、径4.0mほどの円形と推定される。

床 北東部に向かって傾斜し、柱穴内側の東部東寄りに硬化面が認められる。

ピット 10か所。P1～P8は深さ18～42cmで、配置から柱穴と考えられる。P9は深さ20cm、P10は深さ24cmであるが、性格は不明である。

所見 詳細な時期は、遺物が出土していないため不明であるが、遺構の形状から縄文時代とした。



第4図 第12号住居跡実測図

(2) 炉跡

第1号炉跡 (第5図)

位置 調査区中央部のC 1 f6区, 標高18.0mの台地平坦部に位置している。

確認状況 周辺に本跡に伴う施設は認められず, 遺存状況はあまり良くない。

規模と形状 東部は攪乱を受けており, 確認できた規模は長径1.32m, 推定短径1.06mの楕円形で, 掘り込みが若干認められる。長径方向はN - 18° - Eである。

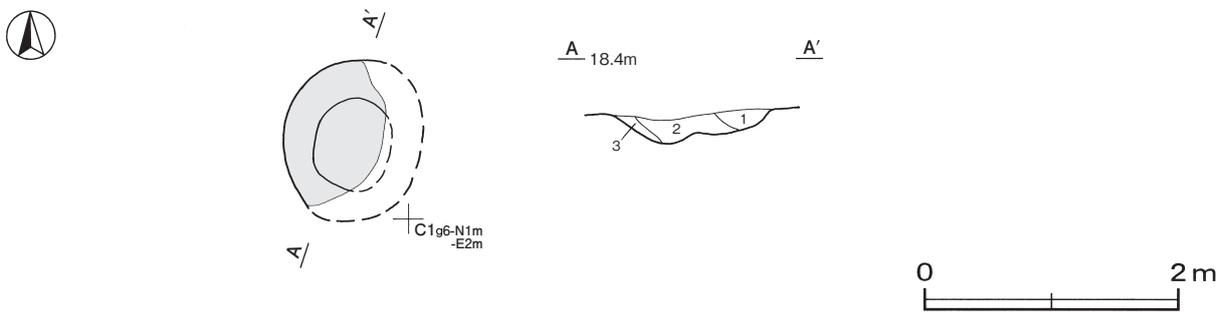
覆土 3層に分層され, 第1~3層上面が火床面である。

土層解説

1 赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子微量
2 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

3 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子微量

所見 詳細な時期は, 遺物が出土していないため不明であるが, 検出状況から縄文時代とした。



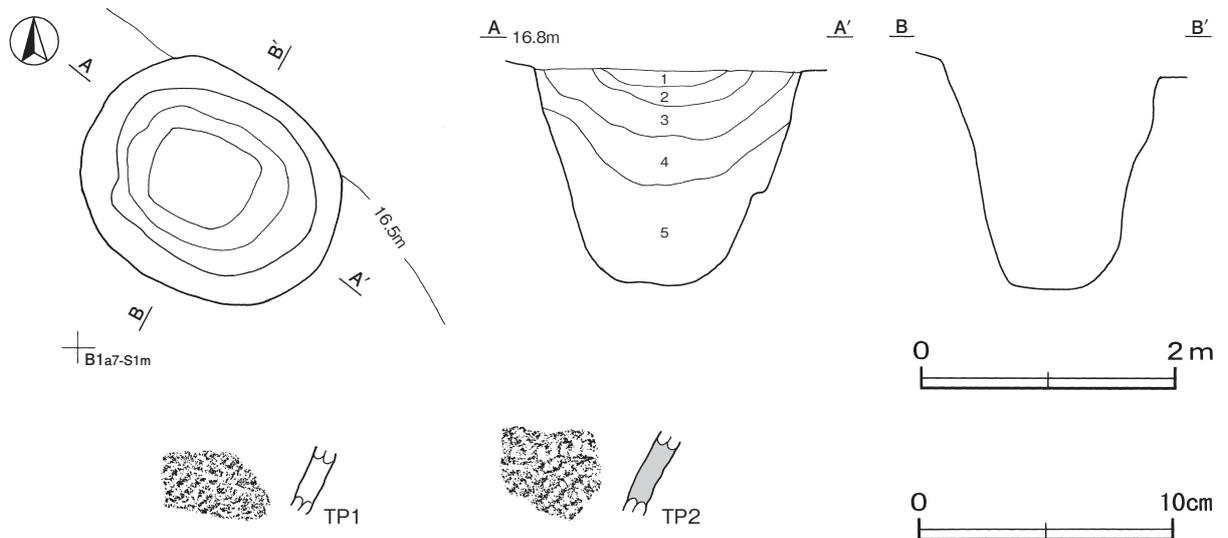
第5図 第1号炉跡実測図

(3) 陥し穴

第1号陥し穴 (第6図)

位置 調査区北部のB 1 a7区, 標高16.5mの台地縁辺部の傾斜面に位置している。

規模と形状 長径2.14m, 短径1.75mの楕円形で, 長径方向はN - 52° - Wで, 台地の斜面に対してほぼ平行している。深さは172cmで, 壁は直立している。



第6図 第1号陥し穴・出土遺物実測図

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1 黒 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2 灰 褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	5 褐色	ロームブロック少量
3 極 暗 褐色	炭化物・ローム粒子微量		

遺物出土状況 縄文土器片2点（深鉢）が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期中葉に比定できる。

第1号陥し穴出土遺物観察表（第6図）

番号	種別	器種	胎 土	色調	焼成	文 様 の 特 徴 ほ か	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	単節縄文LR	覆土中	
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・繊維	褐	普通	単節縄文LR、RLを羽状構成 端部はループを成している	覆土中	

2 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は竪穴住居跡1軒が確認されている。以下、検出した遺構と遺物について記述する。

竪穴住居跡

第14号住居跡（第7図）

位置 調査区中央部やや北西寄りのB1j4区、標高18.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 東部が削平を受けており、確認できた規模は長径3.42m、推定短径3.27mの円形と推定される。主軸方向はN-23°-Wで、壁高は6~12cmで、緩斜して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、南部に硬化面が認められる。

炉 中央部やや北寄りに付設されている地床炉である。長径76cm、短径48cmの長楕円形で、床面を若干掘り込み、炉床は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 にぶい赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子微量	6 暗 赤 褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック微量
2 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	7 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
3 褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量	8 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
4 にぶい赤褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック微量	9 褐色	ロームブロック多量
5 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量		

ピット 21か所。P1~P8、P10~P21は深さ4~17cmで、壁に沿って配されていることから、柱穴と考えられる。P9は深さ6cmで、他のピットよりも中央寄りに配され、硬化面との位置関係から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

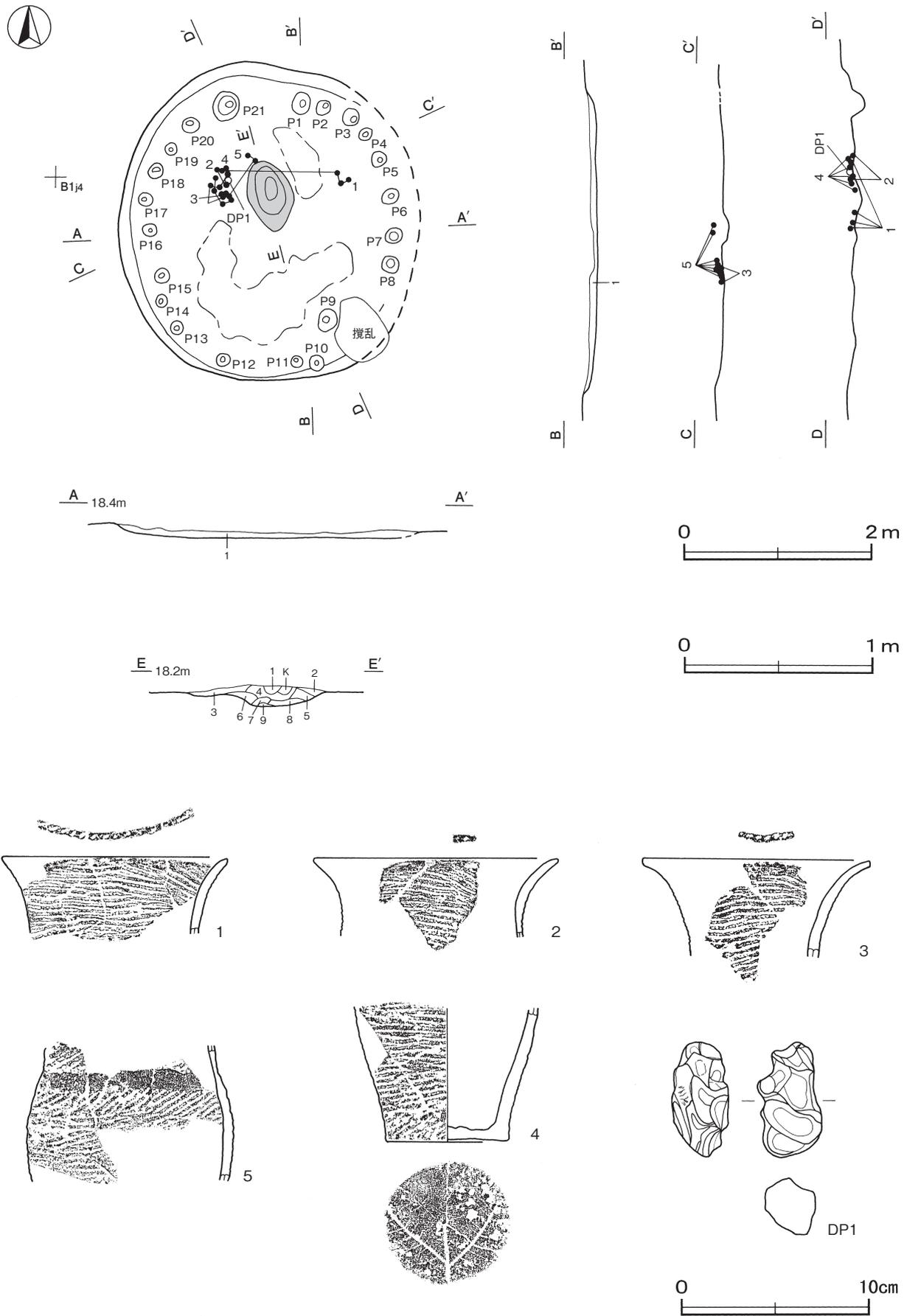
覆土 単一層である。粒子の細かさから自然堆積である。

土層解説

1 黒 褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量
--------	----------------

遺物出土状況 弥生土器片21点（壺）、不明土製品1点が出土している。1は北部の覆土下層から散乱した状態で、2~5・DP1は北部西寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後葉に比定できる。



第7図 第14号住居跡・出土遺物実測図

第 14 号住居跡出土遺物観察表（第 7 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	[12.0]	(4.2)	-	長石・雲母	橙	普通	口唇部に原体押圧 口縁部及び頸部に 附加条一種（附加 2 条）の縄文	下層	5%
2	弥生土器	壺	[12.8]	(4.2)	-	長石・石英	橙	普通	口唇部に原体押圧 口縁部及び頸部に 附加条一種（附加 2 条）の縄文	下層	5%
3	弥生土器	壺	[12.0]	(5.2)	-	長石・石英	橙	普通	口唇部に原体押圧 口縁部及び頸部に 附加条一種（附加 2 条）の縄文	下層	5%
4	弥生土器	壺	-	(7.2)	6.6	長石・石英	明黄褐	普通	胴部に附加条一種（附加 2 条）の縄 文 底部木葉痕	下層	20% PL9
5	弥生土器	壺	-	(7.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部から頸部にかけて附加条一種（附加 2 条）を施文後、無文帯により分割	下層	10% PL9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	特 徴	出土位置	備考
DP 1	不明 土製品	6.1	3.4	3.0	45.8	長石・石英・赤色 粒子	表面指頭圧痕	下層	PL10

3 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡 10 軒，土坑 1 基が確認されている。以下，検出した遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第 1 号住居跡（第 8～10 図）

位置 調査区北部中央の B 1 c5 区，標高 18.0 m の台地縁辺部傾斜面に位置している。

規模と形状 長軸 4.60 m，短軸 4.50 m の方形で，主軸方向は N - 130° - E である。壁高は 18～50cm で，ほぼ直立している。

床 P 5，貯蔵穴の周辺に高さ 4 cm ほどのテラス状に高まりが 2 か所認められるほかは平坦で，中央部に硬化面が認められる。貼床は掘方床面上にローム粒子を含む褐色土を 3 cm ほど埋めて構築されている。壁溝が北西壁下の中央部から北東壁下にかけて確認できた。壁際と中央部の覆土下層から炭化材や焼土塊が確認できた。

炉 西部に付設されている地床炉である。径 50cm の円形で，床面を若干掘り込んでいる。炉床は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 赤 褐 色	焼土ブロック多量	4 明 褐 色	ロームブロック多量
2 にぶい赤褐色	焼土ブロック中量	5 黒 褐 色	ローム粒子中量
3 褐 色	ロームブロック中量		

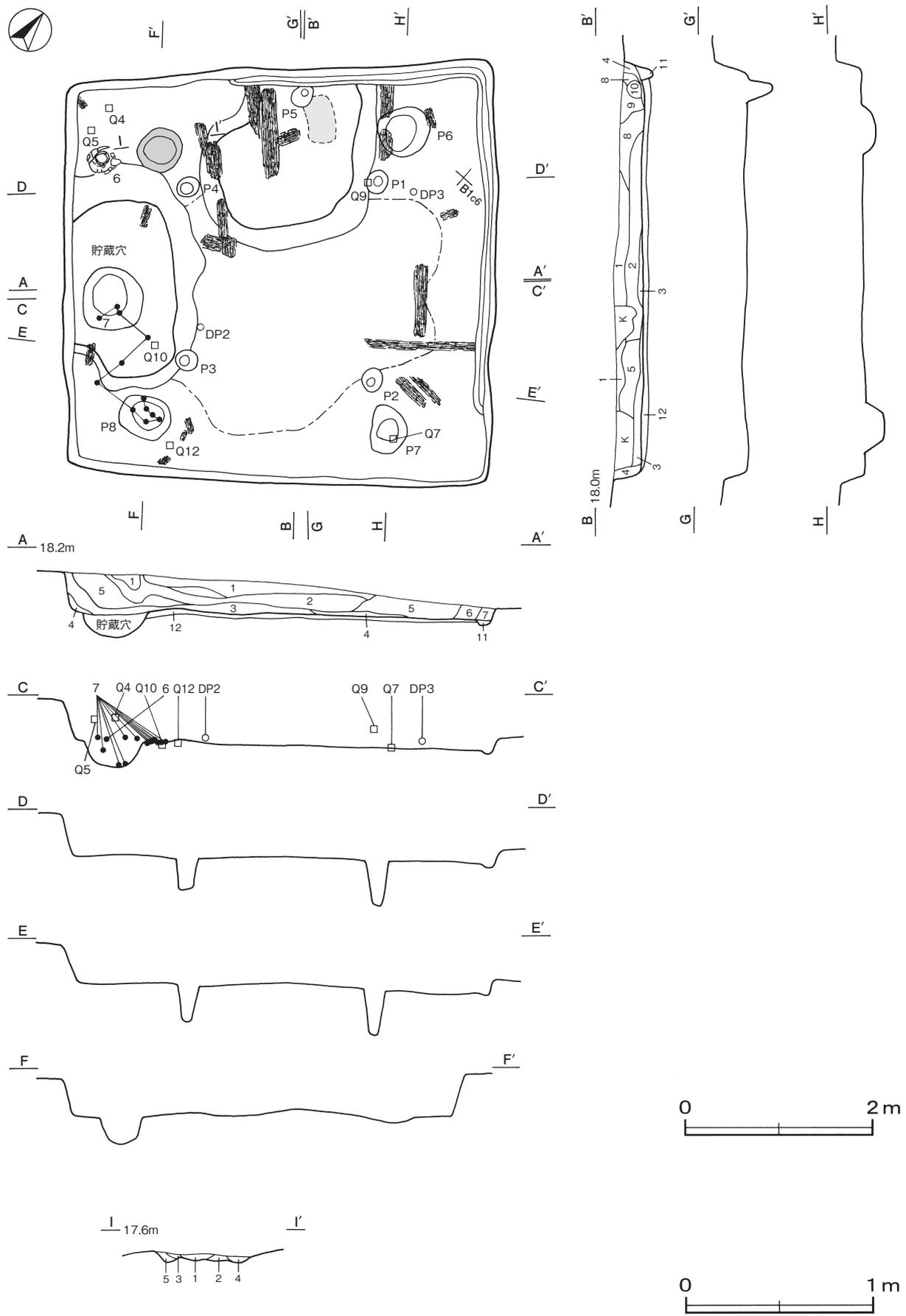
ピット 8 か所。P 1～P 4 は深さ 37～50cm で，規模と位置から主柱穴である。P 5 は深さ 30cm で，北西壁際中央部に位置していることから，出入り口施設に伴うピットである。P 6～P 8 は深さ 16～30cm で，規模や配置から補助柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南西壁際中央部のテラス状の高まりに付設されている。長径 68cm，短径 66cm の不整形円で，深さは 30cm である。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

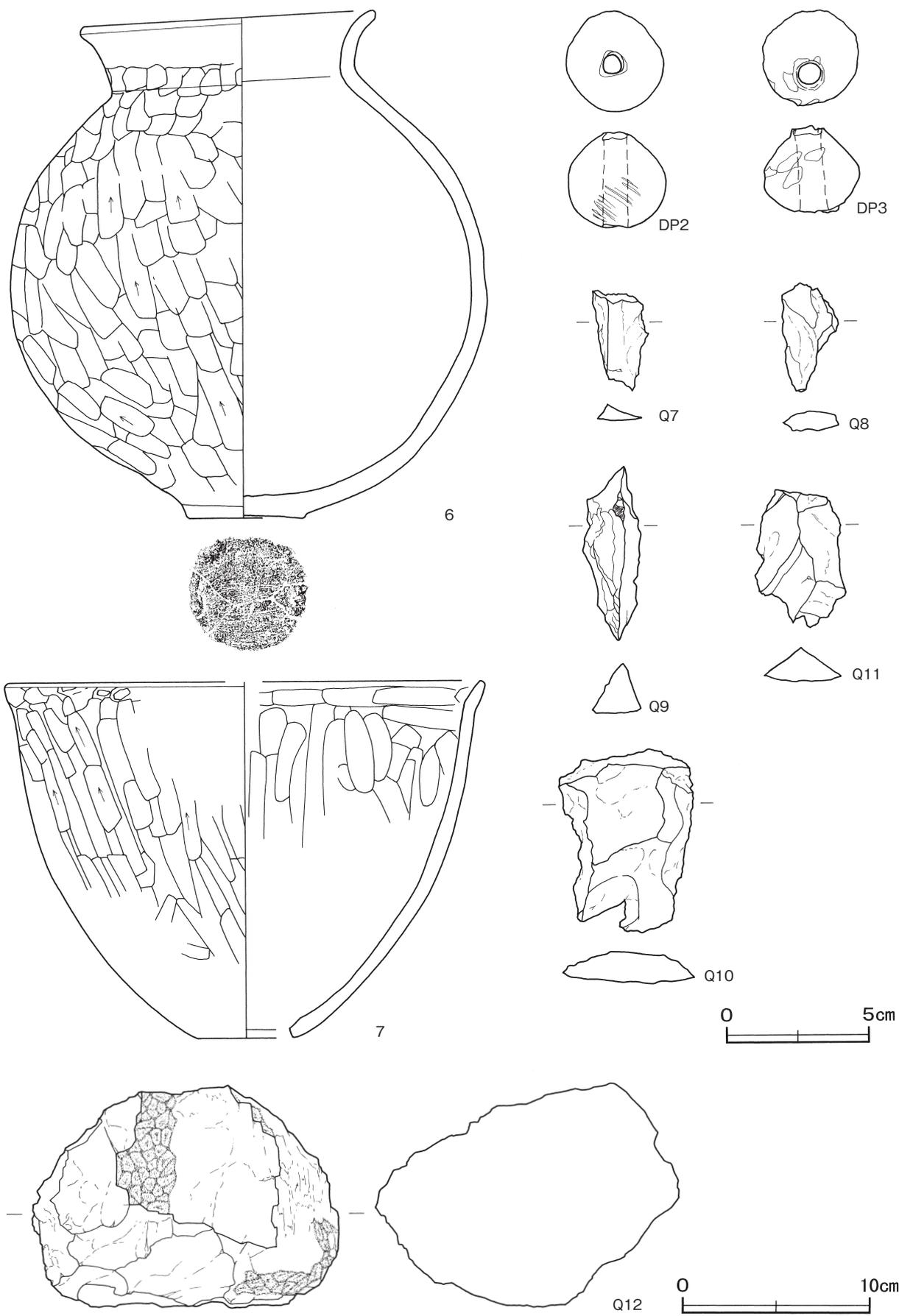
覆土 11 層に分層できる。ロームブロックや炭化物を含んだ堆積状況から埋め戻されている。第 12 層は貼床の構築土である。

土層解説

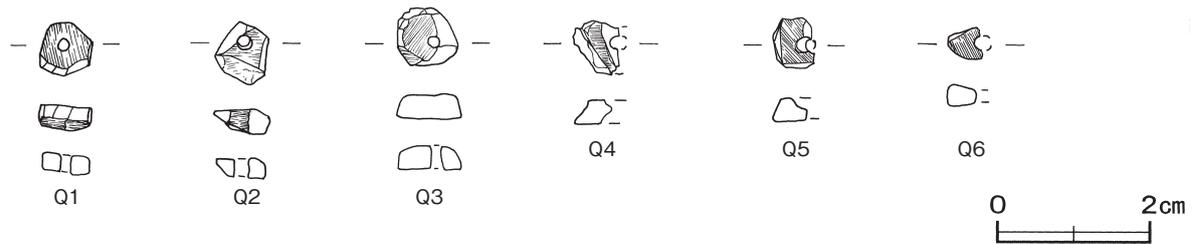
1 黒 褐 色	炭化物少量，ローム粒子微量	7 明 褐 色	ロームブロック中量
2 暗 褐 色	ロームブロック中量，炭化物少量	8 褐 色	ロームブロック少量
3 極暗褐色	炭化粒子少量，ロームブロック微量	9 暗 褐 色	ロームブロック・炭化物中量
4 褐 色	ロームブロック中量	10 黒 褐 色	炭化物中量，ロームブロック少量
5 暗 褐 色	炭化粒子中量，ローム粒子少量	11 褐 色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子少量
6 褐 色	ロームブロック・炭化物少量	12 明 褐 色	ローム粒子多量，焼土粒子微量



第8図 第1号住居跡実測図



第9図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第 10 図 第 1 号住居跡出土遺物実測図 (2)

遺物出土状況 土師器片 151 点 (坏 12, 甕 138, 甌 1), 土製品 2 点 (球状土錘), 滑石 228 点 [3415.49g] (白玉未成品 12 [2.17g], 原石 1 [3290g], 剥片 103 [92.32g], 碎片 112 [31g]) が出土している。6 は北西コーナ部の床面から正位の状態で, DP 3 は北東部の覆土下層, DP 2 は南西部の覆土下層, 7 は南西部の覆土下層から貯蔵穴下層にかけて散乱した状態で出土している。また, 滑石片は西部の覆土中から床面にかけて 170 点, 貼床の構築土中から 58 点出土している。Q 9 は北部の覆土中層, Q 3 は東部の覆土上層, Q 11 は東部の覆土下層, Q 8 は南部の覆土中層, Q 10 は南部の覆土下層, Q 12 は南部の床面, Q 7 は南西部の床面から, Q 4 は西部の覆土上層, Q 1・Q 5 は西部の覆土中層, Q 6 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期後葉に比定できる。床面で炭化材や焼土塊を確認できたことから, 焼失住居である。また, 多くの滑石片の出土は周辺から投げ込まれたものである。

第 1 号住居跡出土遺物観察表 (第 9・10 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
6	土師器	甕	15.8	27.4	6.3	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り	床面	90% PL9
7	土師器	甌	[25.2]	19.1	5.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層～貯蔵穴下層	50%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 2	球状土錘	3.5	3.5	0.75	39.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	ナデ	覆土下層	
DP 3	球状土錘	3.4	3.1	0.90	31.7	長石・雲母	ナデ	覆土下層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	白玉未成品	0.71	0.34	0.15	0.23	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔	覆土中層	
Q 2	白玉未成品	0.82	0.35	0.20	0.37	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔	覆土中層	
Q 3	白玉未成品	0.80	0.35	0.20	0.48	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔	覆土上層	
Q 4	白玉未成品	0.70	0.32	0.20	(0.16)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土上層	
Q 5	白玉未成品	0.65	0.35	0.20	(0.21)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 (未貫通) 欠損品	覆土中層	
Q 6	白玉未成品	0.46	0.30	0.20	(0.08)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 7	滑石剥片	3.60	2.00	0.60	4.12	滑石	未研磨 三角柱状 形製品	床面	
Q 8	滑石剥片	3.80	2.00	0.80	4.42	滑石	未研磨 板状 形製品	覆土中層	
Q 9	滑石剥片	6.30	2.10	2.00	17.40	滑石	一部研磨 三角柱状 形製品	覆土中層	
Q 10	滑石剥片	6.60	4.80	1.20	39.10	滑石	未研磨 板状 荒製品	覆土下層	PL10
Q 11	滑石剥片	5.00	3.30	1.20	14.50	滑石	未研磨 三角柱状 荒製品	覆土下層	
Q 12	滑石原石	11.90	16.40	12.00	3290.0	滑石	敲打痕確認	床面	PL10

第2号住居跡 (第11～13図)

位置 調査区北部やや西寄りのB 1 b4区, 標高18.0mの台地縁辺部傾斜面に位置している。

規模と形状 一辺3.80mの方形で, 主軸方向はN-32°-Wである。壁高は34～42cmで, ほぼ直立している。

床 貯蔵穴周辺に3cmほどのテラス状の高まりが認められるほかは平坦で, 中央部に硬化面が認められる。貼床は掘方床面上にローム粒子を含む褐色土を5cmほど埋めて構築されている。壁溝が北東壁下から南西壁下にかけて確認できた。南西部の壁際から焼土塊が確認できた。

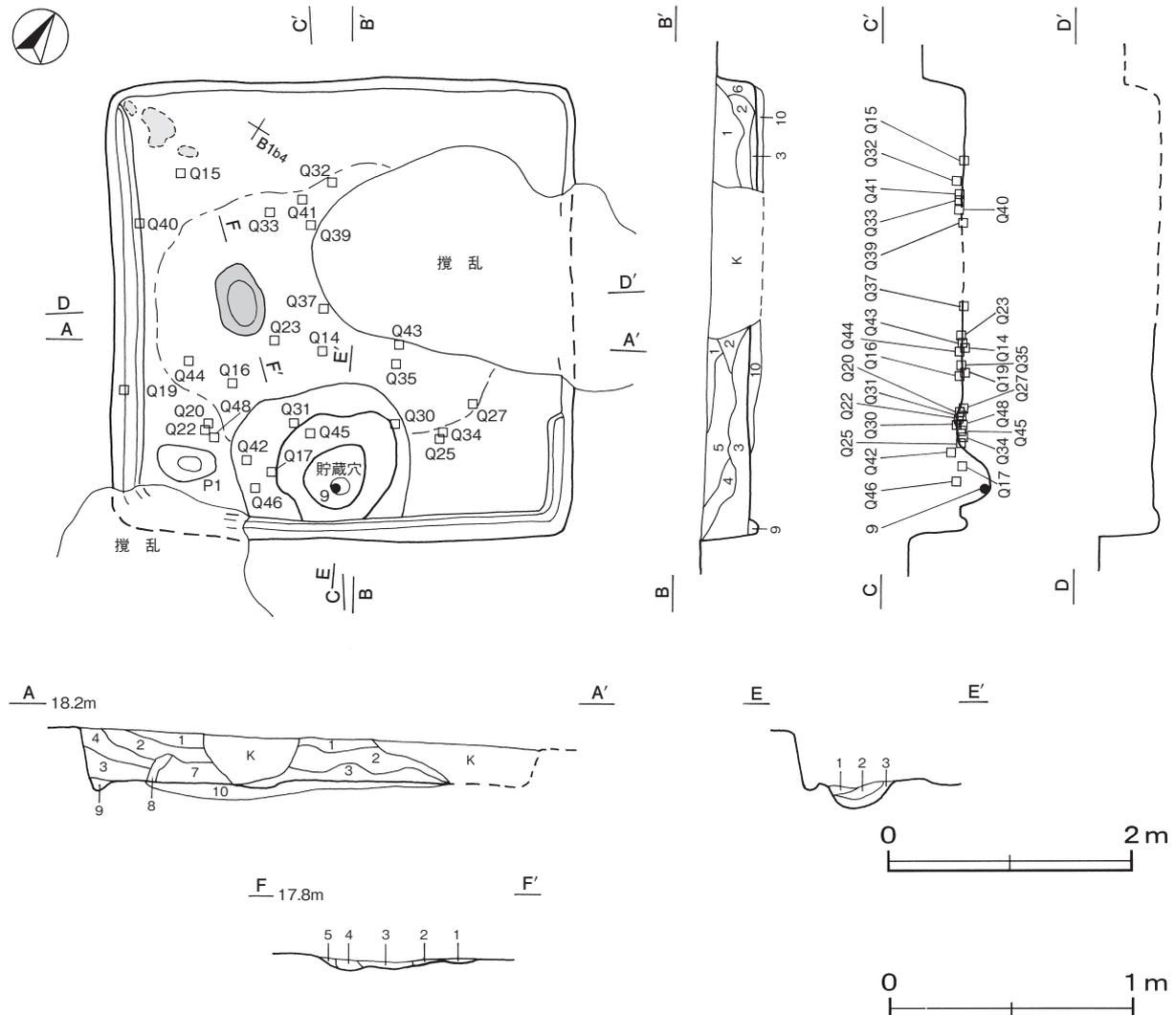
炉 中央部南西寄りに付設されている地床炉である。長径60cm, 短径40cmの楕円形で, 床面を若干掘り込んでいる。炉床は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|--------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック中量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子微量 | 5 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 3 赤褐色 焼土ブロック多量 | |

ピット P1は深さ34cmで性格は不明である。

貯蔵穴 南東部壁際のテラス状の高まりに位置している。径50cmの不整円形で, 深さ26cmである。底面は皿状で, 壁は外傾して立ち上がっている。



第11図 第2号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 極 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

覆土 9層に分層できる。ロームブロックや焼土を含んだ堆積状況から埋め戻されている。第10層は貼床の構築土である。

土層解説

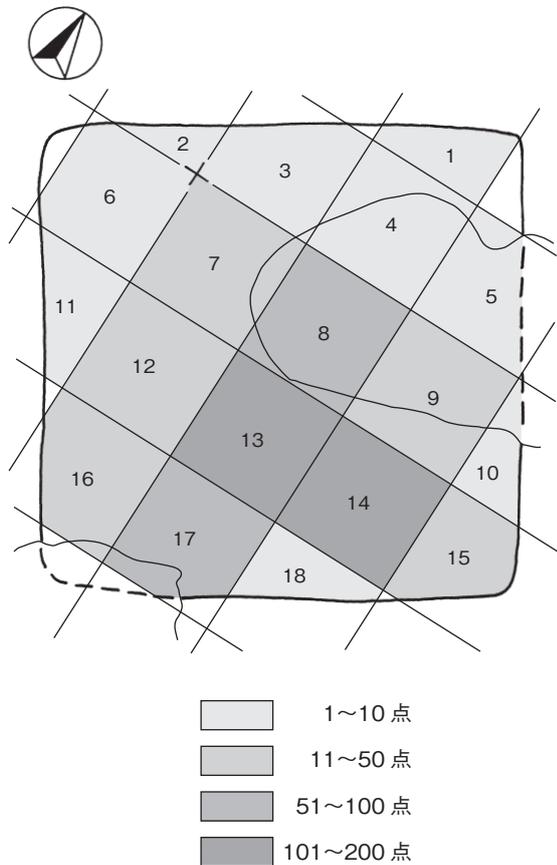
- 1 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 極 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐 色 ロームブロック中量
- 6 明 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 7 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 8 明 褐 色 ロームブロック中量
- 9 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 10 に ぶ い 褐 色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 144 点(椀 27, 甕 117), 滑石 4243 点[506.23g](白玉 11 [1.59g], 白玉未成品 251 [28.8g], 剥片 1495 [183.96g], 碎片 2486 [291.88g]) が出土している。9は貯蔵穴の覆土下層, 8は貯蔵穴の覆土中から出土している。また, 滑石は貯蔵穴周辺の覆土中から床面にかけて 3373 点, 貼床構築土中から 870 点出土している。Q 14・Q 23・Q 31・Q 35・Q 37・Q 39・Q 43・Q 45 は中央部の覆土下層, Q 18・Q 26 は北部の覆土下層, Q 25・Q 27・Q 28・Q 30・Q 34・Q 38 は東部の覆土下層, Q 16・Q 17・Q 19・Q 20・Q 22・Q 42・Q 44・Q 46・Q 48 は南部の覆土下層, Q 15・Q 33・Q 40 は西部の覆土下層, Q 32・Q 41 は北西部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期後葉に比定できる。床面から焼土塊が確認できたことから焼失住居である。また, 多くの滑石片は周辺から投げ込まれたものである。

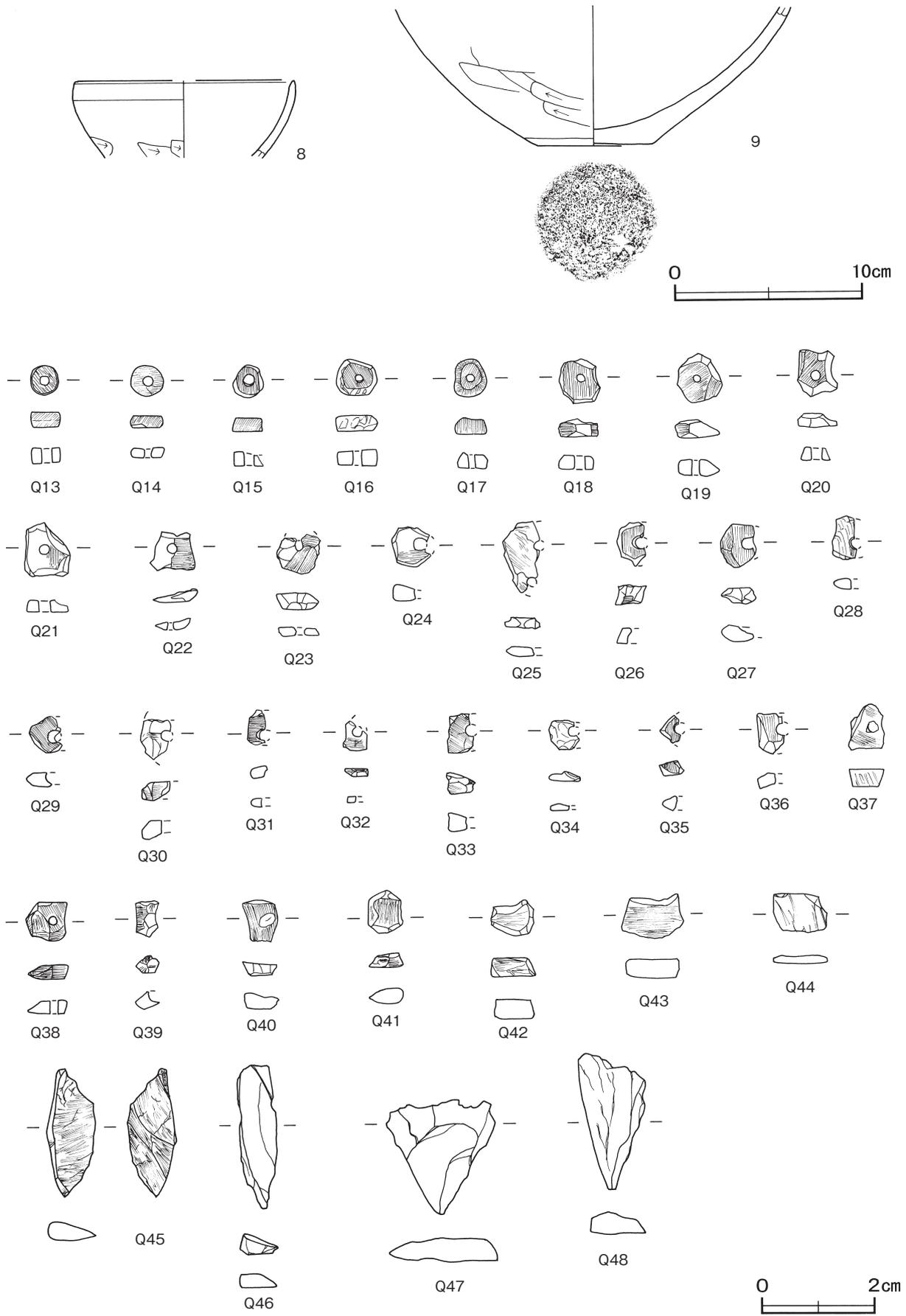
表2 第2号住居跡滑石出土量一覧表

	白玉成品	白玉未成品	剥片	碎片	計
1	0	0	0	6 (0.22)	6 (0.22)
2	0	0	0	1 (0.01)	1 (0.01)
3	0	1 (0.06)	4 (0.25)	1 (0.03)	6 (0.34)
4	1 (0.12)	0	0	5 (0.26)	6 (0.38)
5	0	0	0	1 (0.01)	1 (0.01)
6	1 (0.12)	0	1 (0.06)	3 (0.58)	5 (0.76)
7	0	7 (0.70)	10 (1.54)	11 (0.36)	28 (2.60)
8	0	2 (0.20)	12 (1.40)	43 (1.89)	57 (3.49)
9	0	2 (0.32)	6 (2.98)	17 (1.02)	25 (4.32)
10	0	0	1 (0.28)	3 (1.51)	4 (1.79)
11	0	0	1 (0.17)	1 (0.28)	2 (0.45)
12	1 (0.18)	2 (0.23)	4 (1.88)	10 (1.31)	17 (3.60)
13	2 (0.25)	9 (0.76)	45 (3.75)	109 (6.76)	165 (11.52)
14	0	7 (0.79)	47 (9.19)	125 (21.00)	179 (30.98)
15	0	0	4 (0.74)	11 (1.68)	15 (2.42)
16	1 (0.28)	2 (0.31)	6 (1.40)	8 (1.47)	17 (3.46)
17	1 (0.18)	3 (0.13)	29 (2.79)	55 (6.25)	88 (9.35)
18	0	0	1 (0.02)	4 (0.32)	5 (0.34)
計	7 (1.13)	35 (3.50)	171 (26.45)	414 (44.96)	627 (76.04)



第12図 滑石片出土分布図

※ () は g を表す



第 13 图 第 2 号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
8	土師器	椀	[11.8]	(4.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り	貯蔵穴 覆土中	30%
9	土師器	甕	-	(7.5)	6.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端ヘラ削り	貯蔵穴 覆土下層	30%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 13	白玉	0.50	0.30	0.15	0.10	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	覆土上層	
Q 14	白玉	0.55	0.25	0.15	0.14	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	覆土下層	
Q 15	白玉	0.56	0.26	0.20	(0.12)	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔 一部欠損	覆土下層	
Q 16	白玉 未成品	0.72	0.27	0.14	0.18	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔	覆土下層	
Q 17	白玉	0.68	0.28	0.10	0.18	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	覆土下層	
Q 18	白玉 未成品	0.75	0.30	0.15	0.23	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔	覆土下層	
Q 19	白玉 未成品	0.89	0.32	0.12	(0.28)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土下層	
Q 20	白玉 未成品カ	0.80	0.25	0.20	0.18	滑石	側面未研磨 未整形 一方向からの穿孔	覆土下層	
Q 21	白玉 未成品	0.95	0.20	0.15	(0.20)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土上層	
Q 22	白玉 未成品	0.70	0.20	0.15	0.13	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔	覆土下層	
Q 23	白玉 未成品	0.72	0.32	0.12	(0.16)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土下層	
Q 24	白玉 未成品	0.70	0.35	0.20	(0.22)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土上層	
Q 25	白板 未成品カ	(1.25)	0.20	(0.15)	(0.18)	滑石	一部研磨 一方向からの穿孔 欠損品	覆土下層	
Q 26	白玉 未成品	0.75	0.35	0.20	(0.14)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土下層	
Q 27	白玉 未成品	0.76	0.28	0.20	(0.18)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 (未貫通) 欠損品	覆土下層	
Q 28	白玉 未成品	0.75	0.20	0.15	(0.09)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土下層	
Q 29	白玉 未成品	0.70	0.30	0.20	(0.12)	滑石	側面未研磨 一方向からの穿孔 欠損品	覆土上層	
Q 30	白玉 未成品	0.70	0.35	0.20	(0.18)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土下層	
Q 31	白玉 未成品カ	0.60	0.20	0.20	(0.06)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土下層	
Q 32	白玉 未成品	(0.55)	0.16	0.15	(0.06)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土下層	
Q 33	白玉 未成品	0.64	0.35	0.20	(0.15)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土下層	
Q 34	白玉 未成品	0.55	0.15	0.15	(0.06)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土下層	
Q 35	白玉 未成品	0.50	0.25	0.15	(0.05)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土下層	
Q 36	白玉 未成品	0.75	0.28	0.20	(0.11)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土上層	
Q 37	白玉 未成品	0.80	0.30	-	0.22	滑石	一部研磨 未整形 未穿孔	覆土下層	
Q 38	白玉 未成品	0.70	0.27	0.15	0.22	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	覆土下層	
Q 39	白玉 未成品	0.58	0.34	0.25	(0.11)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 (未貫通) 欠損品	覆土下層	
Q 40	白玉 未成品	0.73	0.26	-	(0.17)	滑石	一部研磨 未整形 未穿孔	覆土下層	
Q 41	白玉 未成品	0.75	0.30	-	0.22	滑石	一部研磨 未整形 未穿孔	覆土下層	
Q 42	白玉 未成品	0.75	0.36	-	0.23	滑石	一部研磨 未整形 未穿孔	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 43	滑石剥片	0.80	1.03	0.30	0.36	滑石	研磨 板状	覆土下層	
Q 44	滑石剥片	0.70	0.95	0.20	0.21	滑石	未研磨 板状 形製品	覆土下層	
Q 45	滑石剥片	3.00	0.88	0.29	0.73	滑石	研磨 板状 剣形未成品カ	覆土下層	
Q 46	滑石剥片	2.55	0.70	0.35	0.66	滑石	未研磨 板状 形製品	覆土下層	
Q 47	滑石剥片	2.00	1.90	0.40	1.18	滑石	未研磨 板状 形製品	覆土上層	
Q 48	滑石剥片	2.40	1.20	0.40	1.14	滑石	未研磨 板状 形製品	覆土下層	

第3号住居跡（第14図）

位置 調査区北部中央のB 1 e5区，標高 18.1 mの台地縁辺部傾斜面に位置している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.60 m，短軸 3.50 mの方形で，主軸方向はN - 34° - Eである。壁高は 14 ~ 24cmで，ほぼ直立している。

床 東方向に若干傾斜しているが平坦で，中央部に硬化面が認められる。また，南壁下中央から西壁下にかけて壁溝が巡っている。

炉 北東壁際に付設されている地床炉である。南部に攪乱を受けているが，推定長径 45cm，短径 30cmの楕円形で，床面を若干掘り込んでいる。炉床は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

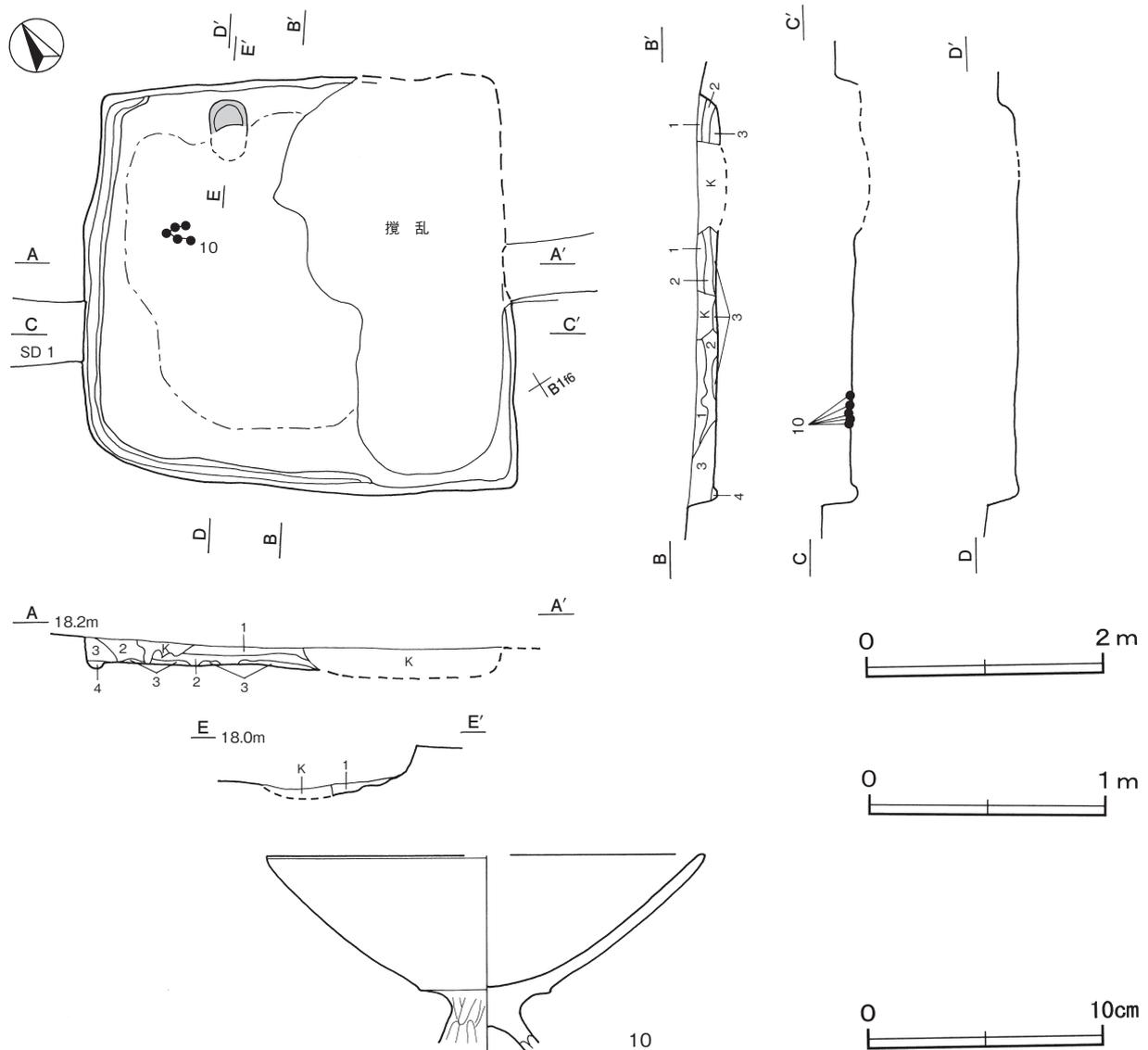
1 にぶい赤褐色 焼土ブロック少量，炭化粒子微量

覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 炭化物少量，ローム粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

3 褐色 ロームブロック中量
4 暗褐色 ロームブロック微量



第14図 第3号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 21 点（高坏 1， 椀 5， 甕 15）， 滑石片 3 点が出土している。10 は北部の床面から散乱した状態で出土している。

所見 時期は， 出土土器から前期後葉に比定できる。

第 3 号住居跡出土遺物観察表（第 14 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
10	土師器	高坏	[18.6]	(8.5)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい 黄橙	普通	坏部外・内面摩耗顕著 脚部外面へ ラ磨き	床面	20%

第 4 号住居跡（第 15・16 図）

位置 調査区北部中央の B 1 g5 区， 標高 18.2 m の台地縁辺部傾斜面に位置している。

重複関係 第 5 号土坑に掘り込まれている

規模と形状 一辺 5.0 m の方形で， 主軸方向は N - 23° - E である。壁高は 14 ~ 35cm で， ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦であり， 中央部に硬化面が認められる。壁溝が北壁下の中央部と南壁下から西壁下にかけて巡っている。

炉 3 か所。炉 1 は北壁中央部に付設され， 長径 67cm， 短径 46cm の楕円形である。床面を皿状に 4 cm ほど掘りくぼめ， 炉床は火を受けて赤変硬化している。炉 2 は中央部やや北西寄りに付設され， 長径 70cm， 短径 63 cm の円形である。床面を皿状に若干掘り下げ， 炉床は火を受けて赤変硬化し， 堆積覆土は踏み固められたことにより， 周囲の硬化した床面と同化した状態である。炉 3 は中央部やや南寄りに付設され， 径 60cm の円形である。床面を若干掘り下げて炉床としたと考えられ， 炉床は火を受け赤変硬化している。

炉 1 土層解説

1 明赤褐色 焼土ブロック多量

炉 2 土層解説

1 明赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量

2 黒褐色 炭化物・焼土粒子中量

炉 3 土層解説

1 明赤褐色 焼土ブロック多量

ピット 2 か所。P 1 は深さ 15cm， P 2 は深さ 33cm で性格は不明である。

覆土 8 層に分層できる。ロームブロックや焼土・炭化物を含んだ不規則な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量， 焼土粒子・炭化粒子
微量

5 褐色 ロームブロック中量， 炭化粒子少量

2 褐色 ロームブロック少量， 炭化粒子微量

6 明褐色 ロームブロック中量

3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

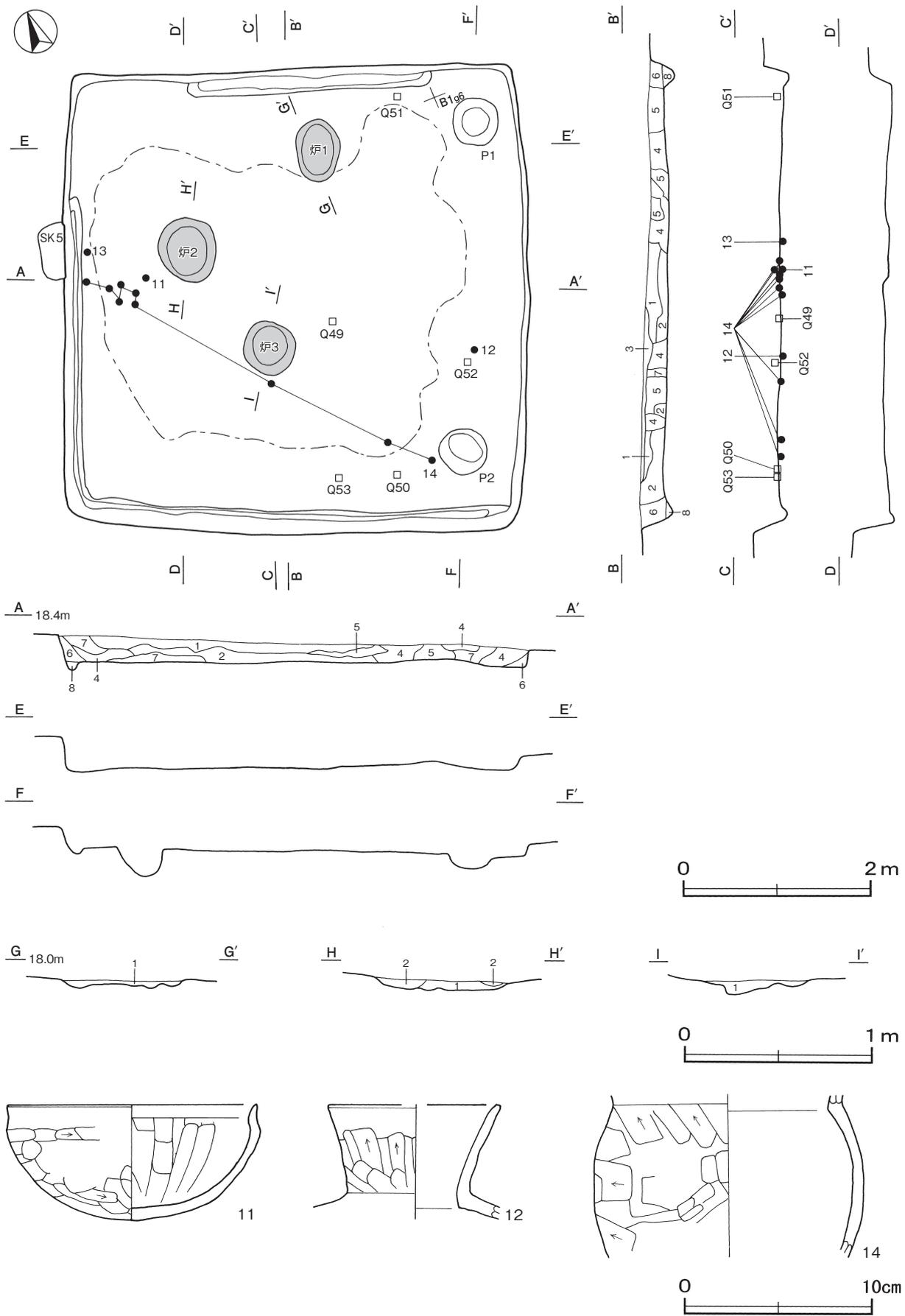
7 明褐色 ロームブロック少量

4 暗褐色 ロームブロック少量， 炭化粒子微量

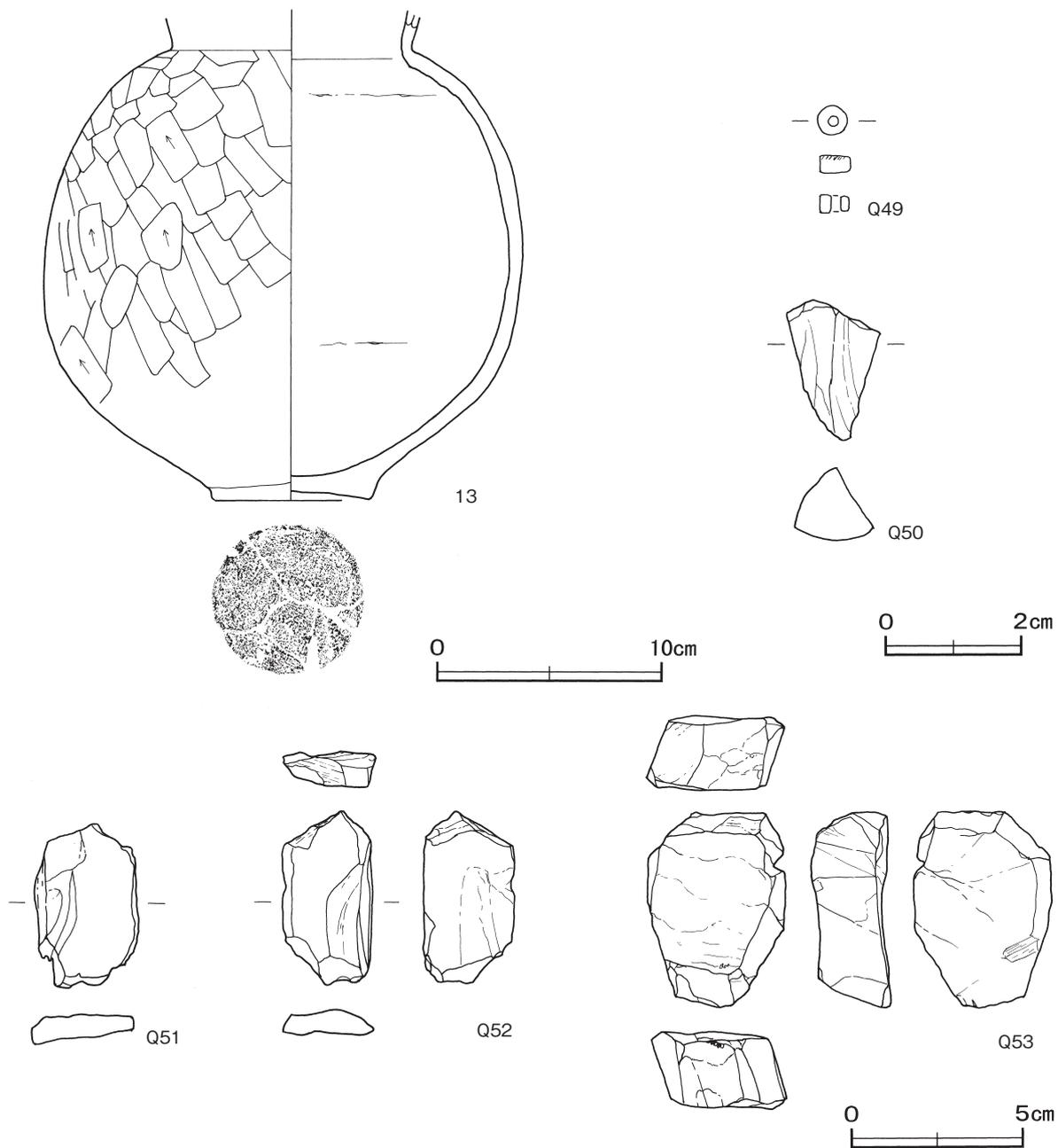
8 明褐色 ロームブロック中量， 炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片 182 点（椀 37， 埴 1， 甕 144）， 石製品 1 点（白玉）， 滑石 4 点（剥片）が出土している。11 は西部中央の床面から逆位の状態， 12 は東部中央の床面， 13 は西壁際中央の下層から斜位の状態， 14 は西部と南東部の床面から出土した土器片が接合した。Q 52 は東部中央の下層， Q 51 は北東コーナー部の下層， Q 50・Q 53 は南部中央の床面， Q 49 は中央部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は， 出土土器から中期後葉に比定できる。また 3 基の炉の関係は， 炉 2 がほぼ硬化面と同化した状態で確認されていることから， 一番古いと考えられるが， 炉 1， 炉 3 の関係は明確にできなかった。出土した滑石片は周囲から投げ込まれたものである。



第15图 第4号住居跡・出土遺物実測図



第 16 図 第 4 号住居跡出土遺物実測図

第 4 号住居跡出土遺物観察表 (第 15・16 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色調	焼成	手 法 の 特 徴 ほか	出土位置	備考
11	土師器	椀	13.2	6.3	-	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ ヘラ削り 内面ヘラナデ	床面	100% PL9
12	土師器	罎	[9.0]	(6.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外面横ナデ後、ヘラ削り	床面	35%
13	土師器	甕	-	(21.8)	7.0	長石・石英・赤色 粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	覆土下層	95% PL10
14	土師器	甕	-	(8.7)	-	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り	床面	30%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材 質	特 徴	出土位置	備考
Q 49	白玉	0.42	0.23	0.15	0.07	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備考
Q 50	滑石剥片	2.1	1.4	1.30	2.74	滑石	未研磨 三角錐状 荒制品	床面	
Q 51	滑石剥片	4.9	3.2	1.05	17.00	滑石	未研磨 板状 荒制品	覆土下層	
Q 52	滑石剥片	5.1	2.7	1.03	16.90	滑石	未研磨 板状 荒制品	覆土下層	
Q 53	滑石剥片	5.8	4.1	2.30	12.20	滑石	未研磨 四角柱状 荒制品 刀子状の工具による切痕あり	床面	

第5号住居跡（第17～19図）

位置 調査区中央部やや西寄りのC1f5区、標高18.3mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 一辺5.80mの方形で、主軸方向はN-127°-Wである。壁高は46～62cmで、ほぼ直立している。

床 竈前面に高さ3cmほどのテラス状の高まりが認められるが、他は平坦である。また、壁際を除いて硬化面が認められ、壁溝が竈部分の下を通過して全周している。また、焼土塊が確認できた。

竈 南西部に付設されている。規模は焚口から煙道部まで103cm、燃焼部幅53cmである。袖部は砂粒と粘土を主体とする褐色土で構築されている。火床面は床面を若干掘り下げ、赤変硬化している。煙道部は壁外まで掘り込まれていない。

竈土層解説

1	にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒中量，ローム粒子微量	10	にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量，炭化粒子少量，ロームブロック・焼土粒子微量
2	にぶい黄褐色	砂粒中量，粘土ブロック少量，焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	11	にぶい赤褐色	砂粒中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
3	にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	12	黒 褐 色	ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量
4	にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒中量，炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量	13	暗 褐 色	ローム粒子中量，砂粒微量
5	にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量	14	にぶい褐色	粘土粒子中量，砂粒少量，ローム粒子微量
6	にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量，焼土粒子少量，ロームブロック・炭化物微量	15	黒 褐 色	炭化物中量，粘土粒子・砂粒少量，ローム粒子・焼土粒子微量
7	暗 赤 褐 色	粘土粒子・砂粒中量，焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量	16	暗 褐 色	ローム粒子微量
8	暗 赤 褐 色	粘土粒子・砂粒中量，炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量	17	灰 褐 色	粘土粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
9	暗 赤 褐 色	粘土粒子・砂粒中量，炭化物少量，焼土粒子微量	18	褐 灰 色	粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
			19	にぶい褐色	ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
			20	黒 褐 色	炭化粒子中量，焼土ブロック少量

ピット 5か所。P1～P3は深さ62～72cmで、規模と位置から主柱穴である。P4は深さ12cmで、配置が壁に近いこと、硬化面に接していることなどから出入口施設に伴うピットと考えられる。P5は深さ12cmで性格は不明である。

貯蔵穴 西壁際コーナー部の竈左側に位置している。長軸96cm、短軸75cmの隅丸長方形で、深さ80cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1	黒 褐 色	ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量	3	暗 褐 色	ロームブロック少量
2	暗 褐 色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	4	褐 色	ローム粒子多量

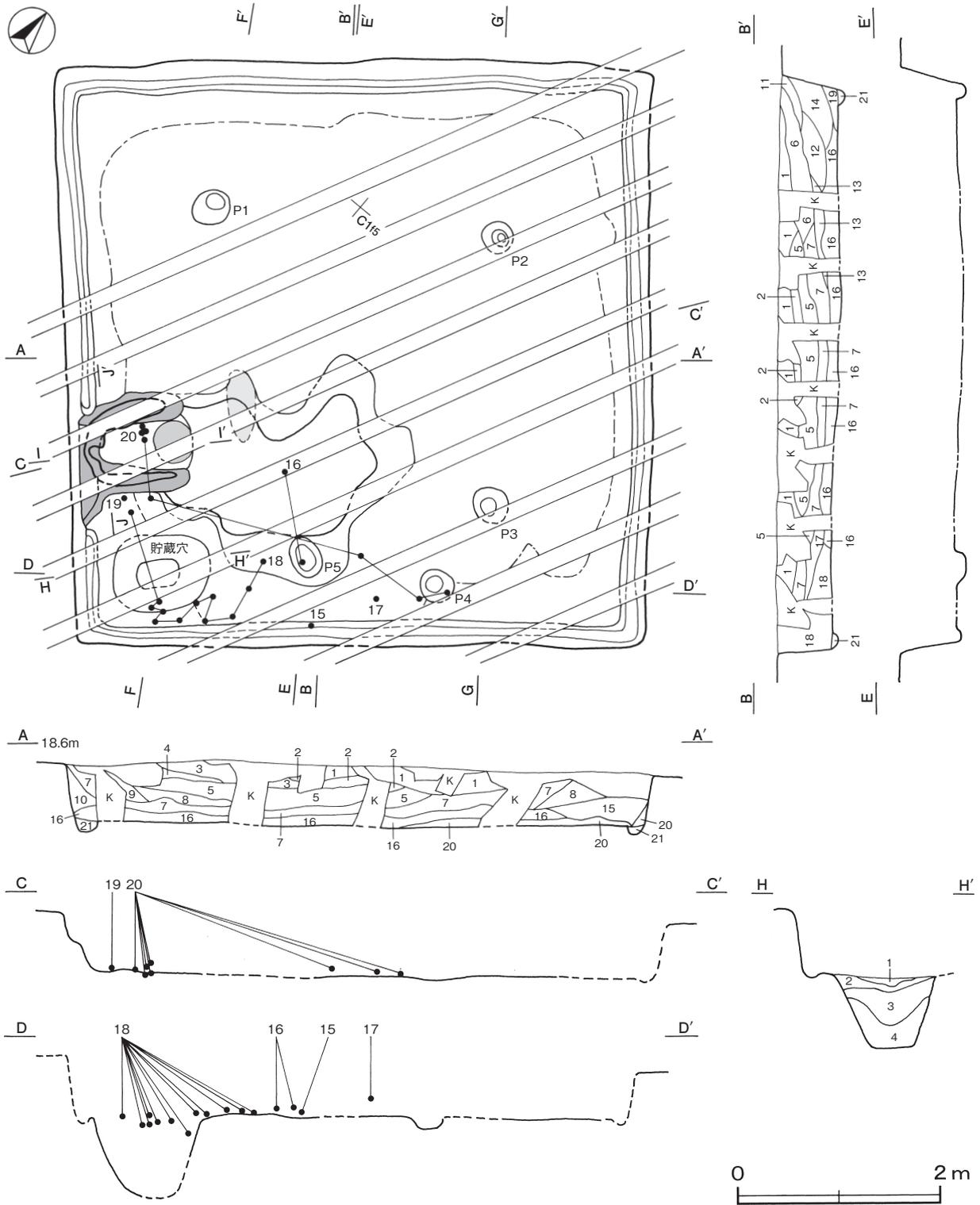
覆土 21層に分層できる。ロームブロックや炭化物を含んだ堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

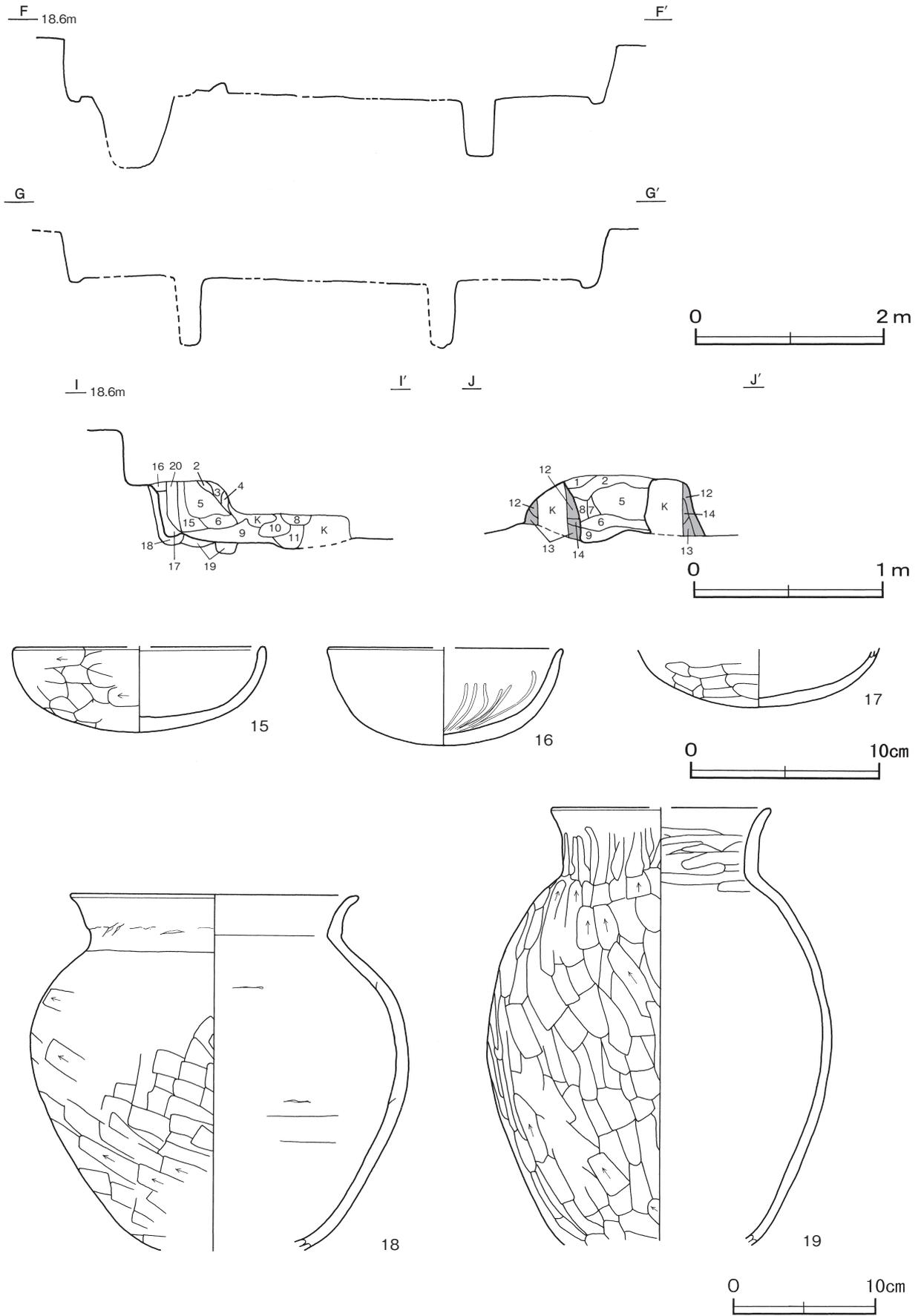
1	黒 褐 色	炭化物少量，ロームブロック微量	12	明 褐 色	ローム粒子中量
2	暗 褐 色	ロームブロック・炭化物中量	13	黒 褐 色	炭化物少量，ローム粒子微量
3	極 暗 褐 色	ロームブロック・炭化粒子微量	14	暗 褐 色	ロームブロック・炭化粒子中量
4	褐 色	ローム粒子中量	15	極 暗 褐 色	炭化粒子少量，ロームブロック微量
5	暗 褐 色	炭化物中量，ローム粒子少量	16	褐 色	ロームブロック中量
6	褐 色	炭化物・ローム粒子少量	17	暗 褐 色	炭化粒子中量，ローム粒子少量
7	明 褐 色	ロームブロック中量，炭化粒子少量	18	褐 色	ロームブロック・炭化物少量
8	褐 色	ローム粒子少量	19	明 褐 色	ロームブロック中量
9	暗 褐 色	炭化物・ローム粒子中量	20	褐 色	ロームブロック少量
10	黒 褐 色	炭化物中量，ロームブロック少量	21	暗 褐 色	ローム粒子・炭化粒子中量
11	褐 色	ロームブロック中量，炭化物・焼土粒子少量			

遺物出土状況 土師器片 632 点（坏 3，碗 101，甕 527，甑 1）が出土している。15 は南東壁中央部の覆土中層から覆土下層にかけて，17 は南東壁中央部の覆土中層，16 は南東部の覆土下層，18 は南コーナー部の覆土下層から貯蔵穴内の覆土上層にかけて，19 は南コーナー部の覆土中層から覆土下層にかけて，20 は竈内覆土下層から南東壁中央部の覆土下層にかけて散乱した状態で出土している。

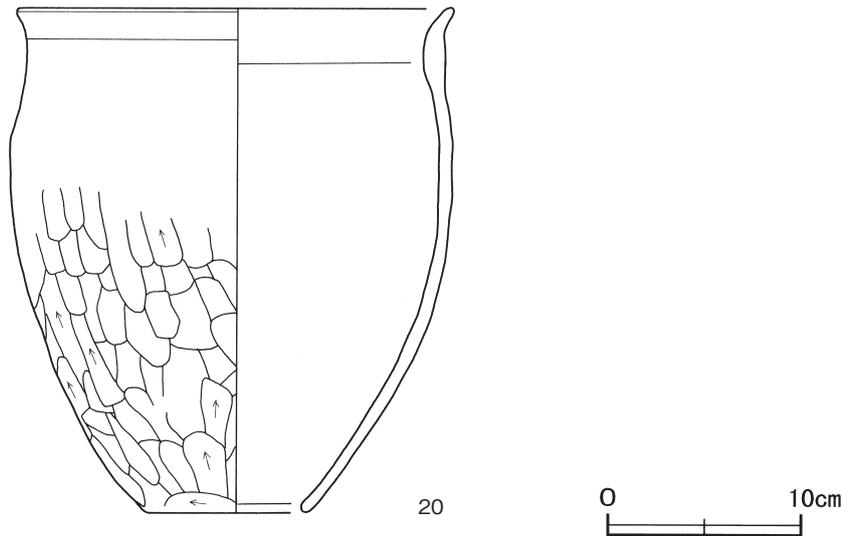
所見 時期は，出土土器から中期後葉に比定できる。床面からの焼土塊の出土状況から焼失住居である。



第 17 図 第 5 号住居跡実測図



第 18 図 第 5 号住居跡・出土遺物実測図



第 19 図 第 5 号住居跡出土遺物実測図

第 5 号住居跡出土遺物観察表 (第 18・19 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色調	焼成	手 法 の 特 徴 ほか	出土位置	備考
15	土師器	坏	[13.4]	4.5	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り	覆土中層～ 覆土下層	40%
16	土師器	坏	[12.9]	5.2	-	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	外面摩耗顕著 内面放射状の磨き	覆土下層	40% PL9
17	土師器	坏	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中層	40%
18	土師器	甕	20.0	(25.0)	-	長石・石英・雲母 ・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	覆土下層～ 貯蔵穴上層	60%
19	土師器	甕	[15.2]	(30.7)	-	長石・石英・雲母 ・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 頸部から体 部下端ヘラ削り	覆土中層～ 覆土下層	35%
20	土師器	甕	22.7	26.3	8.2	長石・石英・雲母	にぶい 黄褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り	覆土下層～ 甕下層	55%

第 6 号住居跡 (第 20 図)

位置 調査区中央部東寄りの C 1 f9 区, 標高 18.2 m の台地平坦部に位置している。

規模と形状 西壁は攪乱を受けており, 確認できた規模は推定東西軸 4.38 m, 南北軸 4.04 m の方形と推定され, 主軸方向は N - 60° - W である。壁高は 14 ~ 32cm で, ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で, 北西部に硬化面が認められる。

炉 北西部に付設されている地床炉である。東部は攪乱を受けており, 推定東西径 87cm, 南北径 75cm の楕円形で, 床面を 10cm ほど掘り込んでいる。炉床は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 黒 褐 色 炭化粒子少量, 焼土ブロック微量 | 3 赤 褐 色 焼土ブロック中量, ロームブロック少量 |
| 2 暗 赤 褐 色 焼土ブロック中量, ローム粒子微量 | |

ピット 2 か所。P 1・P 2 は深さ 29cm・9cm で, 規模と位置から主柱穴の可能性はある。

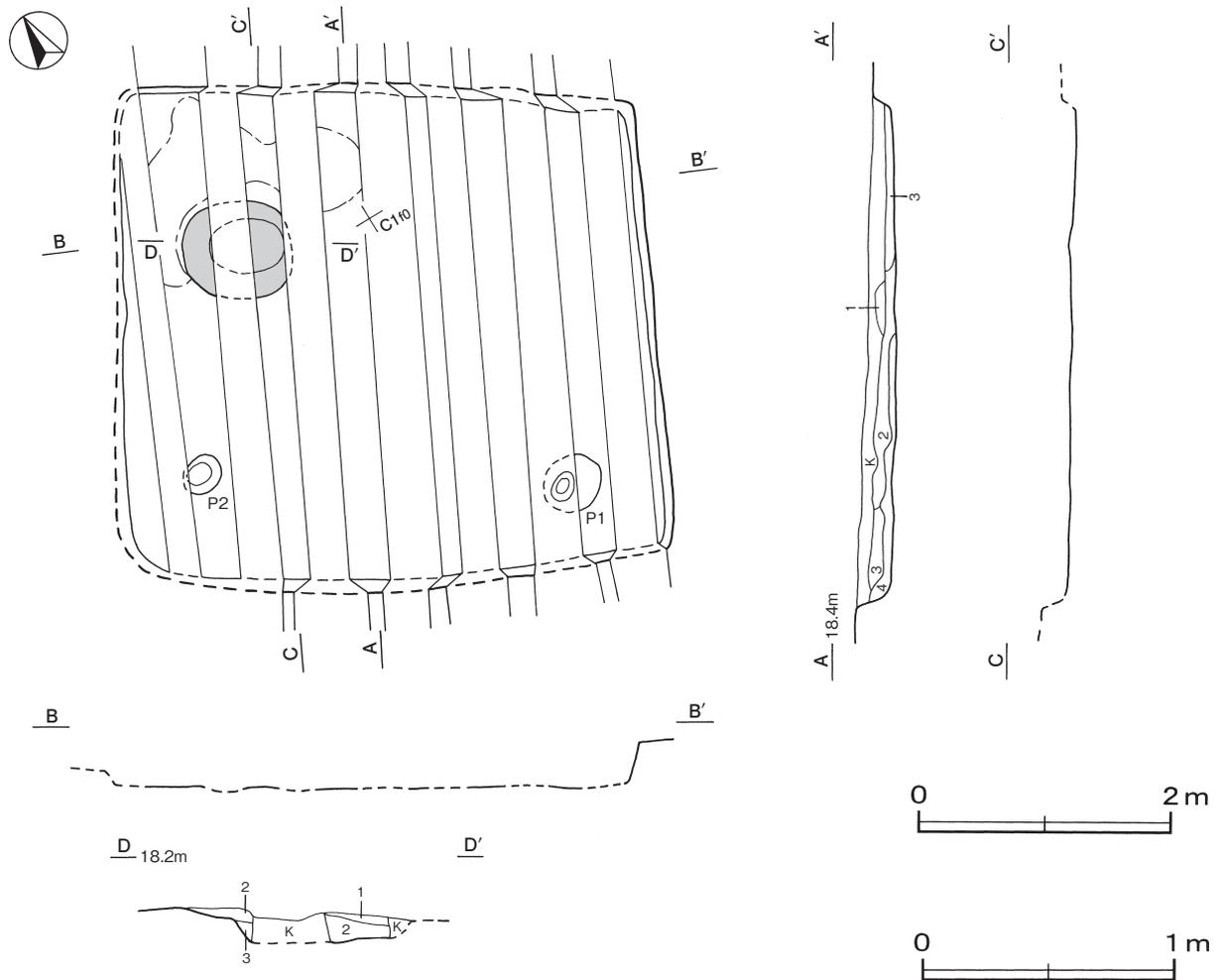
覆土 4 層に分層できる。ロームブロックや炭化物を含んだ堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| 1 黒 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子
微量 | 3 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子
微量 |
| 2 灰 黄 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 4 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片 42 点 (高坏 2, 碗 2, 甕 38), 滑石片 1 点が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は, 出土土器から中期に比定できる。



第20図 第6号住居跡実測図

第7号住居跡（第21～26図）

位置 調査区北西部のA 1 i3区，標高17.6mの台地縁辺部傾斜面に位置している。

規模と形状 長軸5.08m，短軸4.91mの方形で，主軸方向はN-145°-Wである。壁高は21～56cmで，ほぼ直立している。

床 P5周辺に2cmほどのテラス状の高まりが認められるほかは平坦で，中央部に硬化面が認められる。貼床は掘方の床面上にローム粒子を含む褐色土を5cmほど埋め戻されて構築されている。東コーナー部壁下から南東壁下を除いて壁溝が確認できた。北コーナー部から南コーナー部にかけて炭化材・焼土塊が確認できた。

炉 3か所。炉1は北西部に付設されている地床炉である。北部が攪乱のため東西軸94cm，南北軸21cmしか確認できず，形状は不明である。床面を若干掘り込み，炉床は火を受けて赤変硬化している。炉2は中央部北東寄りに付設されている地床炉である。長径56cm，短径40cmの楕円形で，床面を若干掘り込み，炉床は火を受けて赤変硬化している。炉3は中央部に付設されている地床炉である。長径30cm，短径21cmの楕円形で，床面を若干掘り込み，炉床は火を受けて赤変硬化している。これら3基の炉の覆土は踏み固められており，周囲の硬化した床面と同化した状態である。

炉1土層解説

- | | | |
|---|-------|-----------------|
| 1 | 灰 褐 色 | 炭化粒子中量, ローム粒子微量 |
| 2 | 赤 褐 色 | 焼土ブロック中量 |

- | | | |
|---|---------|-------------|
| 3 | 暗 赤 褐 色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 | 明 褐 色 | ロームブロック微量 |

炉2土層解説

- | | | |
|---|--------|----------|
| 1 | 赤 褐 色 | 焼土ブロック多量 |
| 2 | にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量 |

- | | | |
|---|-------|-----------|
| 3 | 褐 色 | ロームブロック中量 |
| 4 | 明 褐 色 | ロームブロック多量 |

炉3土層解説

- | | | |
|---|---------|------------------|
| 1 | 極暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量 |
| 2 | 明 赤 褐 色 | 焼土ブロック中量, 炭化粒子少量 |

- | | | |
|---|--------|----------------|
| 3 | にぶい赤褐色 | 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
|---|--------|----------------|

竈 南西部に付設されている。調査時に掘り過ぎたため、袖部の大部分は壊れているが、規模は焚口から煙道部まで105cm, 燃焼部幅34cmである。第7～15層は袖部で、砂粒と粘土を主体とした褐色土で構築されている。火床面は床面を若干掘り下げ、赤変硬化している。煙道部は壁外まで掘り込まれていない。第1～6層は熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | |
|----|---------|---------------------------------|
| 1 | 暗 赤 褐 色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子微量 |
| 2 | 赤 褐 色 | 焼土ブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 3 | 暗 赤 褐 色 | 焼土ブロック・炭化物少量 |
| 4 | 明 赤 褐 色 | 焼土粒子中量, 炭化粒子微量 |
| 5 | 暗 褐 色 | 焼土粒子少量, ローム粒子微量 |
| 6 | 暗 赤 褐 色 | 焼土ブロック・ローム粒子中量 |
| 7 | 灰 褐 色 | 粘土粒子・砂粒中量, ローム粒子微量 |
| 8 | 暗 褐 色 | 粘土粒子・砂粒中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 9 | にぶい黄褐色 | 粘土粒子・砂粒中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 10 | 暗 褐 色 | 粘土粒子・砂粒中量, 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |

- | | | |
|----|---------|---------------------------------|
| 11 | 褐 色 | 粘土粒子・砂粒中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 12 | 褐 色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 13 | 暗 褐 色 | 粘土粒子・砂粒中量, 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 |
| 14 | にぶい褐色 | 粘土粒子・砂粒中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 15 | 暗 褐 色 | 粘土粒子・砂粒中量, 焼土粒子少量, 炭化物・ローム粒子微量 |
| 16 | 明 赤 褐 色 | 焼土ブロック中量, 炭化粒子微量 |

ピット 6か所。P1～P4は深さ56～70cmで、規模と位置から主柱穴である。P5は深さ36cmで、南東壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットである。P6は深さ12cmで性格は不明である。

貯蔵穴 南コーナー部に位置している。長径100cm, 短径87cmの楕円形で、深さは51cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | | |
|---|-------|------------------------|
| 1 | 黒 褐 色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 暗 褐 色 | ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量 |
| 3 | 暗 褐 色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 4 | 黒 褐 色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |

- | | | |
|---|-------|--------------------------|
| 5 | 暗 褐 色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 6 | 黒 褐 色 | ローム粒子少量 |
| 7 | 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 8 | 褐 色 | ロームブロック少量 |

覆土 8層に分層できる。ロームブロックや炭化物を含んだ堆積状況から埋め戻されている。第9・10層は貼床の構築土である

土層解説

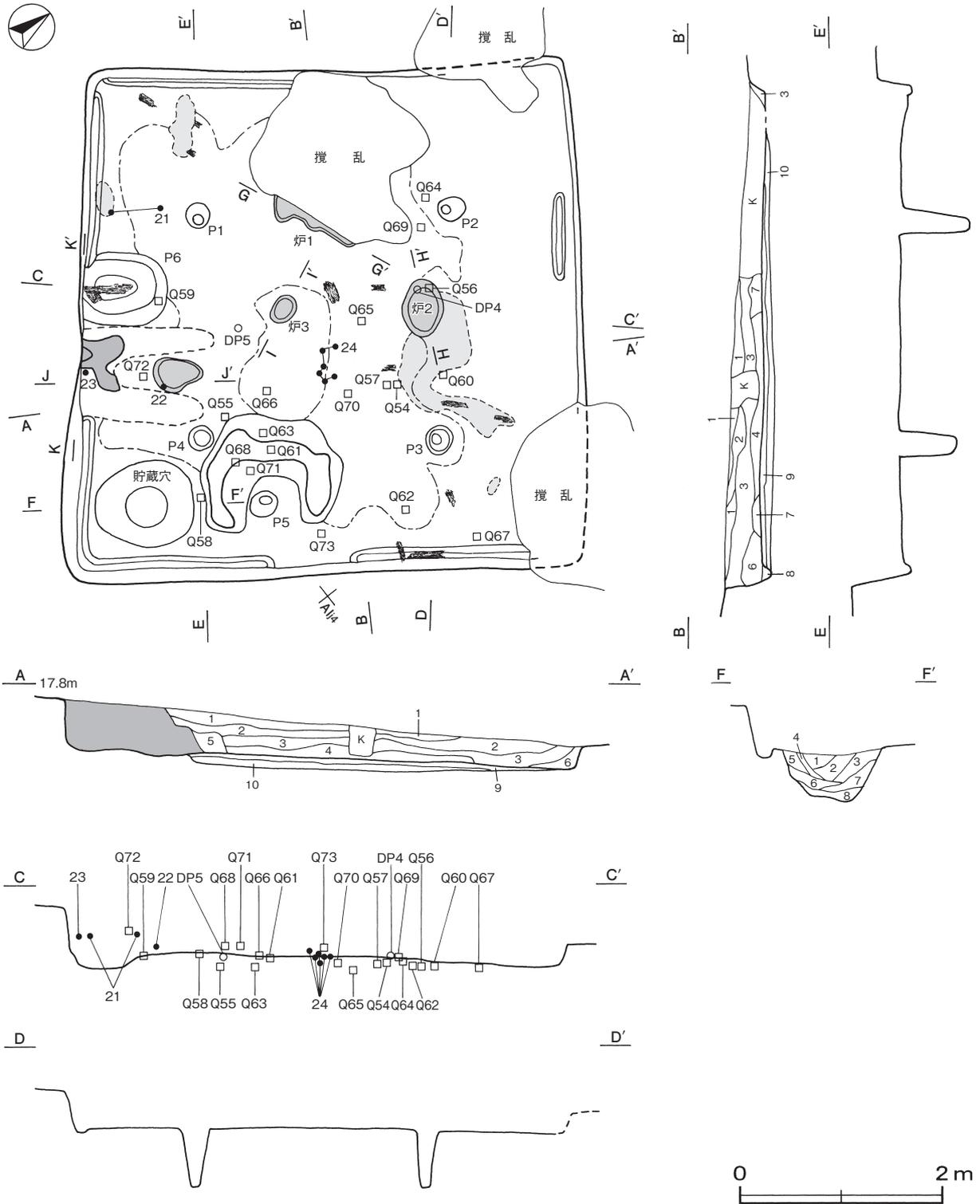
- | | | |
|---|-------|--------------|
| 1 | 黒 褐 色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 極暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 | 褐 色 | ロームブロック少量 |
| 4 | 暗 褐 色 | ロームブロック微量 |
| 5 | にぶい褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 | 明 褐 色 | ローム粒子中量 |

- | | | |
|----|-------|------------------------|
| 7 | 黒 褐 色 | 炭化材中量 |
| 8 | 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 9 | 褐 色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 |
| 10 | 明 褐 色 | ローム粒子中量 |

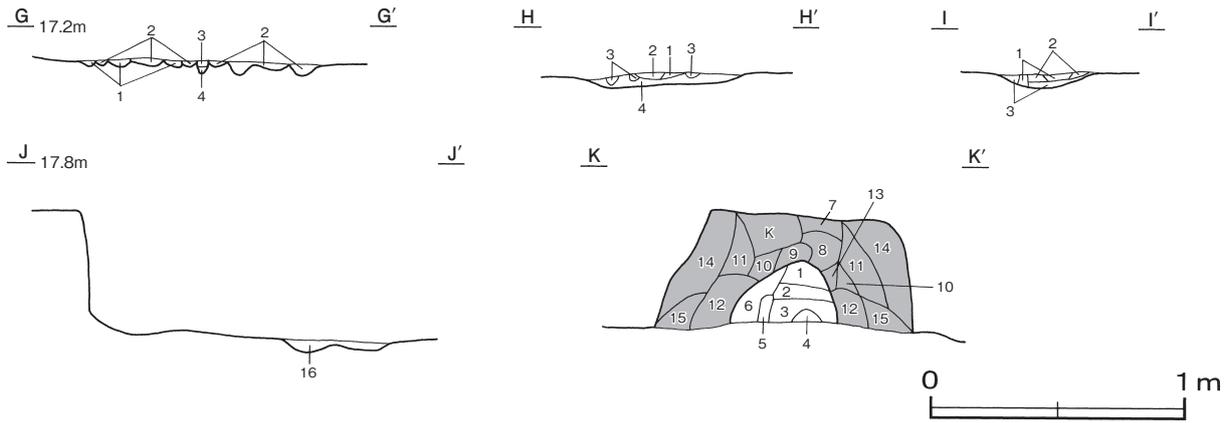
遺物出土状況 土師器片468点(椀39, 坏17, 高坏2, 小形甕1, 甕409), 土製品2点(球状土錘), 滑石1162点[206.08g](白玉成品10[8.55g], 白玉未成品34[5.75g], 剥片545[119.86g], 碎片573[71.92g])が出土している。24は中央部の床面, DP4は炉2炉床面から, 21は北部の覆土中層, 22は竈の燃焼部から, DP5は西部の床面, 23は竈内覆土中層からそれぞれ出土している。また, 滑石片は中央部から南部の覆土中から床面, 貼床構築土中にかけて出土している。覆土中から床面にかけては800点, 貼床構築土中からは362点出土している。Q70は中央部の覆土下層, Q54・Q55・Q57・Q61・Q63・Q65・Q66は中央部の床面, Q56は炉2炉床面から, Q60・Q64・Q69は東部の覆土下層, Q58・Q67・Q68・Q71は南部の覆土下層,

Q 62 は南部の床面，Q 73 は南東部の覆土下層，Q 72 は竈内の覆土上層，Q 59 はP 6 の覆土上層からそれぞれ出土している。

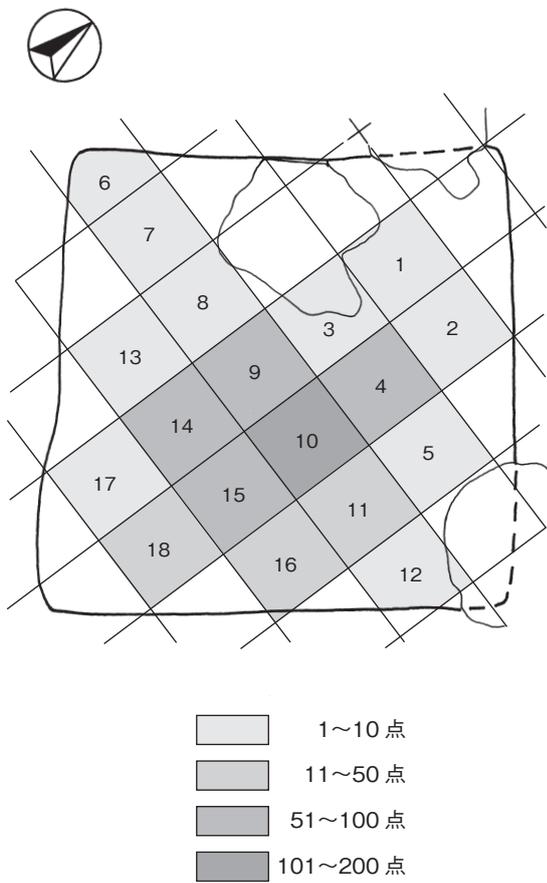
所見 時期は，出土土器から中期後葉に比定できる。床面からの炭化材や焼土塊が確認できたことから焼失住居跡である。3基の炉の関係は不明であるが，炉の後に竈が作られている。また，多くの滑石片は周辺から投げ込まれたものである。



第21図 第7号住居跡実測図(1)



第22図 第7号住居跡実測図(2)



第23図 滑石片出土分布図

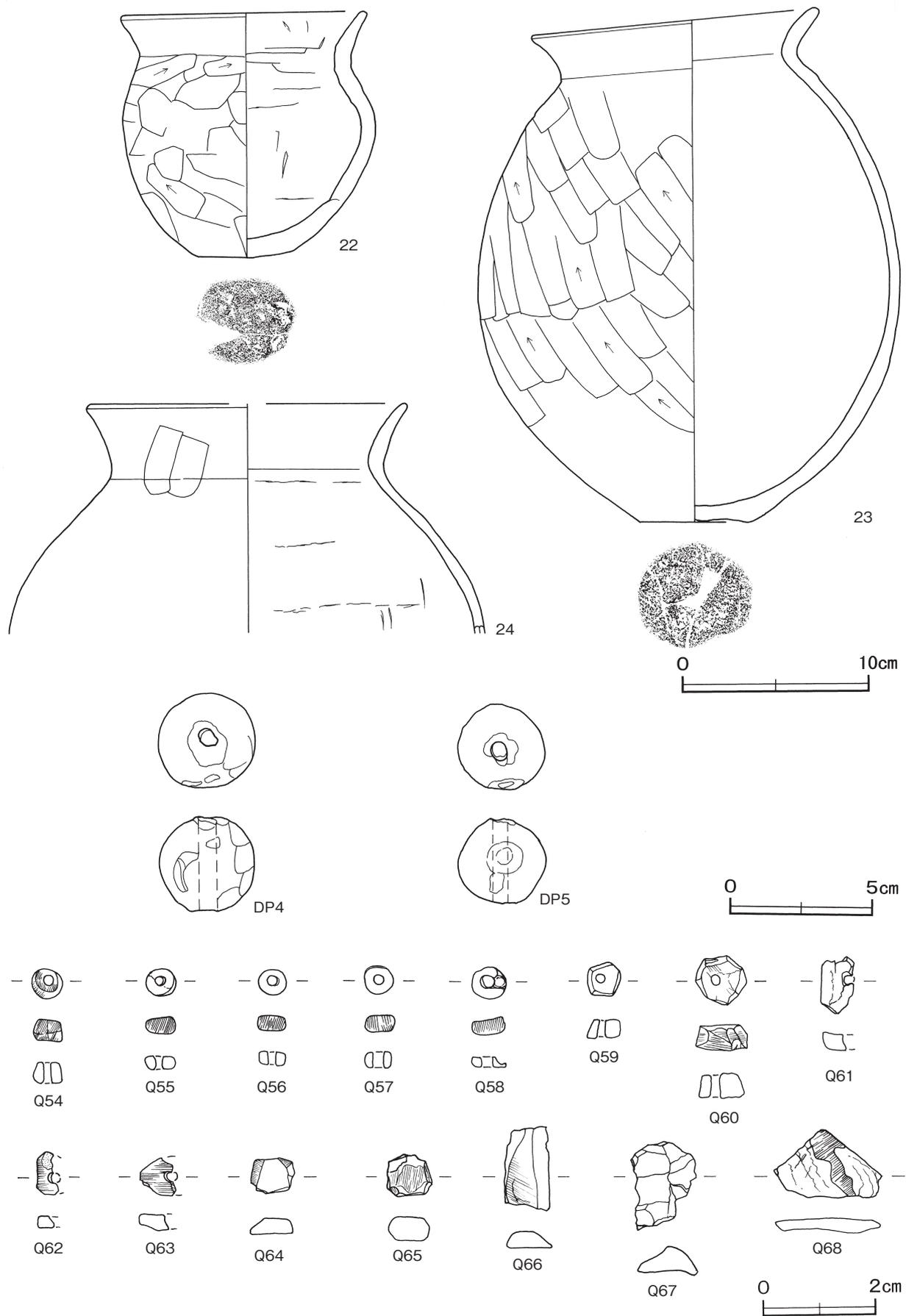
表3 第7号住居跡滑石出土量一覧表

	白玉成品	白玉未成品	剥片	碎片	計
1	0	0	2 (0.25)	1 (0.20)	3 (0.45)
2	0	0	2 (0.29)	5 (0.64)	7 (0.93)
3	0	0	2 (0.40)	1 (0.58)	3 (0.98)
4	1 (0.10)	1 (0.50)	19 (1.88)	36 (3.71)	57 (6.19)
5	0	0	0	2 (0.64)	2 (0.64)
6	1 (0.16)	0	0	0	1 (0.16)
7	1 (0.13)	0	0	0	1 (0.13)
8	0	0	3 (0.30)	2 (0.02)	5 (0.32)
9	0	3 (0.41)	51 (5.10)	33 (4.64)	87 (10.15)
10	2 (0.33)	2 (0.38)	60 (7.30)	91 (11.74)	155 (19.75)
11	0	1 (0.14)	20 (2.60)	17 (2.15)	38 (4.89)
12	0	0	2 (0.65)	1 (0.13)	3 (0.78)
13	0	1 (0.15)	5 (0.32)	1 (0.11)	7 (0.58)
14	1 (0.12)	7 (1.37)	39 (4.56)	15 (1.62)	62 (7.67)
15	0	3 (0.31)	35 (5.80)	26 (4.41)	64 (10.52)
16	0	0	9 (0.86)	17 (2.06)	26 (2.92)
17	0	0	2 (38.05)	0	2 (38.05)
18	1 (0.11)	0	6 (1.78)	5 (0.48)	12 (2.37)
計	7 (0.95)	18 (3.26)	257 (70.14)	253 (33.13)	535 (107.48)

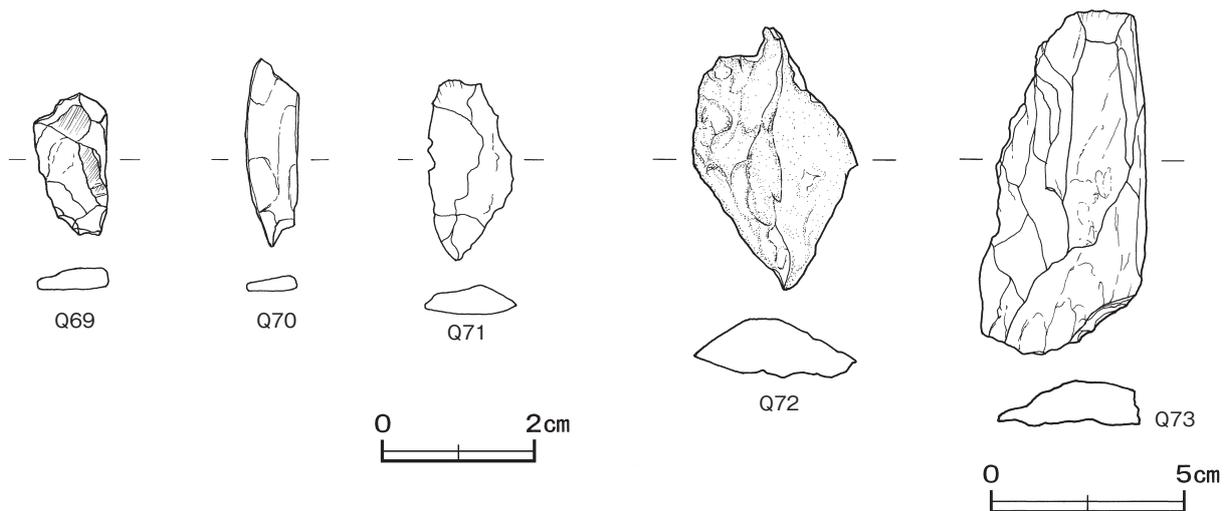
※ () はgを表す



第24図 第7号住居跡出土遺物実測図(1)



第 25 图 第 7 号住居跡出土遺物実測図 (2)



第 26 図 第 7 号住居跡出土遺物実測図 (3)

第 7 号住居跡出土遺物観察表 (第 24 ~ 26 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
21	土師器	椀	[12.8]	(5.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り	覆土中層	30%
22	土師器	小形甕	12.8	13.3	4.9	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナデ 内面ヘラナデ 体部外面ヘラ削り	竈燃焼部	95% PL10
23	土師器	甕	15.5	27.8	6.0	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り	竈内覆土中層	95% PL9
24	土師器	甕	[17.0]	(12.3)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外面横ナデ後, ヘラ削り	床面	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 4	球状土錘	3.4	3.4	0.7	38.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	ナデ	炉 2 炉床面	
DP 5	球状土錘	3.1	3.0	0.5	26.7	長石・雲母	ナデ	床面	PL10

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 54	白玉	0.55	0.42	0.15	0.18	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	床面	PL10
Q 55	白玉	0.50	0.35	0.15	0.12	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	床面	PL10
Q 56	白玉	0.50	0.30	0.20	0.10	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	炉 2 炉床面	PL10
Q 57	白玉	0.50	0.30	0.20	0.15	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	床面	
Q 58	白玉	0.50	0.30	0.20	(0.11)	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔 一部欠損	覆土下層	PL10
Q 59	白玉未成品	0.60	0.31	0.13	0.15	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔	P 6 覆土上層	PL10
Q 60	白玉未成品	0.86	0.43	0.15	0.50	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔	覆土下層	PL10
Q 61	白玉未成品カ	1.00	0.30	0.15	(0.24)	滑石	未研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	床面	
Q 62	白玉未成品	0.80	0.30	0.20	(0.14)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	床面	PL10
Q 63	白玉未成品	0.80	0.30	0.20	(0.18)	滑石	一部研磨 未整形 一方向からの穿孔 欠損品	床面	PL10
Q 64	白玉未成品	0.63	0.30	-	0.20	滑石	一部研磨 未整形 未穿孔	覆土下層	
Q 65	白玉未成品	0.70	0.45	-	0.48	滑石	一部研磨 未整形 未穿孔	床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 66	滑石剥片	1.40	0.80	0.25	0.58	滑石	研磨 板状	床面	
Q 67	滑石剥片	1.50	1.10	0.48	0.54	滑石	未研磨 三角柱状 形製品	覆土下層	
Q 68	滑石剥片	1.20	1.90	0.30	0.66	滑石	研磨 板状	覆土下層	
Q 69	滑石剥片	1.83	0.93	0.32	0.58	滑石	研磨 板状	覆土下層	
Q 70	滑石剥片	2.44	0.70	1.09	0.45	滑石	未研磨 板状	覆土下層	
Q 71	滑石剥片	2.40	1.00	0.35	1.02	滑石	未研磨 板状 荒製品	覆土下層	
Q 72	滑石剥片	6.98	4.36	1.55	37.80	滑石	未研磨 三角柱状 荒製品	竈内覆土上層	
Q 73	滑石剥片	9.10	4.40	1.10	54.00	滑石	未研磨 板状 荒製品	覆土下層	PL10

第8号住居跡（第27図）

位置 調査区北西部のB1f2区、標高18.4mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.89m、短軸3.93mのややゆがんだ長方形で、主軸方向はN-100°-Wである。壁高は20～26cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部から南壁にかけて硬化面が認められる。また、西壁を除いて壁溝が確認できた。壁際から炭化材・焼土塊が確認できた。

炉 2か所。炉1は中央部やや南寄りに付設されている地床炉である。長径68cm、短径45cmの楕円形で、床面を若干掘り込んでいる。炉床は火を受けて赤変硬化している。覆土は踏み固められており、周囲の硬化した床面と同化した状態である。炉2は中央部に付設されている地床炉である。長径90cm、短径70cmの楕円形で、床面を若干掘り込んでいる。炉床は火を受けて赤変硬化している。

炉1土層解説

1 にぶい赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

2 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量

炉2土層解説

1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量

2 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量

ピット 3か所。P1・P2は深さ28cm・29cmで規模と位置から支柱穴と考えられる。P3は深さ19cmで、規模と配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北西コーナー部に位置している。長径108cm、短径94cmの楕円形で、深さは48cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 にぶい黄褐色 ロームブロック多量

6 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

7 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

3 黒褐色 ロームブロック・炭化物中量、焼土粒子微量

8 明褐色 ロームブロック中量

9 にぶい褐色 ロームブロック中量

4 黒褐色 炭化物・ローム粒子中量、焼土粒子少量

10 褐色 ロームブロック多量

5 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量

覆土 24層に分層できる。ロームブロックや焼土塊・炭化物を含んだ堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量

13 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量

2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

14 黒褐色 ロームブロック少量

3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

15 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

16 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

17 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

18 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

6 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

19 暗褐色 ロームブロック中量

7 暗褐色 ロームブロック少量

20 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量

8 黒褐色 炭化粒子中量、ロームブロック少量

21 暗褐色 ローム粒子中量

9 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量

22 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子微量

10 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

23 褐色 焼土粒子中量、炭化物・ローム粒子微量

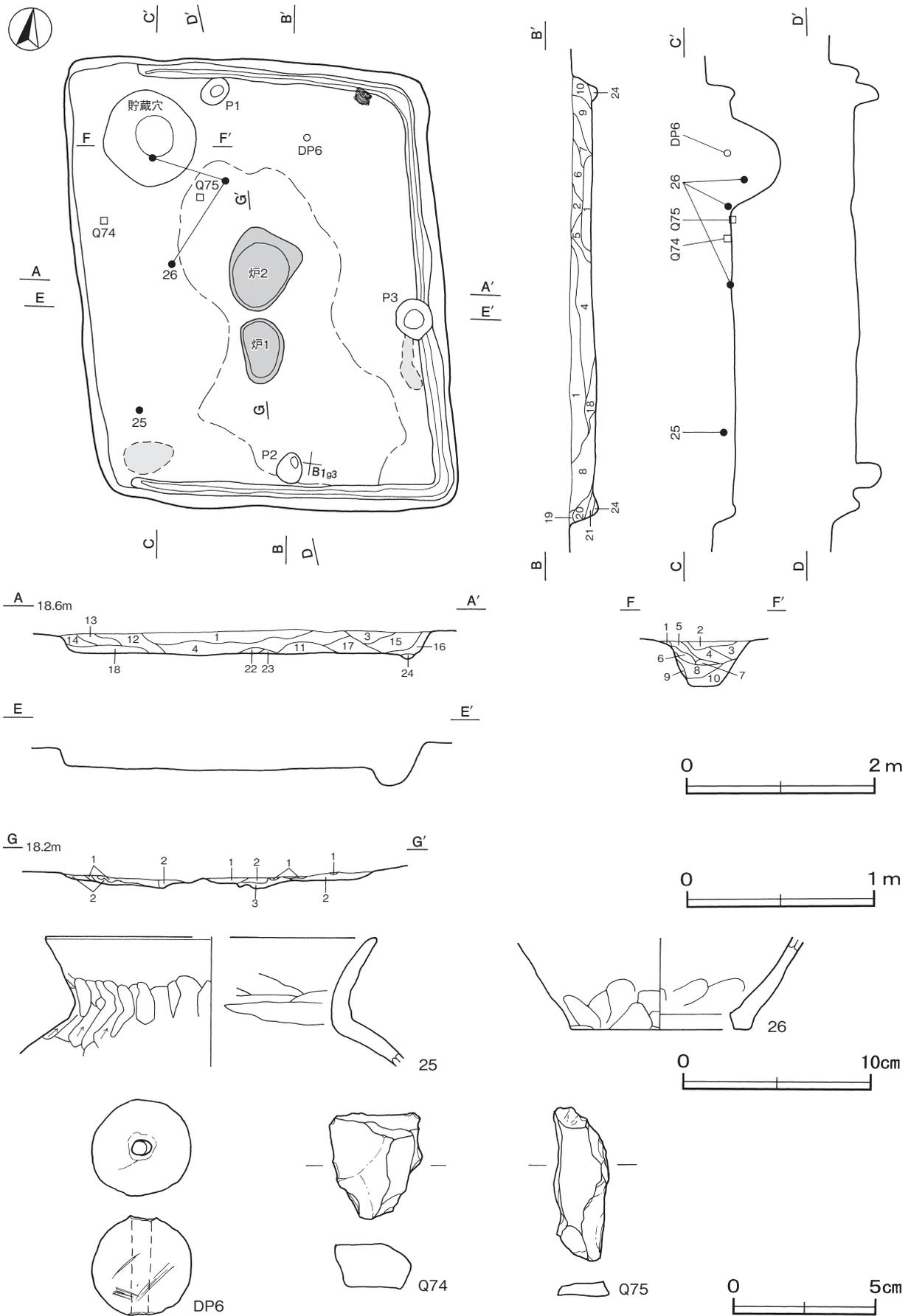
11 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

24 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

12 にぶい黄褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片248点（椀23、甕221、甌4）、土製品1点（球状土錘）、滑石2点（滑石剥片）が出土している。DP6は北東部の覆土下層から、25は南西部の覆土中層から、26は北西部の覆土下層から貯蔵穴覆土上層にかけて散乱した状態で、Q74は北西部の覆土下層、Q75は北西部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉に比定できる。床面で炭化材や焼土塊が確認できたことから、焼失住居である。2基の炉の関係は、炉1の覆土が硬化した状況から炉1の使用後に炉2が作られたものとする。



第 27 図 第 8 号住居跡・出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表（第27図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
25	土師器	甕	[17.4]	(6.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ後外面ヘラ削り	中層	10%
26	土師器	甗	-	(4.9)	[9.5]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端ヘラ削り内面ヘラナデ	覆土下層～貯蔵穴上層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 6	球状土錘	3.5	3.6	0.65	43.2	長石・雲母	ナデ調整 一方向からの穿孔	覆土下層	PL10

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 74	滑石剥片	3.80	3.20	1.70	29.90	滑石	未研磨 板状 荒制品	覆土下層	
Q 75	滑石剥片	5.50	1.95	0.50	7.75	滑石	未研磨 板状 荒制品	床面	

第9号住居跡（第28・29図）

位置 調査区中央部東寄りのC1h3区，標高18.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第43号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.25m，短軸5.02mの方形で，主軸方向はN-63°-Wである。壁高は34～46cmで，ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で，硬化面は認められない。壁溝がほぼ全周している。

炉 中央部やや西寄りに付設されている地床炉である。長径80cm，短径68cmの楕円形で，床面を5cmほど掘り込んでいる。炉床は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|---------------|----------|-----------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子中量，焼土粒子微量 | 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量，炭化粒子微量 |
| 2 赤褐色 | 焼土粒子中量，炭化粒子微量 | 4 にぶい赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |

ピット 6か所。P1～P4は深さ7～16cmで，規模と位置から主柱穴である。P5は深さ8cmで，南東壁際に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ15cmで，性格は不明である。

覆土 21層に分層できる。ロームブロックや炭化物を含んだ堆積状況から埋め戻されている。

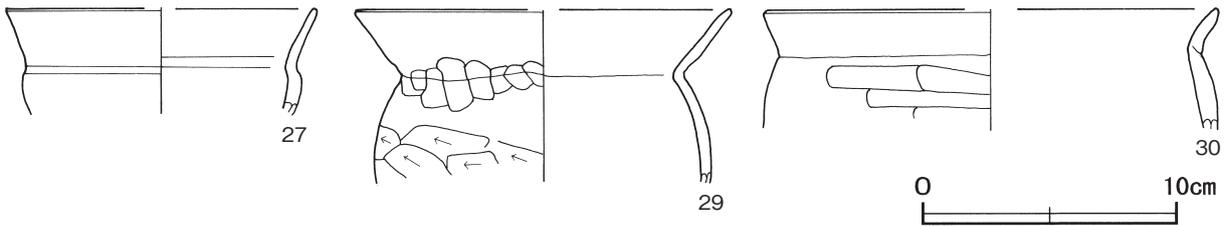
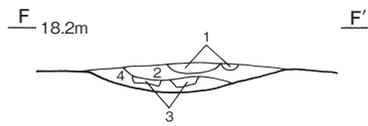
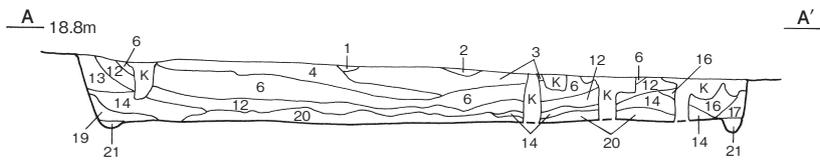
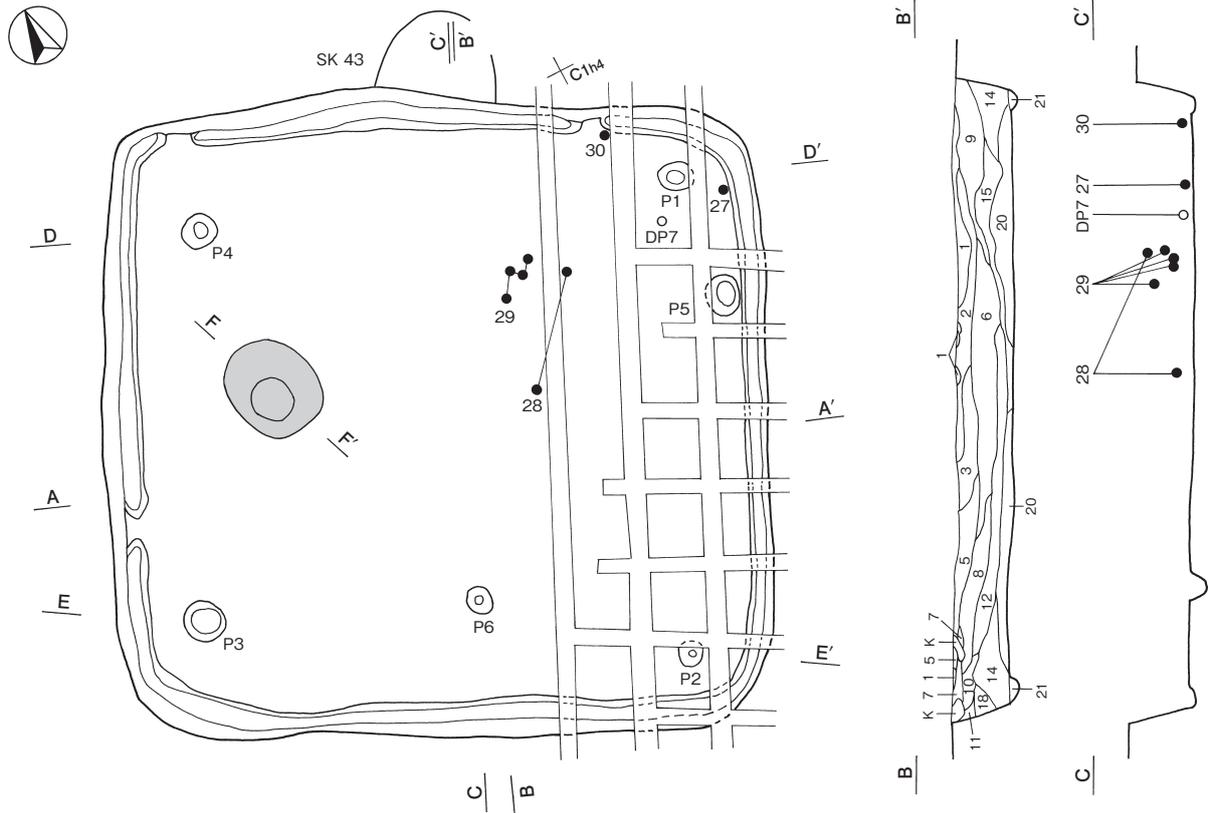
土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------------|----------|-------------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子少量 | 11 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 黒褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量，炭化粒子少量，ロームブロック微量 | 13 褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 14 暗褐色 | ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 炭化物少量，ローム粒子・焼土粒子微量 | 15 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 16 にぶい褐色 | ロームブロック中量，焼土粒子微量 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック少量 | 17 褐色 | ローム粒子中量，炭化粒子微量 |
| 8 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 18 褐色 | ロームブロック中量，炭化物微量 |
| 9 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 19 明褐色 | ロームブロック多量 |
| 10 にぶい褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 20 褐色 | ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| | | 21 黒褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 |

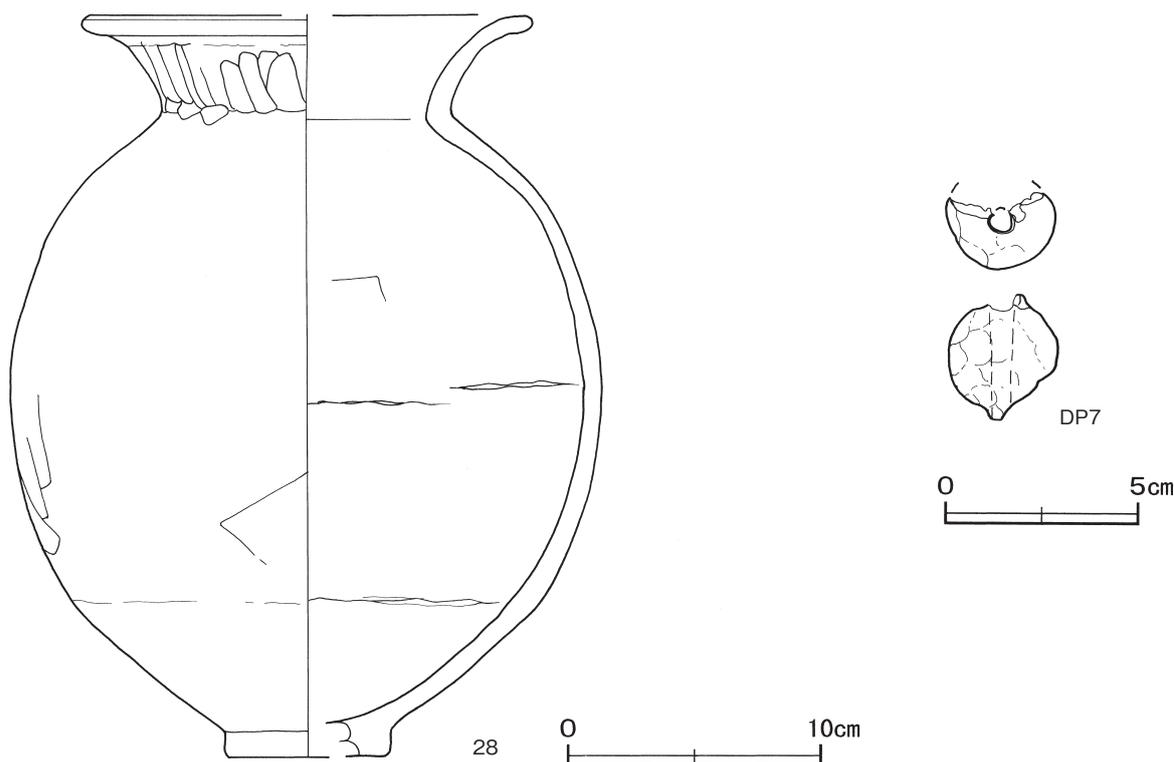
遺物出土状況 土師器片82点（坏21，埴2，甕59），土製品3点（土玉2，球状土錘1）が出土している。

28・29は中央部の覆土上層から下層にかけて散乱した状態で，27・30は北東部壁際の覆土下層，DP7は北東コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から中期中葉に比定できる。



第 28 図 第 9 号住居跡・出土遺物実測図



第 29 図 第 9 号住居跡出土遺物実測図

第 9 号住居跡出土遺物観察表 (第 28・29 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色調	焼成	手 法 の 特 徴 ほか	出土位置	備考
27	土師器	罎	[12.2]	(4.2)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	覆土下層	5%
28	土師器	甕	[17.8]	29.4	[6.4]	長石・石英・雲母 ・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ後へら削り 体部 外面へら削り	覆土上～ 覆土下層	35%
29	土師器	甕	[14.7]	(6.8)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へ ら削り	覆土上～ 覆土下層	5%
30	土師器	甕	[17.8]	(4.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へ ら削り	覆土下層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎 土	特 徴	出土位置	備考
DP 7	球状土錘	2.9	3.3	0.7	(13.2)	長石・雲母	ナデ調整 二方向からの穿孔	覆土下層	

第 10 号住居跡 (第 30・31 図)

位置 調査区中央部西寄りの D 1 a2 区, 標高 18.6 m の台地平坦部に位置している。

重複関係 第 1 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部が調査区域外に延びているため, 南北軸は 5.62 m で, 東西軸は 4.40 m しか確認できなかった。形状は方形もしくは長方形と推測できる。主軸方向は N - 30° - E である。壁高は 24 ~ 30cm で, ほぼ直立している。

床 平坦で, 中央部に硬化面が認められる。壁溝が南コーナー部を除いて確認できた。

炉 2 か所。炉 1 は北東部に付設されている地床炉である。長径 116cm, 短径 40cm の不整形で, 床面を若干掘り込んでいる。炉床は火を受けて赤変硬化している。炉 2 は北西寄りに付設されている地床炉である。西部が調査区域外に延びているため, 南北径 50cm, 東西径 22cm しか確認できなかった。床面を若干掘り込み, 炉床は火を受けて赤変硬化している。

炉1土層解説

1 におい赤褐色 焼土ブロック多量

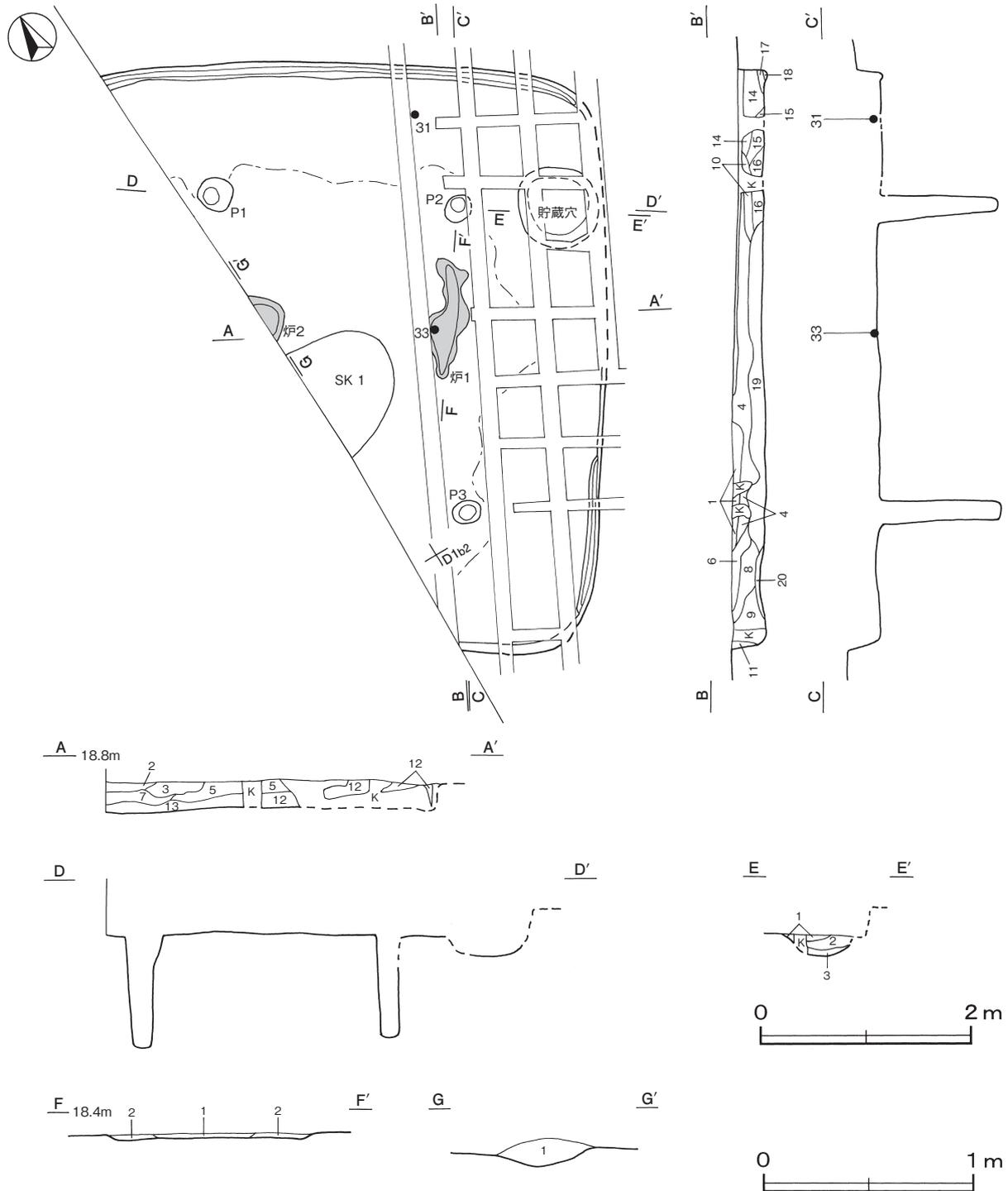
2 暗赤褐色 焼土ブロック中量, 炭化粒子微量

炉2土層解説

1 赤褐色 焼土ブロック多量, 炭化粒子微量

ピット 3か所。P1～P3は深さ106～116cmで、規模と位置から主柱穴である。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。四方に攪乱を受けているが、径75cmほどの円形と推測される。深さは20cmで、底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土はブロック状の堆積状況から埋め戻されている。



第30図 第10号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 明褐色 ロームブロック中量

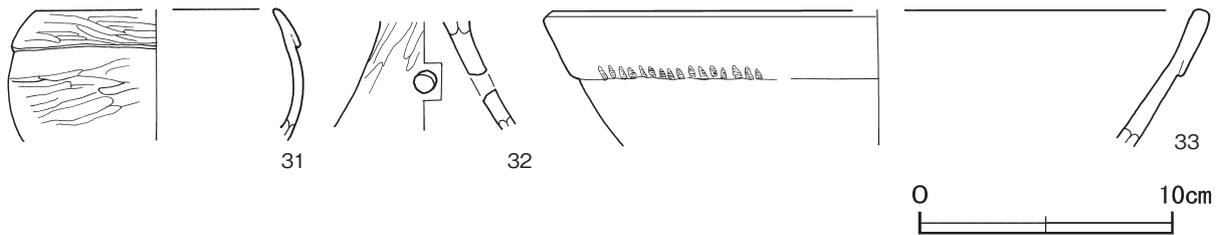
覆土 20層に分層できる。レンズ状の堆積から自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量, ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 4 極暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土ブロック微量
- 7 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 8 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 11 褐色 ロームブロック中量
- 12 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化物少量
- 13 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 14 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 15 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 16 にぶい褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 17 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 18 にぶい褐色 ローム粒子少量
- 19 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 20 暗褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片73点(碗59, 器台9, 甕5), 土製品1点(土玉)が出土している。31は北東部の覆土下層, 32は北東部の覆土下層から貯蔵穴の覆土中にかけて散乱した状態で, 33は炉1の炉床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から前期前葉に比定できる。



第31図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表(第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
31	土師器	碗	[9.4]	(5.2)	-	長石	にぶい橙	普通	口縁部折り返し後, ヘラ磨き 外面ヘラ磨き	覆土下層	10%
32	土師器	器台	-	(4.4)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ磨き	覆土下層~ 貯蔵穴覆土中	5%
33	土師器	鉢カ	[25.6]	(5.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部折り返し後, ヘラ状工具によるキザミを施文	炉床面	5%

表4 竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長軸×短軸	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
								主柱穴	出入口 ピット	ピット	貯蔵穴	竈・炉				
1	B1c5	N-130°-E	方形	4.60×4.50	18~50	平坦	一部	4	1	3	1	炉	人為	土師器, 土製品, 滑石	中期後葉	
2	B1b4	N-32°-W	方形	3.80×3.80	34~42	平坦	一部	-	-	1	1	炉	人為	土師器, 滑石	中期後葉	
3	B1e5	N-34°-E	方形	3.60×3.50	14~24	平坦	一部	-	-	-	-	炉	自然	土師器, 滑石	前期後葉	本跡→SD1
4	B1g5	N-23°-E	方形	5.00×5.00	14~34	平坦	一部	-	-	2	-	炉3	人為	土師器, 滑石	中期後葉	本跡→SK5
5	C1f5	N-127°-W	方形	5.80×5.80	46~62	平坦	全周	3	1	1	1	竈	人為	土師器	中期後葉	
6	C1f9	N-60°-W	[方形]	[4.38]×4.04	14~32	平坦	-	2	-	-	-	炉	人為	土師器, 滑石	中期	
7	A1i3	N-145°-W	方形	5.08×4.91	21~56	平坦	一部	4	1	1	1	炉3・竈	人為	土師器, 土製品, 滑石	中期後葉	
8	B1f2	N-100°-W	長方形	4.89×3.93	20~26	平坦	一部	2	1	-	1	炉2	人為	土師器, 土製品, 滑石	中期後葉	
9	C1h3	N-63°-W	方形	5.25×5.02	34~46	平坦	ほぼ全周	4	1	1	-	炉	人為	土師器, 土製品	中期中葉	SK43→本跡
10	D1a2	N-30°-E	[方形・長方形]	5.62×(4.40)	24~30	平坦	一部	3	-	-	1	炉2	自然	土師器, 土製品	前期前葉	本跡→SK1

(2) 土坑

第1号土坑 (第32図)

位置 調査区中央部西寄りのD1a2区, 標高18.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第10号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 西部が調査区域外に延びているため, 南北径は1.20mで, 東西径は0.84mしか確認できなかった。形状は円形もしくは楕円形と推測され, 長径方向は不明である。深さは40cmで, 底面は平坦である。壁は直立している。

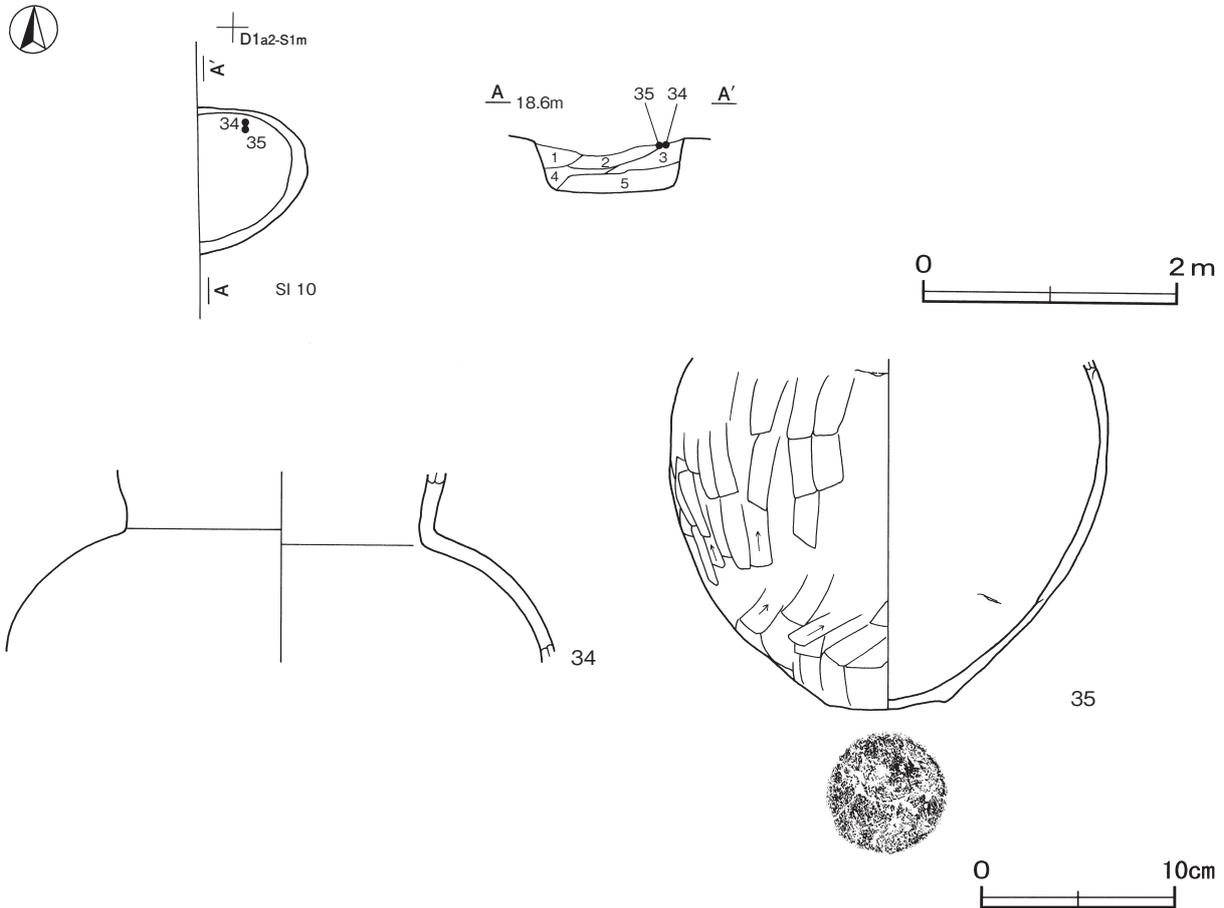
覆土 5層に分層できる。ロームブロックや炭化物を含んだ堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子少量, ロームブロック微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック・炭化物少量 | 5 明褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 3 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片8点(椀3, 甕5)が出土している。34・35は北部の覆土上層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期である。



第32図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表 (第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
34	土師器	甕	-	(9.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	頭部外・内面横ナデ 体部外面摩耗 顕著	覆土上層	5%
35	土師器	甕	-	(18.3)	6.0	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り	覆土上層	50%

4 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡1軒と土坑2基が確認されている。以下、検出した遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第13号住居跡 (第33・34図)

位置 調査区南東部のE1b9区、標高17.5mの台地縁辺斜面部に位置している。

重複関係 第42号土坑に掘り込まれている。

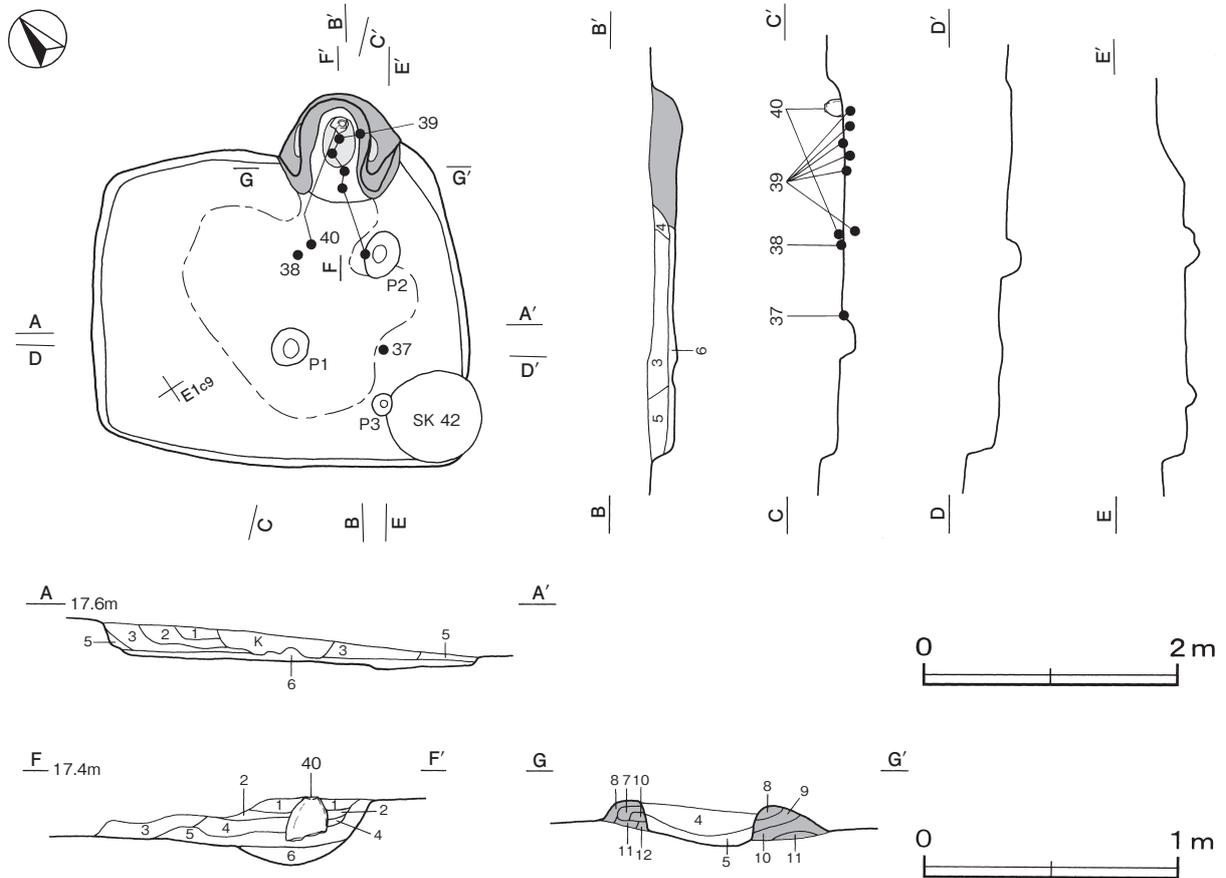
規模と形状 長軸2.89m、短軸2.48mの長方形で、主軸方向はN-33°-Eである。壁高は7~20cmで、ほぼ直立している。

床 やや東に傾斜しているが平坦で、中央部から竈前面にかけて硬化面が認められる。

竈 北東壁際に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで83cm、燃烧部幅40cmである。第7~12層が袖部で、砂粒と粘土を主体とする褐色土で構築されている。火床面は床面を若干掘り下げ、赤変硬化している。煙道部は壁外へ39cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

土層解説

- | | | | |
|----------|------------------------|-----------|------------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量 | 8 にぶい黄褐色 | 粘土粒子・砂粒中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 灰褐色 | 粘土粒子・砂粒中量, 焼土ブロック少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 10 褐色 | 粘土粒子・砂粒中量, 焼土粒子少量 |
| 4 にぶい黄褐色 | 粘土粒子少量, 炭化物微量 | 11 にぶい黄褐色 | 粘土粒子・砂粒中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 5 赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 12 暗褐色 | 粘土粒子・砂粒中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量 | | |
| 7 橙色 | 焼土ブロック中量, 炭化粒子微量 | | |



第33図 第13号住居跡実測図

ピット 3か所。P1～P3は深さ14～20cmで、性格不明である。

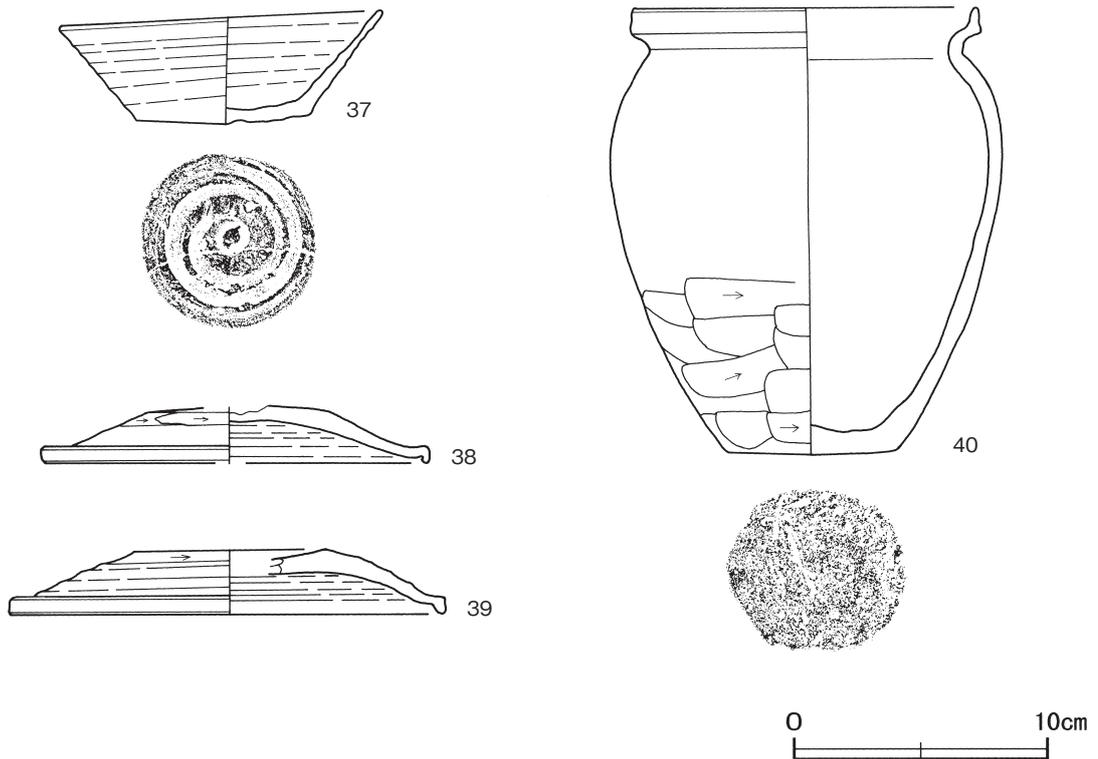
覆土 6層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|----------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 にぶい褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子微量 | 5 明褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | 6 にぶい黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片64点(坏15, 高台付坏3, 小形甕3, 甕43), 須恵器片8点(坏3, 蓋5)が出土している。37は南部の床面, 38は竈前面の床面, 39は竈内から竈前面の床面から出土している。40は竈の燃焼部から逆位で出土しており, 支脚に転用されている。

所見 時期は, 出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第34図 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表(第34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
37	須恵器	坏	12.8	4.5	6.8	長石・石英・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り	覆土下層	100% PL9
38	須恵器	蓋	[15.1]	(2.3)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り つまみ欠損	覆土下層	50%
39	須恵器	蓋	17.2	(2.6)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	天井部回転ヘラ削り つまみ欠損	竈火床面～覆土下層	70%
40	土師器	小形甕	13.6	17.7	6.6	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部下端横位のヘラ削り 底部ヘラ削り	竈内	80% PL10

(2) 土坑

第2号土坑(第35図)

位置 調査区中央部南西寄りのD1f3区, 標高18.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.78m, 短径0.74mの円形である。深さは12cmで, 底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

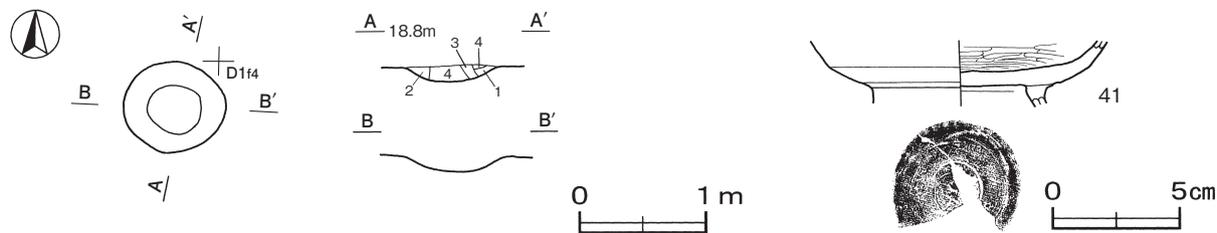
覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含んだ堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 明褐色 ローム粒子中量
- 4 極暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片1点（高台付坏）が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半に比定できる。



第35図 第2号土坑・出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
41	土師器	高台付坏	-	(2.6)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	内面横位のヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け	覆土中	30%

第42号土坑（第36図）

位置 調査区南東部のE1c9区、標高17.2mの台地縁辺斜面部に位置している。

重複関係 第13号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径0.75mの円形である。深さは20cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

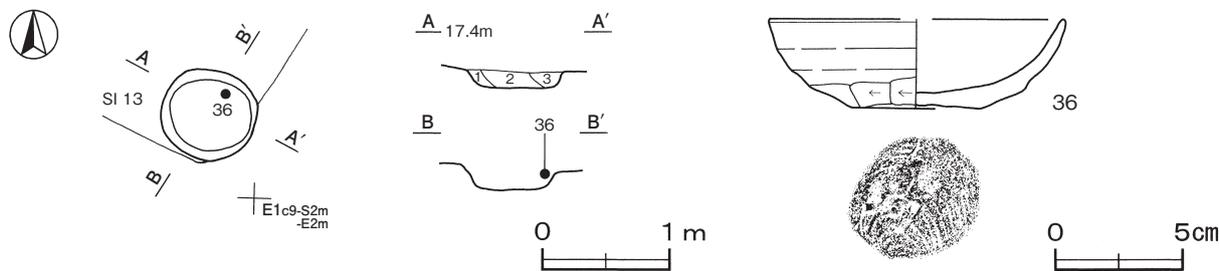
覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含んだ堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片8点（坏1，高台付坏1，甕6）が出土している。36は北東部の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半に比定できる。



第36図 第42号土坑・出土遺物実測図

第42号土坑出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
36	土師器	坏	[11.6]	3.6	5.2	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部静止糸切り後、ナデ	覆土上層	75% PL9

表5 土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模(m) 長径×短径	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
2	D1f3	-	円形	0.78 × 0.74	12	外傾	皿状	人為	土師器	
42	E1c9	-	円形	0.75 × 0.75	20	外傾	平坦	人為	土師器	SI13 → 本跡

5 その他の遺構と遺物

遺物が出土していないことなどから、時期を明確にできない竪穴住居跡1軒、土坑41基、溝跡5条が確認されている。以下、検出した遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第11号住居跡(第37図)

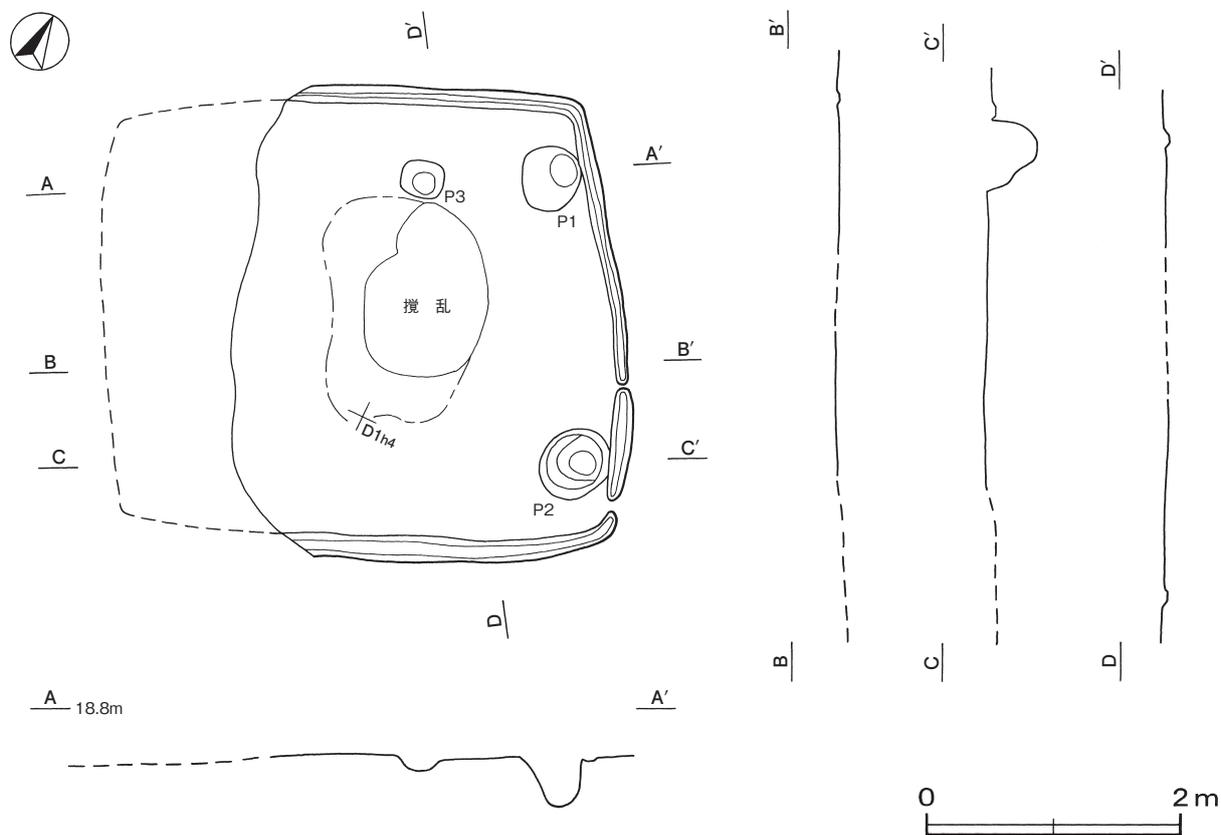
位置 調査区南西部のD1g3区、標高18.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西部が削平されているため、南北軸は3.75m、東西軸は推定4.13mで、長方形と推測できる。主軸方向はN-26°-Wである。

床 露出した状態で確認された。ほぼ平坦で、中央部に硬化面が認められる。また、確認した部分では壁溝が巡っている。

ピット 3か所。P1・P2は深さ40cm・38cmで規模と位置から支柱穴と考えられる。P3は深さ10cmで、性格は不明である。

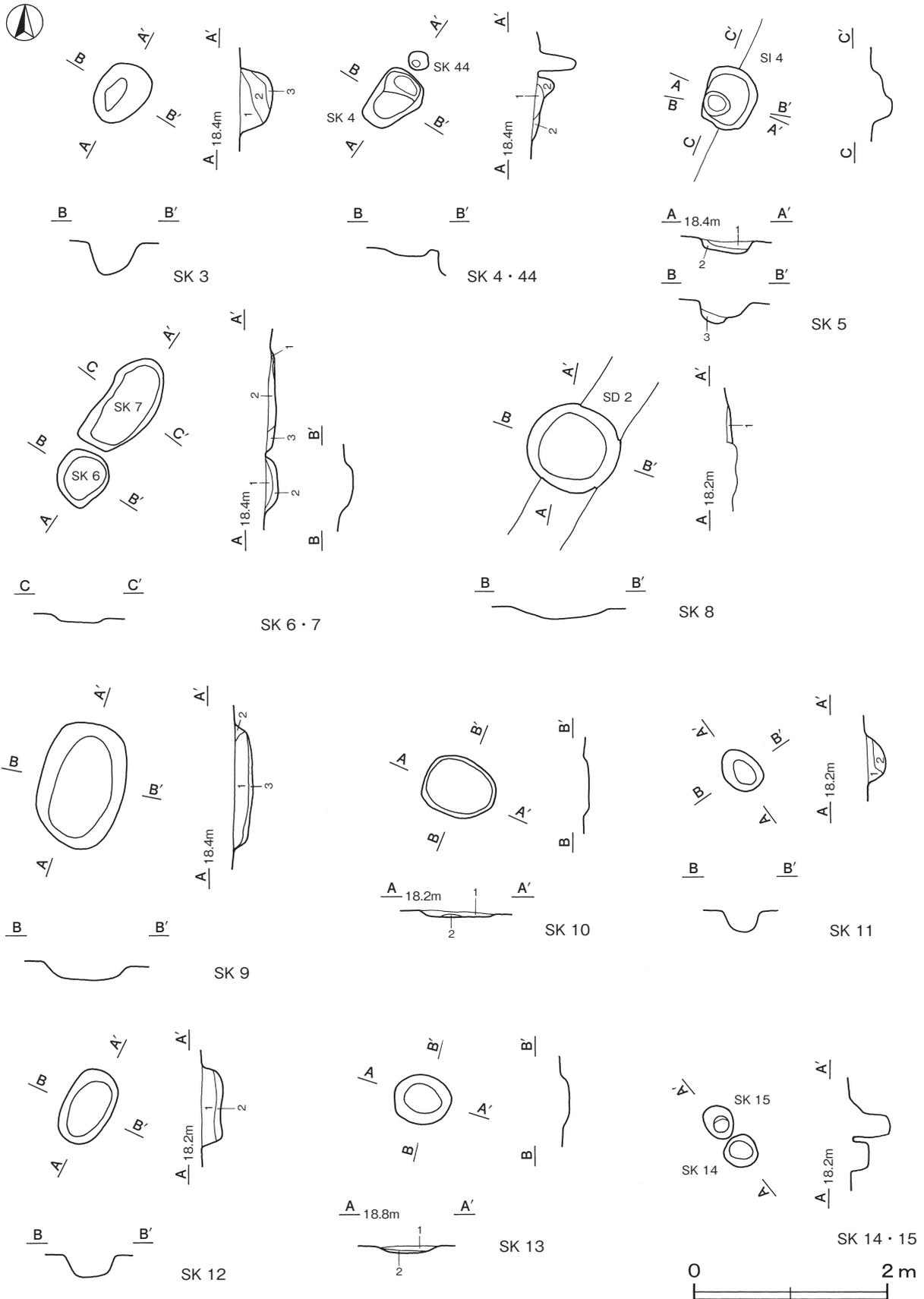
所見 時期は、遺構に伴う遺物が出土していないため不明である。



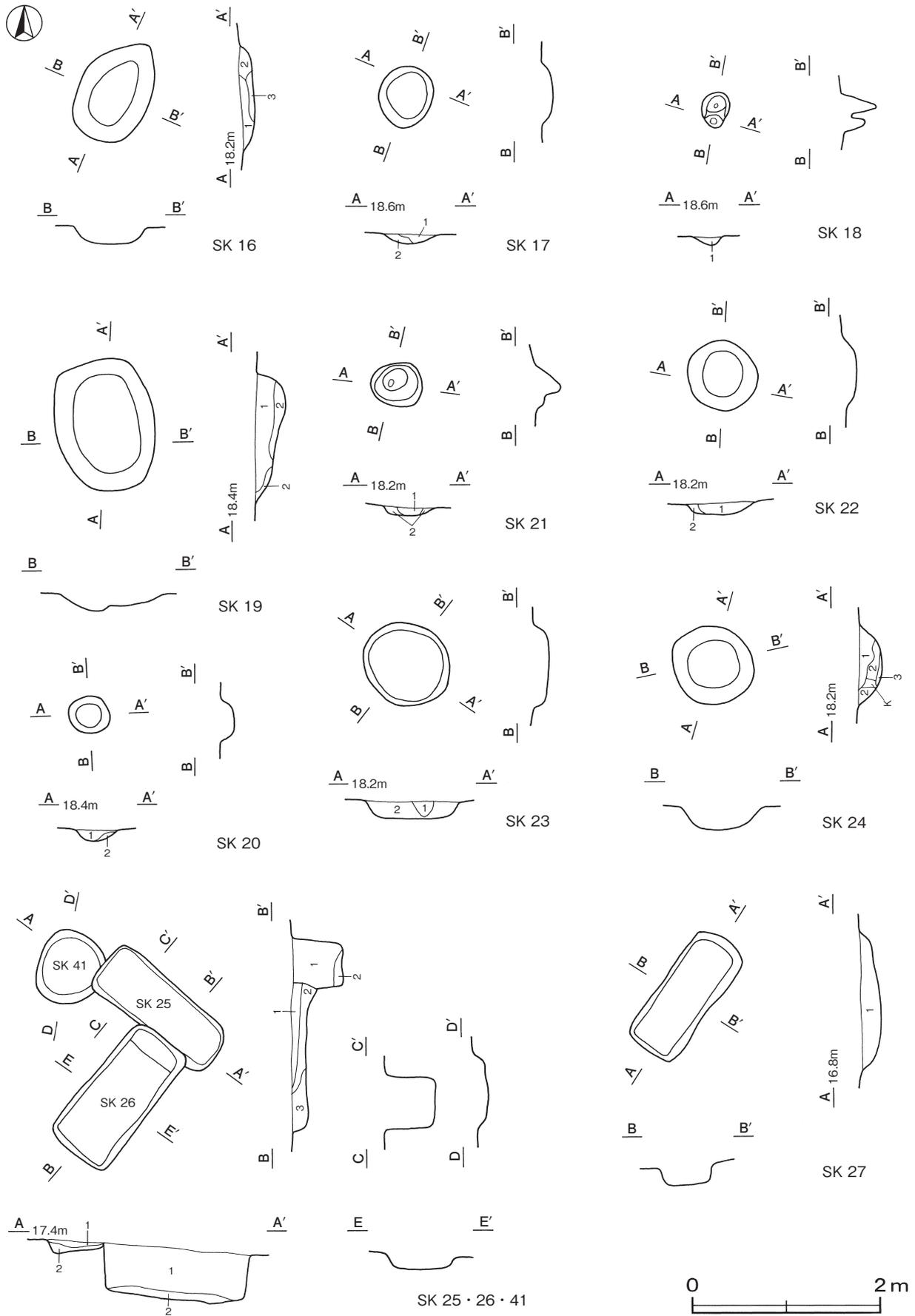
第37図 第11号住居跡実測図

(2) 土坑 (第 38 ~ 40 図)

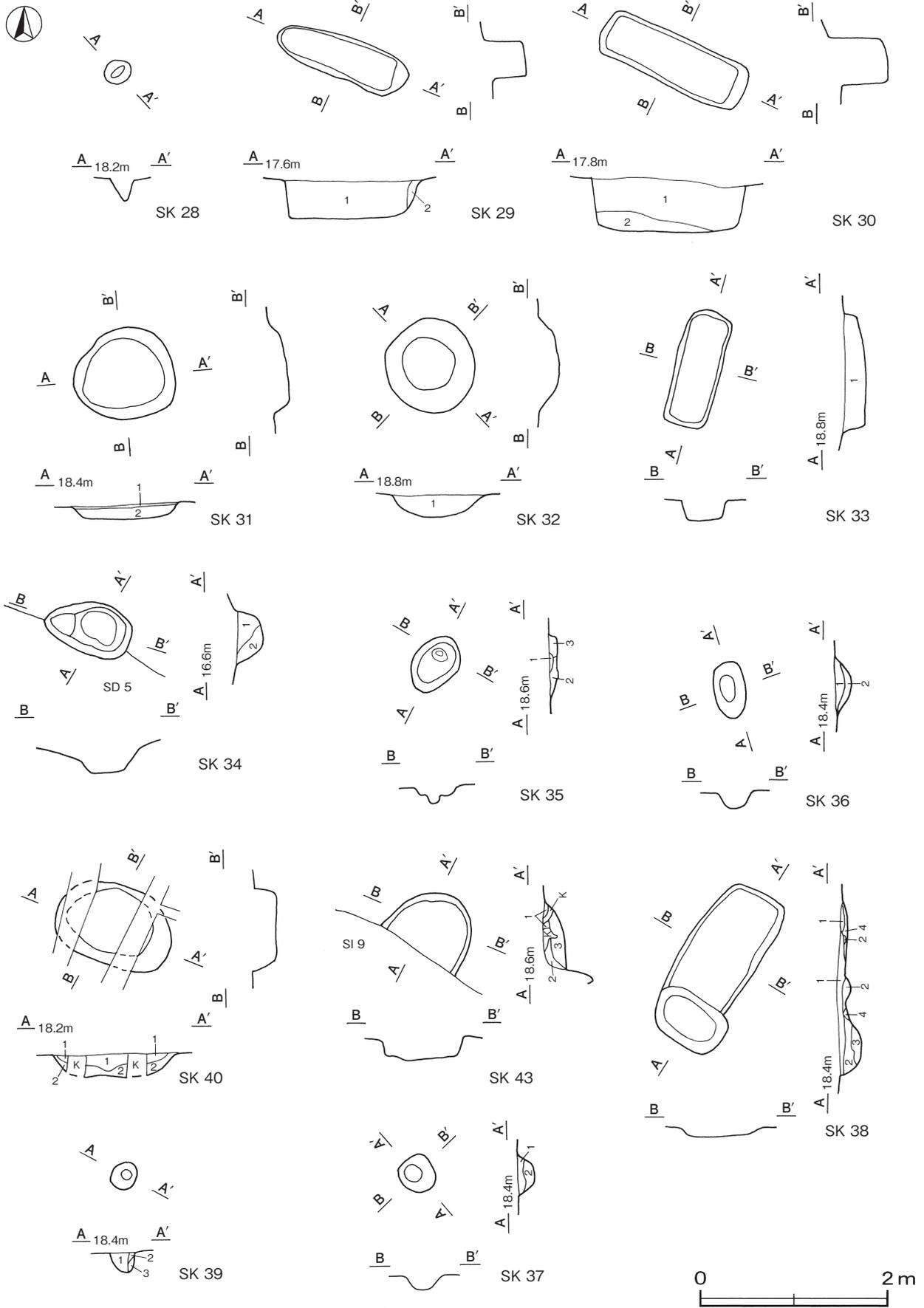
時期・性格ともに不明な土坑 41 基については、規模・形状等について実測図と一覧表を掲載する。



第 38 図 その他の土坑実測図 (1)



第 39 図 その他の土坑実測図 (2)



第40図 その他の土坑実測図(3)

第3号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第4号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 2 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第5号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量

第6号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 明褐色 ローム粒子多量

第7号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 明褐色 ローム粒子中量

第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・ローム粒子微量

第9号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 橙褐色 ロームブロック多量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第10号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 明褐色 ローム粒子中量

第11号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

第12号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第13号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第16号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第17号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第18号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量

第19号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第20号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第21号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 明褐色 ロームブロック少量

第22号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 明褐色 ローム粒子中量

第23号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第24号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量

第25号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第26号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量

第27号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第29号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 明褐色 ローム粒子微量

第30号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化物微量
- 2 赤褐色 焼土粒子中量, ロームブロック・炭化粒子微量

第31号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第32号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子微量

第33号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

第34号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

第35号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 明褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第36号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量
- 2 明褐色 ロームブロック中量

第37号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック多量

第38号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック少量

第39号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 にぶい褐色 ロームブロック少量

第40号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第41号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 明褐色 ロームブロック少量

第43号土坑土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量
- 3 褐色 ロームブロック中量

表6 土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模(m) 長径×短径	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
3	C1i8	N-28°-E	楕円形	0.70×0.52	33	直立	皿状	人為	-	
4	B1e5	N-35°-E	隅丸長方形	0.66×0.46	8	緩斜	皿状	自然	-	
5	B1g4	N-21°-E	隅丸長方形	0.65×0.52	20	外傾	平坦	人為	土師器	SI4→本跡
6	C1a7	-	円形	0.55×0.52	15	外傾	平坦	自然	土師器	
7	C1a7	N-37°-E	楕円形	1.19×0.54	9	緩斜	平坦	自然	土師器	
8	B1j7	-	[円形]	0.95×[0.90]	10	緩斜	-	自然	-	本跡→SD2

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模(m) 長径×短径	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
9	D1e6	N-12°-E	楕円形	1.33×0.88	20	緩斜	平坦	自然	土師器	
10	C1d9	N-63°-W	楕円形	0.76×0.60	6	外傾	平坦	自然	-	
11	D1h9	N-41°-W	楕円形	0.50×0.36	22	外傾	皿状	自然	-	
12	C1j9	N-26°-E	楕円形	0.82×0.50	24	外傾	平坦	自然	-	
13	D1i4	N-66°-W	楕円形	0.61×0.53	8	緩斜	平坦	自然	-	
14	D1h9	-	円形	0.35×0.34	15	外傾	平坦	-	-	
15	D1h9	-	円形	0.37×0.36	41	外傾	平坦	-	-	
16	D1b7	N-36°-E	楕円形	1.17×0.78	18	外傾	平坦	人為	-	
17	D1e5	N-17°-E	楕円形	0.67×0.58	13	緩斜	皿状	自然	-	
18	D1e5	N-18°-E	楕円形	0.37×0.29	36	外傾	皿状	-	-	
19	D1f6	N-11°-W	楕円形	1.41×1.08	30	緩斜	皿状	自然	縄文土器・土師器	
20	D1f7	-	円形	0.42×0.41	14	外傾	平坦	自然	-	
21	D1g8	N-81°-W	楕円形	0.55×0.48	26	外傾	平坦	自然	-	
22	D1j6	-	円形	0.77×0.76	16	緩斜	皿状	自然	-	
23	D1i6	N-35°-W	楕円形	0.98×0.86	16	緩斜	平坦	自然	-	
24	E1a7	-	円形	0.86×0.84	25	外傾	皿状	自然	土師器	
25	E1a0	N-49°-W	長方形	1.55×0.57	55	直立	平坦	人為	須恵器	SK41→本跡→SK26
26	E1b0	N-40°-E	長方形	1.57×0.70	15	外傾	平坦	自然	土師器	SK25→本跡
27	E1e9	N-35°-E	長方形	1.48×0.59	21	外傾	平坦	人為	-	
28	D1h6	N-52°-E	楕円形	0.28×0.25	24	外傾	U字状	-	-	
29	E1c4	N-68°-W	長楕円形	1.47×0.45	44	外傾	平坦	人為	土師器	
30	E1b4	N-66°-W	長方形	1.65×0.55	60	直立	平坦	人為	土師器	
31	E1a3	-	円形	1.05×0.98	15	緩斜	平坦	自然	-	
32	D1i2	-	円形	0.99×0.97	22	緩斜	皿状	自然	土師器	
33	D1f3	N-15°-E	長方形	1.30×0.50	22	直立	平坦	人為	-	
34	A1g3	N-88°-W	楕円形	0.95×0.56	28	外傾	平坦	自然	-	SD5→本跡
35	B1h3	N-40°-E	楕円形	0.64×0.46	16	外傾	平坦	自然	-	
36	B1j2	N-4°-W	楕円形	0.60×0.35	19	外傾	皿状	人為	-	
37	B1j2	-	円形	0.40×0.38	18	緩斜	皿状	人為	-	
38	C1c2	N-32°-E	長方形	1.85×0.80	22	緩斜	平坦	人為	-	
39	B1j2	-	円形	0.30×0.28	23	外傾	皿状	人為	-	
40	D1d9	N-65°-W	楕円形	1.27×0.85	23	外傾	平坦	自然	-	
41	E1a0	-	円形	0.78×0.76	15	緩斜	平坦	自然	-	本跡→SK25
43	C1g3	N-31°-E	[楕円形]	0.70×(0.95)	22	外傾	平坦	人為	-	本跡→SI9
44	B1e5	-	円形	0.12×0.12	38	直立	平坦	-	-	

(3) 溝跡(第41図)

時期・性格ともに不明な溝跡5条については、規模・形状等について実測図と一覧表を掲載する。

第1号溝跡土層解説

- 1 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 3 極 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 5 褐 色 ロームブロック中量

第2号溝跡土層解説

- 1 暗 褐 色 炭化粒子少量, ロームブロック微量
- 2 褐 色 ロームブロック少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 褐 色 ローム粒子少量

第4号溝跡土層解説

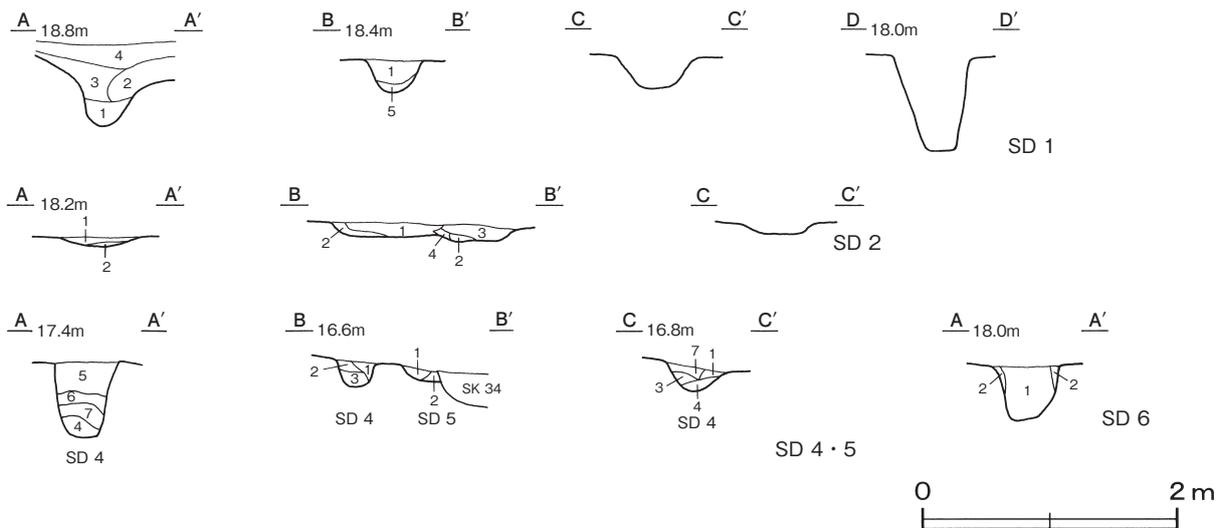
- 1 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 褐 色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 明 褐 色 ローム粒子中量
- 5 褐 色 ロームブロック少量
- 6 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 7 黒 褐 色 ローム粒子微量

第5号溝跡土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 2 明 褐 色 ローム粒子中量

第6号溝跡土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 明 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量



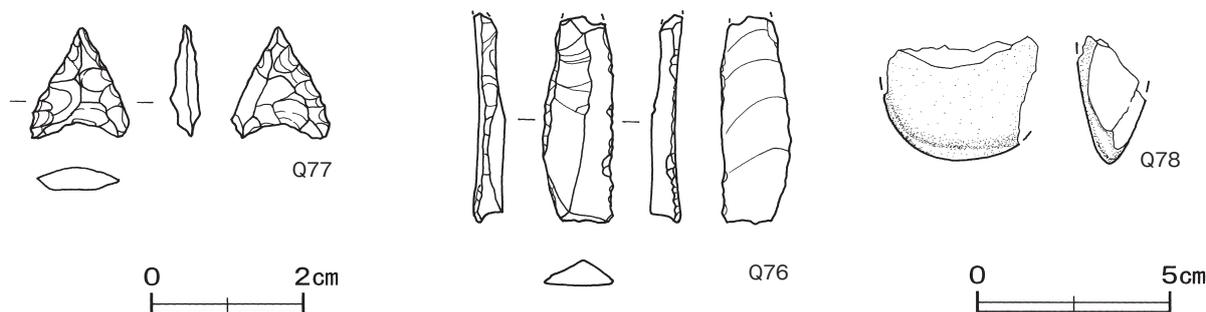
第 41 図 第 1・2・4・5・6号溝跡実測図

表 7 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (m)				覆土	断面形	出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長さ	上幅	下幅	深さ				
1	B1c2 ~ C1j2	N - 24° - E N - 64° - W	屈曲	(84.28)	0.26 ~ 0.82	0.12 ~ 0.52	0.76	自然	U字状	土師器	SI3 → 本跡
2	B1i8 ~ C1a7	N - 32° - E	直線状	5.54	0.34 ~ 0.61	0.24 ~ 0.44	0.12	自然	U字状	土師器	SK8 → 本跡
4	A1g2 ~ A1h4	N - 65° - W	直線状	(7.80)	0.31 ~ 0.46	0.16 ~ 0.28	0.52	自然	U字状	縄文土器	
5	A1g2 ~ A1g3	N - 69° - W	直線状	(3.80)	0.28 ~ 0.36	0.15 ~ 0.22	0.08	自然	逆台形	-	本跡 → SK34
6	B1h8 ~ B1i0	N - 50° - W	直線状	(9.00)	0.31 ~ 0.62	0.18 ~ 0.26	0.42	人為	逆台形	土師器	

(4) 遺構外出土遺物 (第 42 図)

遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものを実測図と遺物観察表で記述する。



第 42 図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第 42 図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備考
Q 76	ナイフ形石器	(5.50)	1.90	0.60	(8.70)	頁岩	縦長剥片を素材とする 側縁に背面からプランティングを施す 先端欠損	SI8 覆土中	PL10
Q 77	石鏃	1.48	1.30	0.33	0.44	チャート	両面調整の平基無茎鏃	SI2 覆土中	
Q 78	磨製石斧	(3.40)	(4.10)	(1.70)	(22.50)	蛇紋岩	両刃 全面研磨	SI9 覆土中	

第4節 ま と め

今回の調査で、縄文時代の住居跡と陥し穴、炉跡、弥生時代後期の住居跡、古墳時代前期、中期の住居跡や土坑、平安時代の住居跡や土坑などを確認した。ここでは、確認した遺構や遺物から当遺跡の変遷を追い、また古墳時代中期に当集落で行われていたと考えられる、石製模造品の製作工程について記述する。

1 遺跡の変遷

(1) 縄文時代

当時代の遺構は第12号住居跡、第1号陥し穴、第1号炉跡を確認した。時期は、住居跡と炉跡は出土遺物が少ないため特定ができないが、陥し穴は出土した土器片から前期中葉の可能性がある。遺構は調査区の中央部から北部にかけて点在し、集落の中心は調査区域外の西方に広がる可能性がある。居住空間として利用された時期と、狩猟場として利用されていた時期があったようである。

(2) 弥生時代

当時代の遺構は、調査区中央部やや北西寄りの位置から第14号住居跡1軒を確認しただけである。時期は出土した壺から後期後葉に比定できる。これらの土器は口縁部が3点、胴部が1点、底部が1点の計5点である。口縁部のものは口唇部に原体を押圧し、附加条一種（附加2条）の施文を施し、貼瘤は現状で見られない。胴部のもは無文帯で附加条一種（附加2条）を区切っている。底部には木葉痕がみられる。器形は口径が12cm前後で、器高は15～20cmほどになると考えられる小形の壺型土器が主に出土している。これらの土器には貼瘤は確認されていないが、縄文の施文や、器形などが霞ヶ浦周辺に分布する土器と類似するものである。当時代の集落は縄文時代と同様、調査区域外の西方に広がっていると考えられる。

(3) 古墳時代

当時代の遺構は調査区北部から中央部にかけて点在し、住居跡10軒、土坑1基を確認した。そのうち、住居跡2軒が前期である以外はいずれも中期である。前期の住居跡は、前葉の第10号住居跡が中央部西寄りの台地平坦部に位置し、後葉の第3号住居跡は北部の台地平坦部に位置している。これら2軒と同時期の住居跡は周辺には確認されていないが、調査区域外に存在しているものと考えられる。中期の住居跡は、中葉に比定できる第9号住居跡、時期を特定できなかった第6号住居跡のほかは、後葉に比定できる。これらの住居跡は、北部の台地傾斜面に位置する第1・2・4・7・8号住居跡の一群、中央部の台地平坦部に位置する第5号住居跡の2群に分かれる。北部の住居跡群の内部構造は、炉はすべての住居跡に付設され、第7号住居跡のみに竈が付設されている。炉は第1・2号住居跡では1基、第4・7・8号住居跡では複数基確認されていることから、住居の使用期間が異なっている可能性がある。出土した土器は、椀、埴、甕などである。椀は口縁部が内彎するもの、直立するもの、外彎するものがあり、底部は丸底である。外面はヘラ削りにより整形している。埴は口縁部から頸部までしか遺存していないため、全体は不明であるが、外面をヘラ削りで整形している。甕は口縁部が「く」字になるもの、中位から外彎するものがあり、体部が球状のものと長胴化するものに分けられる。外面はヘラ削りにより整形されている。甕はいわゆる鉢形甕で、丸底・単孔式のものが出土している。

(4) 平安時代

当時代の遺構は住居跡1軒、土坑2基が確認された。調査区南東部の台地傾斜面に位置する9世紀前葉

に比定できる第13号住居跡と、調査区南西部の台地平坦部に位置する9世紀前葉に比定できる第2号土坑、第13号住居跡を掘り込んでいる10世紀後半に比定できる第42号土坑である。これらは他の時代に比べると南方に分布し、土地の利用に変化が見受けられる。

2 石製模造品の製作工程について

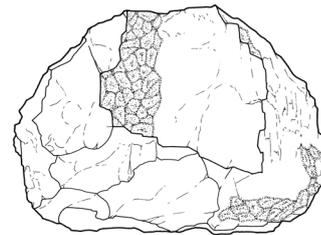
古墳時代中期後葉の住居跡からは、滑石製模造品の成品や碎片など、数多くの滑石片が出土した。総出土量は5644点、4214.36gである。これらの多くは住居を埋め戻した土に混入していたものであり、工房自体の確認には至らなかったが、周辺に工房が存在していたと考えられる。特に第1・2・7号住居跡の覆土中から多く出土している。これらの滑石をもとに滑石製模造品の製作工程の一端を復元してみたいと思う。確認された滑石片は大きさ・形・整形の有無などから分類することが可能である。そして、この分類された各々を細かく整理し、観察することにより、本跡の石製模造品の製作工程を試案する。

(1) 滑石片の分類

出土した未成品や滑石剥片のうち、製作工程が復元できる種類は白玉である。ここでは出土資料を分類していく。以下表記するにあたり、基本的には鋳物が素材であることから、大きな塊から小さな塊へと対象物は変化していく。この逆はあり得ないため、大から小へと表記していくこととする。

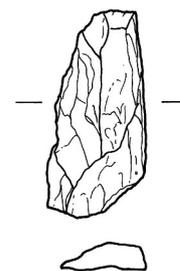
A 大形石材

第1号住居跡から出土しているQ12がこれに該当する。長さ11.9cm、幅16.4cm、厚さ12.0cm、重さ3290gと出土した滑石片の中では一番大きな石材である。表面に敲打痕があることから若干の剥片を採取した原石または核と思われる。



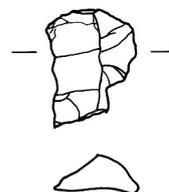
B 中形石材①

第1号住居跡から出土しているQ10・Q11、第4号住居跡から出土しているQ50・Q53、第7号住居跡から出土しているQ71～Q73、第8号住居跡から出土しているQ74などが該当する。大きさは長さ2cmから9cm、幅1cmから5cm、厚さ0.3cmから2.3cm、重さ0.5gから54gである。形状は板状のものから三角錘状、三角柱状のものなど様々である。石材の表面に研磨した痕跡は確認できないが、Q53には切截痕がある。これらは原石を打ち割って、ある程度成品を意識して石の大きさを揃える段階のものである。



C 中形石材②

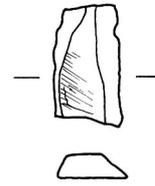
第1号住居跡から出土しているQ7～Q9、第2号住居跡から出土しているQ44・Q46～Q48、第4号住居跡から出土しているQ51・Q52、第7号住居跡から出土しているQ67・Q70、第8号住居跡から出土しているQ75などが該当する。大きさは長さ0.7cm



から 6.3cm, 幅 0.7cm から 3.2cm, 厚さ 0.2cm から 2 cm, 重さ 0.2g から 17g である。多くの石材は板状に加工され, 表面に研磨した痕跡はない。

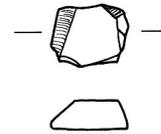
D 小形石材①

第 2 号住居跡から出土している Q 43・Q 45, 第 7 号住居跡から出土している Q 66・Q 68～Q 70 が該当する。大きさは, 長さ 0.8cm から 3 cm, 幅 0.7cm から 1.9 cm, 厚さ 0.25cm から 1.09cm, 重さ 0.36g から 0.73g である。いずれも表面を研磨し, 形を整えている。



E 小形石材②

第 2 号住居跡から出土している Q 37・Q 41・Q 42, 第 7 号住居跡から出土している Q 64・Q 65 などが該当する。大きさは, 径 0.63cm から 0.8cm, 厚さ 0.3 cm から 0.45cm, 重さ 0.2g から 0.48g である。石材の表面は研磨し, 側面は整形せず, 穿孔もされていない。



F 小形石材③

第 1 号住居跡から Q 4～Q 6, 第 2 号住居跡から Q 23・Q 24・Q 26～Q 36・Q 38～Q 40, 第 7 号住居跡からは Q 61～Q 63 などが該当する。大きさは, 径 0.46cm から 1.00cm, 厚さ 0.15cm から 0.35cm, 孔径 0.12 cm から 0.25cm, 重さ 0.05g から 0.24g である。表面は研磨されているが, 側面は研磨されていない。すべて穿孔に失敗したため, 破損している。



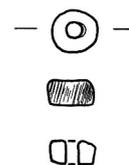
G 小形石材④

第 1 号住居跡からは Q 1～Q 3, 第 2 号住居跡からは Q 16・Q 18～Q 22, 第 7 号住居跡からは Q 59・Q 60 が該当する。大きさは, 径 0.6cm から 0.95cm, 厚さ 0.2cm から 0.43cm, 孔径 0.12cm から 0.2cm, 重さ 0.13g から 0.5g である。表面は研磨されているが, 側面は未研磨である。すべて穿孔されている。



H 完成品

第 2 号住居跡からは Q 13～Q 15・Q 17, 第 4 号住居跡からは Q 49, 第 7 号住居跡からは Q 54～Q 58 が出土している。大きさは径 0.42cm から 0.68cm, 厚さ 0.23cm から 0.42cm, 孔径 0.1cm から 0.2cm, 重さ 0.07g から 0.18g である。石材は全面研磨され, すべて一方から穿孔されている。



(2) 分類から推測される製作工程

以上の分類から製作工程を推測していくこととする。まず、Aは白玉を作るにあたり、滑石の産出地からこの大きさを切り出し、運んできたものと思われる。そして、この大きな塊を打ち割ってB段階に移行する。この段階では石材は三角柱や三角錐など様々な形状であるため、C段階の板状に加工する。この板状の石材の表面を研磨し、表面を整えた段階がDである。E段階は、研磨した石材の平面形を多角形に打ち割り、円形に近づける。この段階で、穿孔に移るのだが、穿孔に失敗したものがF段階であり、穿孔が成功して、側面の研磨が残る段階がGである。全面研磨し、G段階に比べると一回り小振りになり完成（H段階）である。

(3) 製作工程の検討

以上が出土した滑石片で復元した白玉の作業工程である。この工程を先学の研究¹⁾に照らし合わせてみると、A = 原石、B = 荒割品、C = 形割品、D = 研磨品、E = 穿孔品、F = 穿孔失敗品、G = 整形品、H = 完成品と、対応すると考えられる。

表8 滑石製白玉製作工程比較表

米根井向遺跡分類	大形石材 例：SI 1 Q12	中形石材① 例：SI 7 Q73	中形石材② 例：SI 7 Q67	小形石材① 例：SI 7 Q66	小形石材② 例：SI 7 Q64	小形石材③ 例：SI 7 Q63	小形石材④ 例：SI 7 Q60	小形石材⑤ 例：SI 7 Q56
寺村氏作業工程	原石	荒割品	形割品	研磨品	穿孔品	穿孔失敗品	整形品	完成品

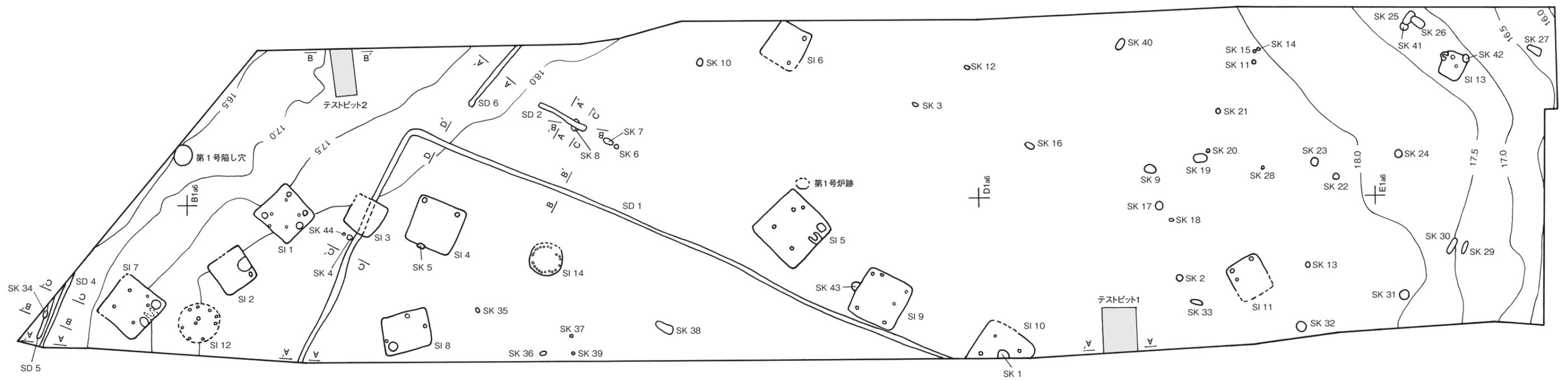
この作業工程は、つくば市の元宮本前山遺跡第6号住居跡で示されている作業工程²⁾と類似しており、白玉作りにおいては一般的な工程であると考えられる。

以上のように北西部の住居跡群の覆土中から出土した滑石片は製作工程が明確で、この様に出土していることは、周辺に工房跡の存在を想定することができる。また、貼床覆土中から滑石片が出土していることは、住宅建築時に他の場所から客土している土中に含まれていたことが想定され、古墳時代中期後葉以前から集落内で玉作りが行われていたと考えられる。

以上が今回の調査で確認できた事項である。調査区域は台地の東部に設定されていることもあり、集落の東端の調査となったと考えられる。このため、集落の全貌を明らかにすることは今後の課題となった。

註

- 1) 寺村光晴「玉作とその流通」『ものづくりの考古学－原始・古代の人々の知恵と工夫』大田区立郷土博物館 2001年2月
- 2) 高野裕璽「元宮本前山遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告2」『茨城県教育財団調査報告』第265集 2006年3月

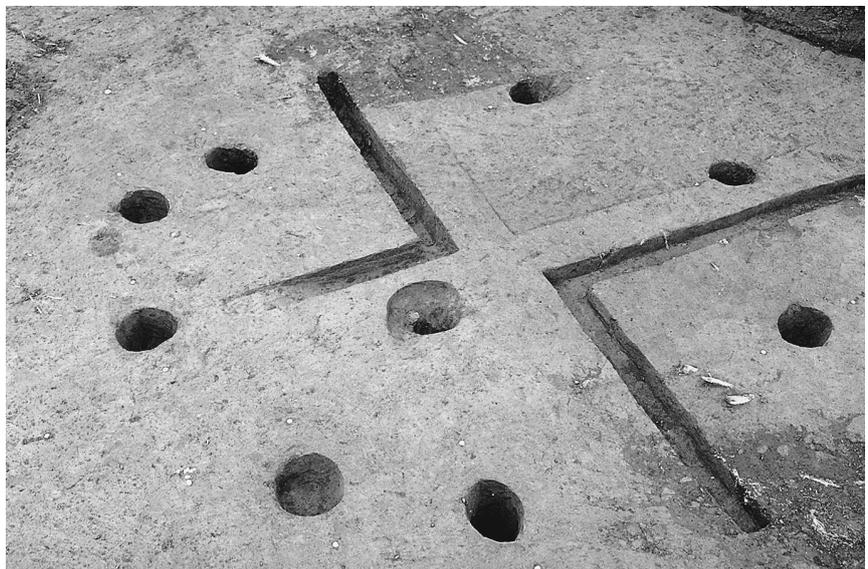


第43図 米根井向遺跡遺構全体図

写 真 图 版



調査終了状況
(北から)



第12号住居跡
完掘状況
(北東から)



第1号陥し穴
完掘状況
(北から)

PL2



第1号住居跡
遺物出土状況
(南東から)

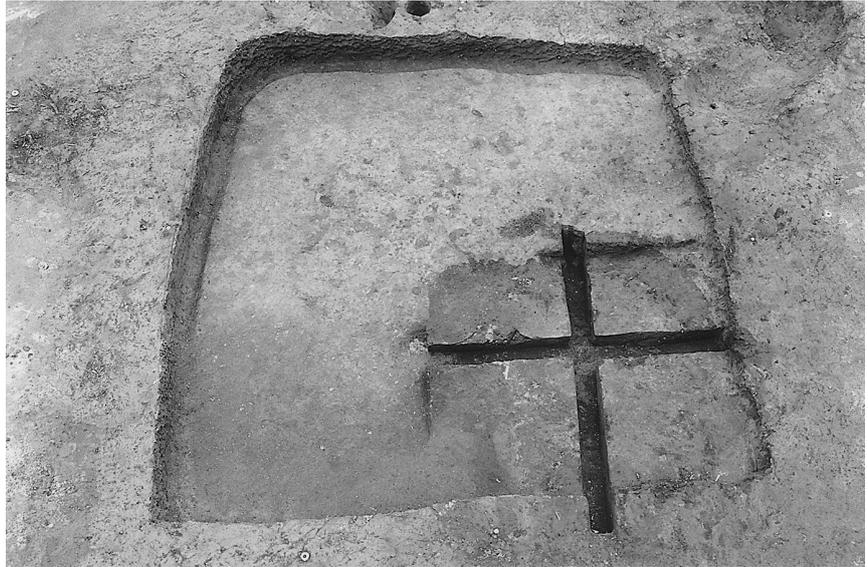


第1号住居跡
遺物出土状況
(南東から)



第2号住居跡
遺物出土状況
(北東から)

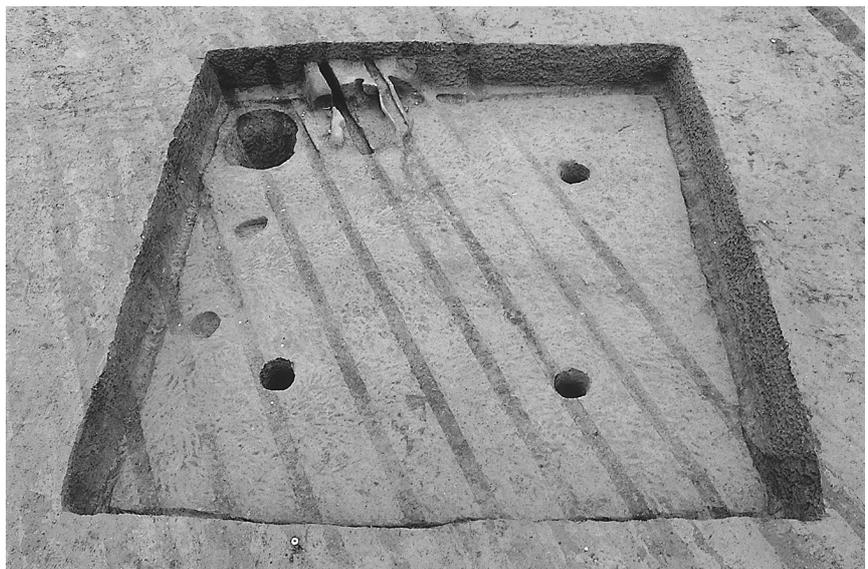
第 3 号 住居 跡
完 掘 状 況
(南 東 から)



第 4 号 住居 跡
遺 物 出 土 状 況
(東 から)



第 5 号 住居 跡
完 掘 状 況
(北 東 から)



PL4



第5号住居跡
竈遺物出土状況1
(東から)



第5号住居跡
竈遺物出土状況2
(東から)



第6号住居跡
完掘状況
(南から)

第7号住居跡
遺物出土状況
(北東から)



第7号住居跡
竈遺物出土状況1
(北東から)



第7号住居跡
竈遺物出土状況2
(北東から)





第7号住居跡
竈遺物出土状況3
(東から)



第8号住居跡
遺物出土状況
(南から)



第9号住居跡
遺物出土状況
(東から)

第 9 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況
(南 西 か ら)



第 10 号 住 居 跡
完 掘 状 況
(南 東 か ら)



第 13 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況
(西 か ら)





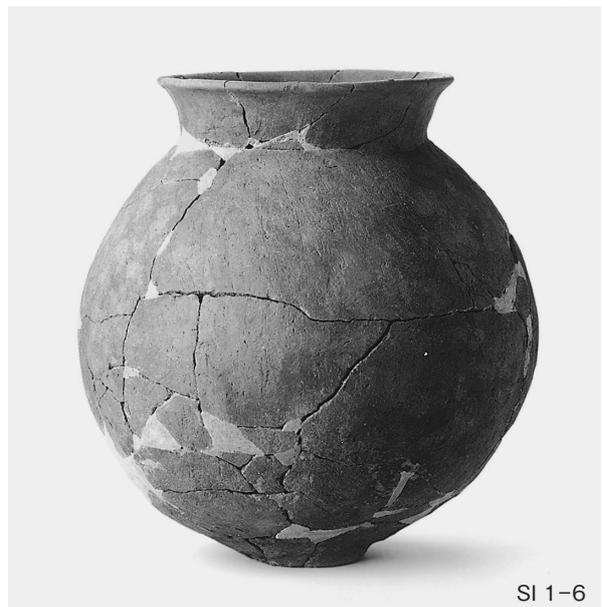
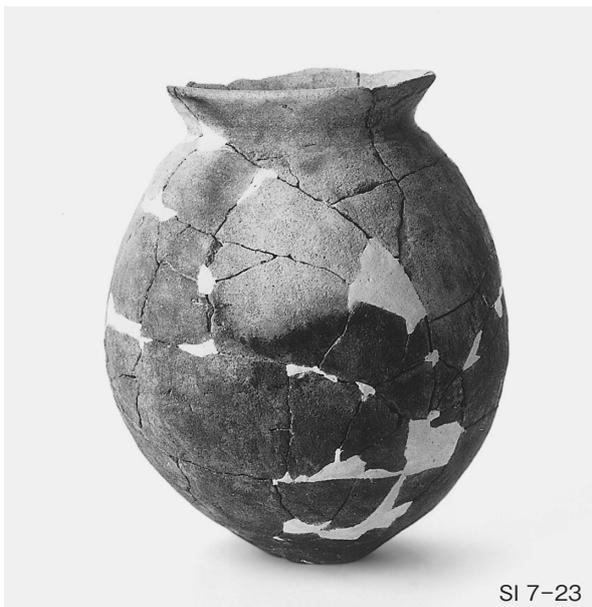
第13号住居跡
竈遺物出土状況
(南西から)



第11号住居跡
完掘状況
(北東から)

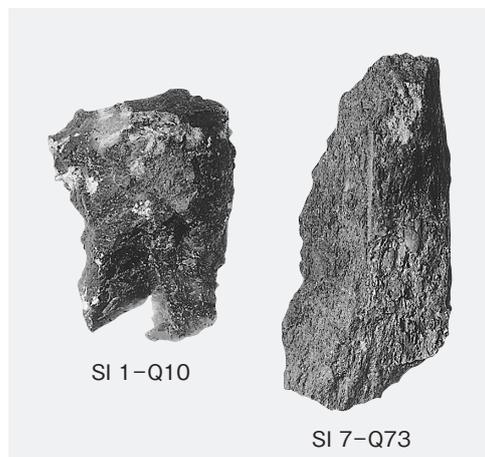
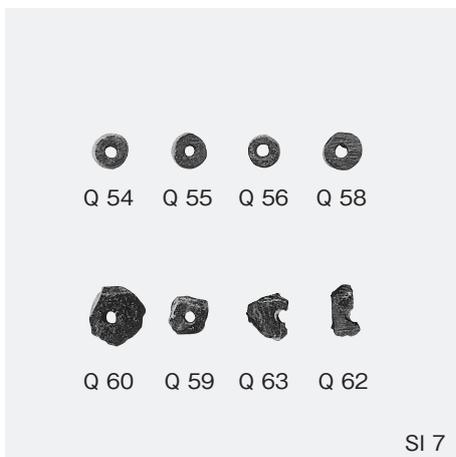
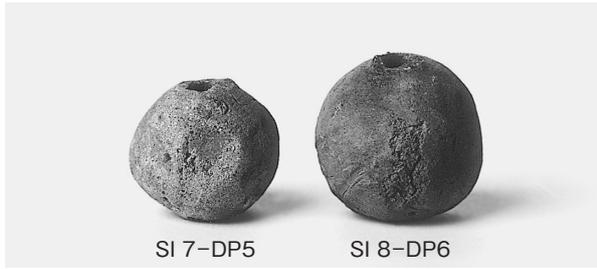


第1号溝跡
完掘状況
(南東から)



第1・4・5・7・13・14号住居跡，第42号土坑出土遺物

PL10



第1・4・7・8・13・14号住居跡，遺構外出土遺物

抄 録

ふりがな	こめねいむかいいせき							
書名	米根井向遺跡							
副書名	主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第333集							
著者名	鹿島直樹							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2010(平成22)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
こめねいむかいいせき 米根井向遺跡	いばらきけんいなしきぐん 茨城県稲敷郡 あみまちおおあざじょうじょう 阿見町大字上条 フタヒ1634番地の 14	084433 - 180	36度 0分 23秒	140度 14分 53秒	16 ~ 19m	20080602 ~ 20080731	6,000㎡	竜ヶ崎阿見線バイパス整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
米根井向遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡	1軒	縄文土器			
			炉跡	1基				
		弥生	竪穴住居跡	1軒	弥生土器			
		古墳	竪穴住居跡	10軒	土師器, 須恵器, 石製品			
			土坑	1基				
	平安	竪穴住居跡	1軒	土師器, 須恵器				
		土坑	2基					
その他	縄文	陥し穴	1基	縄文土器				
	時期不明	土坑	41基					
		溝跡	5条					
要約	当遺跡は、縄文時代、古墳時代中期後葉から後期前葉、平安時代にかけて集落が営まれていることが確認できた。古墳時代中期後葉には竈が導入されており、炉から竈への転換の時期である。また、住居跡内からは滑石片が多量に出土し、集落内で石製模造品の製作が行われていた可能性を示している。							

茨城県教育財団文化財調査報告第 333 集

米根井向遺跡

主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス
整備事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

平成 22 (2010) 年 3 月 19 日 印刷
平成 22 (2010) 年 3 月 24 日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 有限会社 クリエイティブサンエイ
〒311-4302 茨城県東茨城郡城里町那珂西 1879-5
TEL 029-288-7778